GAKKEN MOOK
クトゥルー神話の
謎と真実
ヴィジュアル版
謎シリーズ
巻頭特別インタビュー
佐野史郎が語る
クトゥルー神話の魅力
暗黒と幻想に満ちた
宇宙的恐怖の
深淵をのぞく!!
人類が誕生もしていない太古の時代に
異次元の闇に封印されし異形の神々――。
彼らは決して滅んでなどいない。
復活を夢見て
今も邪悪な波動を送りつづけているのだ。
特別寄稿
アンソロジスト・クトゥルー文学史家
東雅夫
「日本を侵蝕するクトゥルー神話」

クトゥルー神話の
謎と真実

巻頭特別インタビュー

佐野史郎が語るクトゥルー神話の魅力

映画、ドラマ、舞台と、数多くの作品に出演し、演技力の高さと圧倒的な存在感で人気の佐野史郎氏。俳優業のみならず、ミュージシャン、映画監督とその活動の幅は広く、さらには怪奇幻想文学ファンにして、大のクトゥルー神話好きという面も持つ。そんな氏に、クトゥルー神話世界の魅力について語ってもらった。

取材・文●門賀美央子　撮影●福島正大

ラヴクラフトに惹かれたのはどことなく漂う「暗黒な感じ」から

僕がH・P・ラヴクラフトと初めて出会ったのは「幻想と怪奇」という雑誌でのことでした。1973年に発行された第2号「吸血鬼特集」の中に「我が怪奇小説を語る」と題して、ラヴクラフトが友人の怪奇小説作家、フランク・ベルナップ・ロングに宛てた書簡の翻訳が掲載されていたんです。翻訳者は団精二。この「団精二」なる人物が、実はあの荒俣宏さんだなんてことは、当時は知らなかった(笑)。

佐野史郎（さの・しろう）
俳優。1955年生まれ。6歳まで東京で過ごし、以後、高校卒業まで島根県松江市で暮らす。上京後、シェイクスピア・シアターの創立に参加。状況劇場を経て、86年に『夢みるように眠りたい』で映画デビュー。92年のドラマ『ずっとあなたが好きだった』の冬彦役で大きな話題を呼ぶ。映画、テレビ、舞台と数々の作品に出演するほか、ミュージシャンとしても定期的にライブをこなし、99年には自身の原案を映画化した『カラオケ』で映画監督としてもデビューを果たす。また、独自のクトゥルー神話世界を描いた『曇天の穴』をはじめ、エッセイや小説も執筆するなど、多方面で活躍中。

ともかく書簡を読み進めていくと、聞いたこともない人名や書名がいっぱい出てくるんですよ。しかも、冒頭の一文で、ラヴクラフトを「今世紀最大の幻想作家」と紹介していながら、肝心の小説はどこにも掲載されていない。

興味がわいたのに詳細はわからない、という状態になって、そのせいでラヴクラフトという人物とその作品のことが気になってしょうがなくなった。それと、どこか「暗黒な感じ」を受けとったんでしょうね。その書簡に書かれていた内容から。

僕は、子どものころから江戸川乱歩が大好きで、ポプラ社から出ていた児童向けの乱歩小説などを読みあさりました。だけど、同じくポプラ社から出ていたルパン・シリーズなんかには、あまり食指が動かなかった。謎解きには、興味が向かなかったんです。それよりも、乱歩小説の「変なもの」がいろいろ出てくるようなところ、そこにわくわくしていたんだけど、ラヴクラフトの書簡からも、それに近いものを感じたんだと思います。

当時読むことができたラヴクラフトの小説は、『怪奇小説傑作集』に収録されている『ダンウィッチの怪(ダニッチの怪)』ぐらいでね。「なかなか読めない」っていう煽りもあって、余計にラヴクラフトという作家に惹かれていきました。

翌年になって、荒俣さんが創土社から『ラヴクラフト全集』を出しはじめて、やっとさまざまな作品が読めるようになったんですが、これは本当に嬉しかったですね。読みたかったものがまとめて読めるんだから。荒俣さんの翻訳もよかったし。

佐野氏が初めてラヴクラフトと出会った「幻想と怪奇」(1973年7月号)。

佐野氏の蔵書の一部。

「冬彦さん」ブームが『インスマスを覆う影』誕生のきっかけ?

俳優の仕事を始めた当初から、ラヴクラフト作品を映像化したいということは、ずっと思っていました。それが実現したのが、テレビドラマ『インスマスを覆う影』でした。当時人気だったTBSの「ギミア・ぶれいく」というバラエティ番組のスペシャルドラマとして、1992年に放映された作品ですが、これは本当に印象深いですね。いまだにいろいろ聞かれることも多いですし。

これを制作するにいたるまでには、地道な努力とさまざまな伏線があったんです。90年に同じく「ギミア・ぶれいく」の年末スペシャルドラマで、藤子不二雄Aさん原作の『オカルト勘平』というホラードラマをやったんですね。主役は渡辺満里奈ちゃんだったかな。僕はそれに、チャネラー役で出演したんです。

そのドラマの中で、満里奈ちゃんを眠らせてレコードを聴かせる、っていうシーンがあったんですが、そのときに「これはエーリッヒ・ツァンの音楽です」っていう台詞を足してもらったの。満里奈ちゃん、ポカンとしてましたね。わかんないですよね、いきなりそんなこと言われたって(笑)。

そのことがきっかけになって、やはりラヴクラフト好きだったTBSのプロデューサーの那須田淳氏や脚本家の小中千昭氏なんかとクトゥルー話で盛りあがって、「そんなにクトゥルーものの映像化をやりたいなら、ドラマの企画にして出してみよう」って話になったんですよ。

そうこうしていたら、92年の夏ドラマ『ずっとあなたが好きだった』で、僕が演じた「冬彦」がブームになっちゃって、ものすごい視聴率を稼いだ。そのごほうびってわけでもないんだろうけど、出した企画が最終的に通っちゃったんです。

凝りに凝った作品作りと撮影中の奇妙な体験

自分で言うのもなんだけど、これは画期的な出来事、大変な事件でしたよ。日本全国のラヴクラフト・ファンは、びっくりしたと思います。

冒頭では、意識的に「原作ラヴクラフト」っていうのを、バーンと出しましたからね。一般的な原作つきドラマでは、原作者の名前はテロップでちょこっと出すっていうのが普通なんですが、ここでは前面に出ている。

1992年の作品『インスマスを覆う影』。クトゥルー神話の世界観を見事に描きだした秀作だが、残念ながらビデオは廃盤のため、入手は困難。

佐野氏お手製の『ネクロノミコン』と「H・P・ラヴクラフト集」。『ネクロノミコン』はドラマ『インスマスを覆う影』に、石橋蓮司氏が読んでいる本として登場している。

半人半魚の神、ダゴン。古代パレスチナのペリシテ人に信奉されており、その名は『旧約聖書』にも記されている。

幸いなことに、作り手側がみんな好きだったから、すごく力を注いだ、凝ったドラマ作りをすることができました。

それから、ドラマの舞台こそ日本に置き換えましたが、地名は赤牟（あかむ）や蔭洲升（いんすます）など、音はそのままにして、小道具なんかもやりすぎなくらい凝りまくりましたね。

たとえば、僕が扮する主人公が蔭洲升の村の食堂で煮魚を食べるシーンがあるんですが、箸をつけようとすると、その煮魚がピクピクッと動く。これなんか、魚のロボットを作ったんですよ、とても精密な。上だけ本物の魚を載せてね。実はすごくお金がかかっているんです（笑）。

それから、ラストシーンあたりで、村の郷土資料館長役の石橋蓮司さんが本をパラパラとめくるシーンがあるんですが、そこも最初はそのへんにあった適当な本を読んでいたのを見て、「これはいかん！」と。慌てて僕の自家製『ネクロノミコン』を手渡しました。「蓮司さん、これを読んでください！」って（笑）。蓮司さん、なんだかさっぱりわかんないって顔してたね（笑）。

極めつけはダゴン召還のシーンです。これは僕の小説『怪奇俳優の手帳』にも書いたんですが、あそこに書いてあるエピソードは、ほとんど実話なんですよ。

召還シーンを撮影する段になって、美術さんが適当な祠を見つけてきたんです。祠があるのは、海辺の岩場の洞窟で、そこにはもとから本物の祭壇があった。地元の人に聞いても、それが何を祀った祭壇かはわからないっていうんですね。昔からあったのは間違いないらしいんだけど。

なかなか雰囲気のある場所だったし、じゃあそこに召還儀式のためのセットを作ろうってことになって、作業が始まった。作業途中に様子を見にいくと、美術さんがもっともらしいけどいいかげんな絵を描いていたんです。再度、「これはいかん！」と（笑）。

そこで、またまた件の『ネクロノミコン』を持ちだしてきて、そこに描いてある図像や

記号を参考にした絵に描き直してもらったんです。そうしたら、描き終わったとたん、突然とんでもない嵐になって、美術さんが洞窟から出られなくなってしまったんですよ。僕らも海辺から避難して、2時間ぐらい撮影は中止。これには、ホント驚きましたね。

しかも、これは7年後になって聞いたのですが、翌日、その洞窟の裏に、地元の漁師さんの水死体が上がっていたとか。また、クランクアップ後、セットを作っていたスタッフの方が急に亡くなられたらしいんです。もちろん偶然に過ぎないのでしょうが、ふたりもの方が亡くなったというのはね……。

ドラマ自体はラヴクラフトの小説をもとにした虚構の話ですが、ダゴンはもともと古代の海の神様ですからね。なんとも不思議な、薄ら寒い思いがしたものです。

今のところ実現できたのは、この『インスマスを覆う影』のみですが、ほかの作品の映像化についても、あきらめてはいません。インスマスをやったんだから、あとは『ダニッチの怪』と『クトゥルーの呼び声』をやって、ラヴクラフト3部作として仕上げたい。いつか必ずやり遂げたいですね。

「感覚の穴」を広げるような描写がクトゥルー神話の大きな魅力

今、世界はグローバル化に向かって進んでいるっていうじゃないですか。「世界はひとつ」で、「ひとつ」の考え方や尺度にどんどん統一しようとしている。僕はそういうの、大嫌いなんですよ。

国際交流を盛んにして、それぞれの文化を大事にして、お互いを理解しあいましょうなんて、聞こえはいいけど、実際にはわかりあえるわけがない。っていうか、わかりたくない(笑)。

「混ぜるな危険」じゃないけど、性質の違う薬品同士を混ぜたら危ないでしょう？ なのに、なぜか人間だけは化学反応を起こさないと思っている。だけど、実際に異文化が出会ったときには、必ず戦争が起きているんです。その事実を無視して、「人と人は解(わか)りあえるも

のだ」という根拠のない前提に立ちつづける限り、衝突は起こりつづけますよ。

その点、ラヴクラフトは異文化に対して、はじめから理解しようなんてしていない。そこがいい（笑）。彼はアメリカにいながらも、非常にイギリス紳士然として、極端なアングロサクソン的なものの見方で世界を見ているけれど、アニミズムに対して憧憬がある。

ネイティブな土着の感覚のものと相対するときに、それを受けいれ、融けこもうとするのではなく、まったく異質なものとして認識する。だからといって、その土着のものが「わけがわからなくて怖いから殺してしまえ」っていうのでもなく、それが何かを知るために、徹底的な上から目線、白人至上主義の眼差しをもってはっきりさせようとする。

けれど、そうはいっても彼自身の中にもやはり土着な部分があって、その部分を縦横無尽に使って「わけのわからないもの」に対峙していった挙句に生まれたのが、「クトゥルー神話大系」だったんじゃないかなって思うんですよ。

「わかろうとしない探求心」とでも言えばいいでしょうか。それがすごく大事なんです。その控えめさというか、臆病さというか、僕はそこにものすごい生命エネルギー、生き生きしたものを感じるんだな。

クトゥルー神話は、温度とか空気感とか、五感のあらゆるものに訴えかけてくる描写が多いんです。特に「臭い」の描写などは際だっていると思うんですけど、とにかくあらゆる「感覚の穴」を広げるような書き方をしています。文章としては悪文に入るかもしれません。ですが、頭で想像するんじゃなくて、体全体にそれを感じさせるような力強さがあるんですよ。

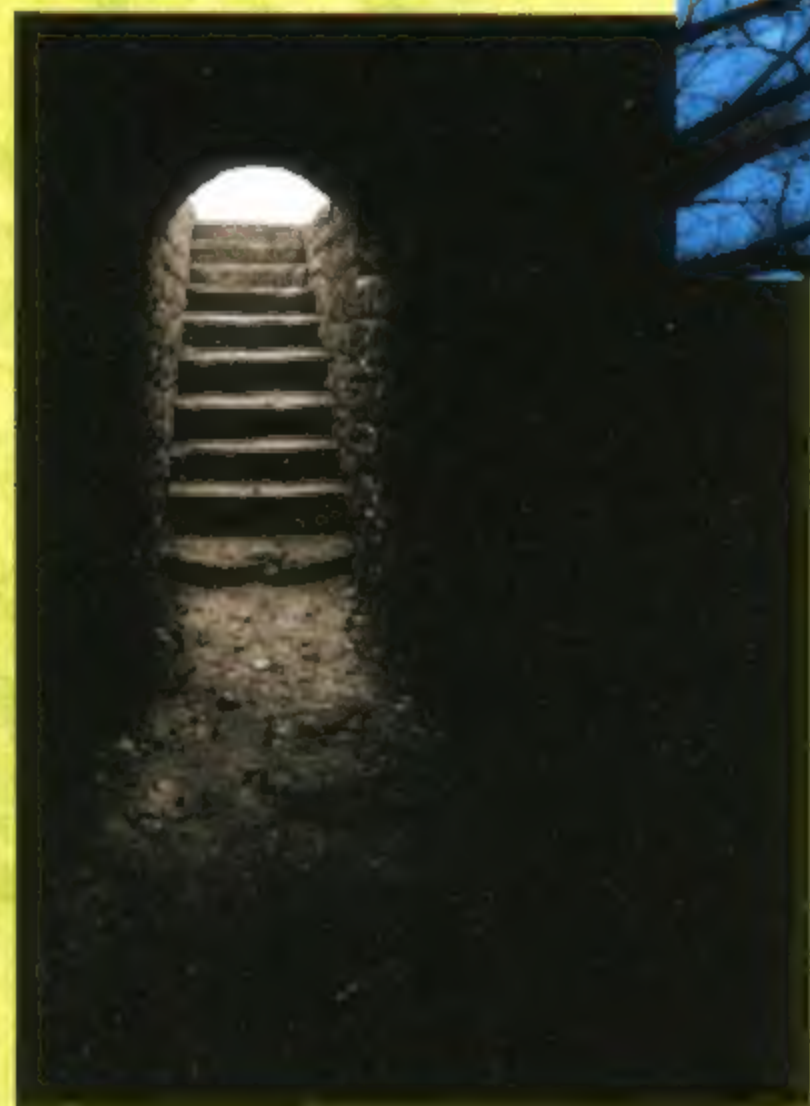
たとえば、僕はウボ＝サスラという邪神が好きなんですが、あれには、何かすべての原点のようなものを感じます。

それから、『ダニッチの怪』の山が動くシーン。あのシーンなんかは相当好きです。ああいう、大きいものがよく見たら動いてるっていうようなシチュエーションがいいんですよ。そういうものに怖さを感じるんです。「この怪物が起きあがったら、いったいどんなことになるんだろう」と想像したりして。まあ、あんなのが起きあがったときには、もうこっちは生きてはいないでしょうけどね（笑）。

日本人作家によるクトゥルー神話作品を集めた『クトゥルー怪異録』（左・学研ホラーノベルズ／右・学研M文庫）。佐野氏はこの本のために、邪神ウボ＝サスラが登場する『曇天の穴』を書き下ろした。

それぞれが自分なりの「クトゥルー神話」を楽しめばいい

クトゥルー神話を知るには、当然「クトゥルーの呼び声」や『ダニッチの怪』などの代表作に触れるのが一番なんですが、そういう基本的なところを押さえたあとは、『異次元の色彩（宇宙からの色）』をお勧めしたいですね。

ラヴクラフトは自分の書いたものを「コズミック・ホラー（宇宙的恐怖）」と表現しているんですが、この作品などはまさにそれにぴったりなんです。視覚的な描写も圧巻です。
　それから、映像化作品の中ではジョン・カーペンター監督の『マウス・オブ・マッドネス』がお勧めです。クトゥルーに関する直接的な描写はないものの、雰囲気たっぷりに仕上がっています。酷評する向きもありますけど、僕は好きですね。
　まあ、クトゥルー関係の映像化作品って、どうしようもないものが多いんだけど、それを考えると、僕の『インスマスを覆う影』は相当いい出来なんじゃないかな。自画自賛になっちゃいますが（笑）。
　僕ね、正直言うと、あんまりクトゥルー神話を世間に広めたくないんですよ（笑）。広まっていくと、本来持っているものが歪（ゆが）められて、異質なものになってしまうから。多くの人たちに受けいれられるようになると、どうしてもみんながわかりあえる方向にいっちゃう。
　でも、クトゥルー神話っていうのは、わかりあえないところが魅力なんですよ。それぞれが自分なりの「クトゥルー神話」というものをなんとなく持っていて、それを横目で確認しあう――、それがクトゥルー神話の楽しみ方だと思うんですよね。
　たとえば、誰かがミ＝ゴウの造形物なりなんなりを持ってきて、「これがミ＝ゴウです」と提示したとします。その結果、それがすなわち「ミ＝ゴウである」ということになってしまうと、それはもう本来のミ＝ゴウじゃないんです。
　現実の宗教が繰り返している失敗と同じことになってしまうんですよね。とても立派な仏像があって、それはそれで必要なんだけど、それがイコール仏様だというわけではない。それらを通して、自分だけが感じられるもの、それが大切なんです。
　そのためには、自分の中に蓄積されたものが重要になってくるかもしれない。それは五感で感じるものすべてですね。ラヴクラフトは、「人間のもっとも根源的な感覚は恐怖である」と言っているのですが、そういったものを感じて、自分だけの「神話」を生きてほしいな、と思います。

なんでもない風景や出来事に、ふと感じる「クトゥルー神話」的な世界観。自分だけにわかるその感覚を大切にすることが、神話世界の楽しみ方につながる――。

撮影協力●株式会社東映アニメーション

クトゥルー神話の謎と真実

Contents

――クトゥルー神話大系――

超古代、地球を支配した邪神たちにまつわる暗黒の物語

人類が誕生する遥か昔、星界より原初の地球に飛来した存在があった。
地球に君臨したそれらは〈旧支配者〉と呼ばれ、
そのあまりに忌まわしい姿形と、計り知れない神秘の力を有するために、
「邪悪なる神」として深く記憶された。
星辰の移り変わりと、宇宙全体を巻きこむ大いなる戦いによって、
〈旧支配者〉のあるものは深き海底へ、あるものは暗き地底へ、
またあるものは次元の彼方へと追放され、幽閉されたのである。
しかし、それですべてが終わったわけではない。
強大な力を秘めた〈旧支配者〉は、
再びこの世に復活せんと邪悪な波動を送りつづけ、
虎視眈々とそのときを狙っているのである――。

クトウ
Prologue Journey to the
世

クトゥルー神話外伝

書簡に隠された悪夢

ラヴクラフトの書簡が語る恐るべき物語

この書簡の発見は、20世紀最大のホラー作家ラヴクラフトによって紡がれた宇宙年代記に対する、現在までの認識および評価への再考を促すものになるだろう——

＊　＊　＊

「親愛なる神の芸術家へ」からはじまり、「貴君のもっとも忠実なる卑しき僕　H・P・ラヴクラフト」の一文で終わるその手紙は、ボストンに在住するヒスパニック系の芸術家が、彫刻家であった曽祖父の家を処分する際、書架にあった本の隙間に挟まっていたのを偶然見つけたものだという。

文末の日付は1909年2月19日。ラヴクラフトが神経症を患ってハイスクールを退学した翌年に書かれたものだが、その内容は、まさに驚天動地というにふさわしいものだったのである。

手紙の中で、ラヴクラフトは、ある1冊の書物を、ただ執拗に薦めている。

その書物とは、フランシスコ・デ・ウェサロというスペイン人の探検家が残した記録をもとに、16世紀の中ほどに刊行されたものだ。

ラヴクラフトは、手紙の中で、それを「狂信的偽書」「隠蔽すべき世界中の遺産を網羅した博物誌」と呼び、その書物と出会えた喜びと感動を書き連ねている。

手紙は、書物の読了後すぐに書かれたものであるらしく、興奮のあまり筆がひどく乱れている。そのためか、肝心の書名や出版社名が詳らかにされていない。

彼は、この書物を読んだことにより、極めて珍しい色の幻覚を見たり、堆く積まれた黒い肉塊を妄想したり、蚯蚓のような悪霊が渦巻く海へ航海に出る悪夢を見た、と書いている。

その記述から鑑みるに、この書物こそ、まさに彼が孕み、膿ませ、世に送りだした悪夢の根源であり、原典であったのではないだろうか。

＊　＊　＊

われわれは、手紙の中から書物の内容について言及された部分を抜きだし、あくまで冷静に、博物学的に考察してみた。

次ページから、復元された物品の数々を紹介するが、その前に、書簡にある次の言葉を引用しておこう。

「この書物に封じられし忌まわしき事実を、まやかしを、失われし遺産を、ぜひ貴君の手で形にしてもらいたいのです　それが悪夢の解放となれば」

Side stories of Cthulhu Mythos
—Nightmares Concealed in Epistles—

ラヴクラフト書簡から復元された

幻想怪奇博物館

～書簡からの再現～

書簡によると、件の書物の典拠になったのは、ウェサロの日記であり、その内容の大半は航海日誌によるものであったらしい。

スペイン貴族であったウェサロは、7つの海を股にかける交易船ソル・エスペランサ号の船長でもあった。ウェサロの生きた16世紀のヨーロッパはまさに大航海時代。特に、スペイン船による新航路の開拓と、新大陸との交易（そして略奪）は、まさに最盛期を迎えていたのだ。

瘢痕文身を入れた皮膚の図（ラヴクラフト書簡のスケッチより再現）

●異次元瘢痕文身　施術用具●

年代、採集地は明記されていない

フランシスコ・デ・ウェサロ（生没年未詳）。スペイン、ビルバオ出身。侯爵、探検家。1550年、現在デーヴィス海峡と呼ばれる地域で消息を絶つ。肖像画の作者は不明。描かれた当時は22歳だとされている。

●ウェサロの肖像画●

ウェサロは幼少時に母親を肺病で亡くし、それ以後、奇妙な悪夢に苛まれるようになったらしい

彼が探検家になるきっかけは、幼少から見ていた悪夢であり、彼は航海日誌のはじめに悪夢の内容について綿々と綴っている

日誌には、1540年から、その後10年にわたる彼の船上生活が克明に記録されていて、それだけでも歴史的価値は計り知れないものがあるのだが、ラヴクラフトを驚喜させたのは、少なからず散見する謎の遺物に関する記述だった

遺物の種類は、道具、絵画、生物標本など多岐にわたるが、いずれにも共通しているのは、本能的な恐怖を刺激する、ただならぬ禍々しさであったという

今回復元したのは、その内でも比較的形状が細かく描写されていたものである

航海日誌に書かれた前後の記録から類推すれば、ホンジュラス近海の群島地域で採集したと思われる。

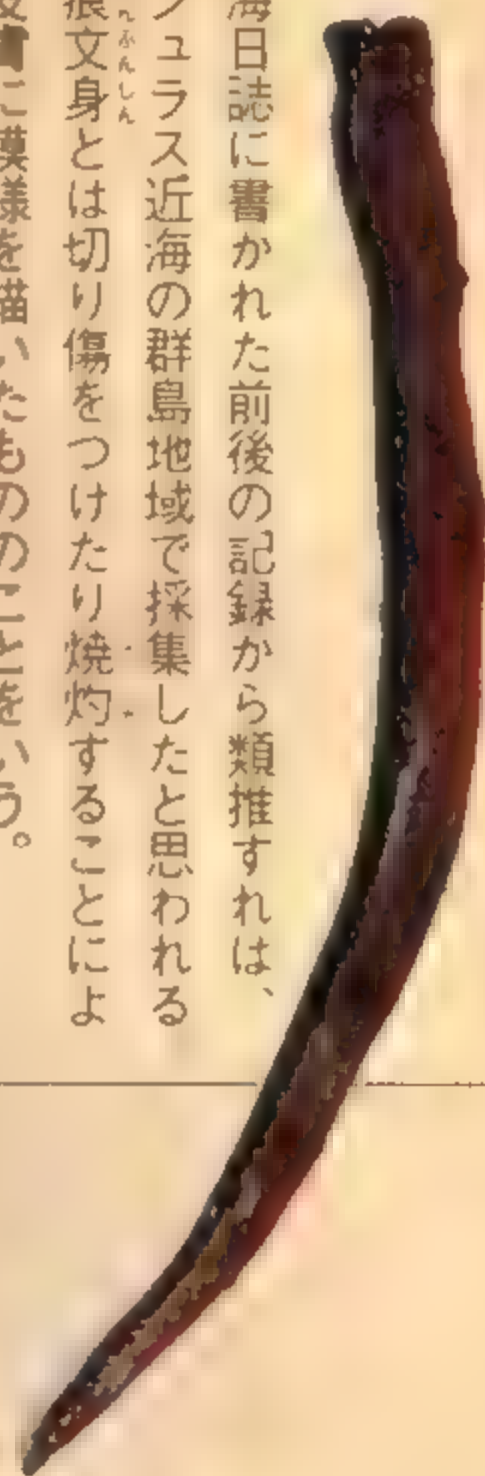
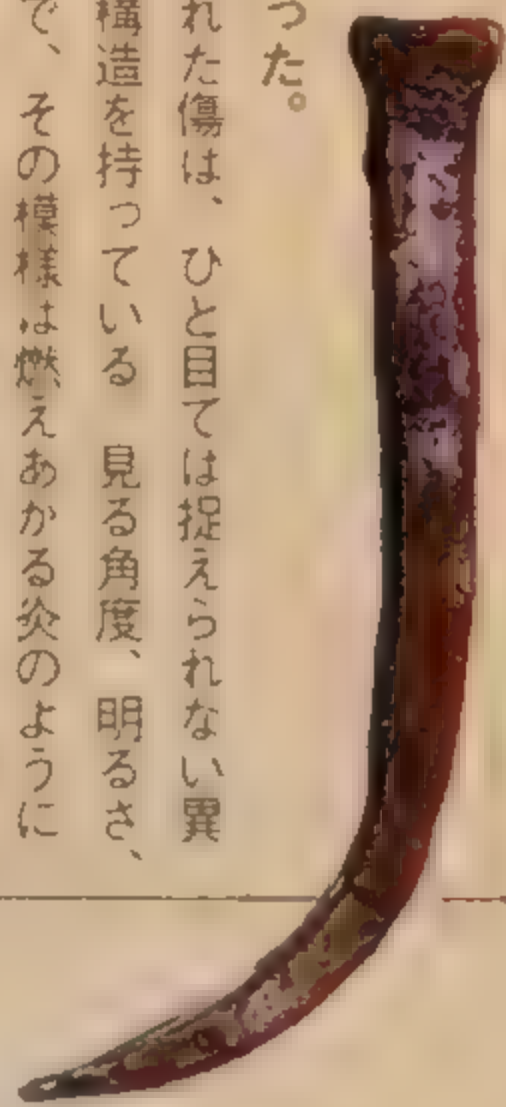
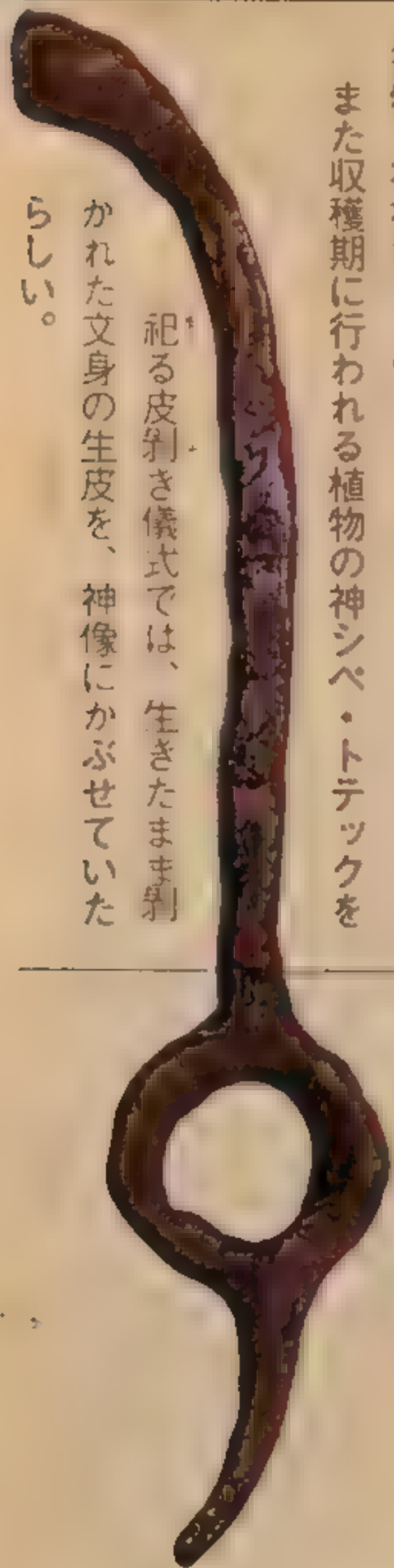
瘢痕文身とは切り傷をつけたり焼灼することにより、皮膚に模様を描いたもののことをいう。

かぎ爪形の道具は大型爬虫類の爪を加工したものであり、切り傷を作るためのものと考えられる。もう一種の、輪があるほうは、焼灼する道具であるようだ。

記録によると、この島の部族では、族長に選ばれた者の身体に神を表す模様を刻みこむ風習があった。

身体に刻まれた傷は、ひと目では捉えられない異次元的な立体構造を持っている。見る角度、明るさ、精神状態などで、その模様は燃えあがる炎のように目まぐるしく変化するのだ。視覚的錯覚を利用したものだと思われるが、その手法は現在では失われており、われわれは当時の生皮のミイラでしか、それを見ることができない。

瘢痕文身を入れた人皮は、呪具を他者から守る力を持つため重宝されるといい、この人皮で装丁した書物も存在するという。

また収穫期に行われる植物の神シペ・トテックを祀る皮剥ぎ儀式では、生きたまま剥かれた文身の生皮を、神像にかぶせていたらしい。

「身体変工具」(復元)
採集年代：16世紀中ごろ
採集地：ホンジュラス近海の群島地域
使用目的：呪術師の通過儀礼における身体変工を施術するためのもの

●身体変工具●

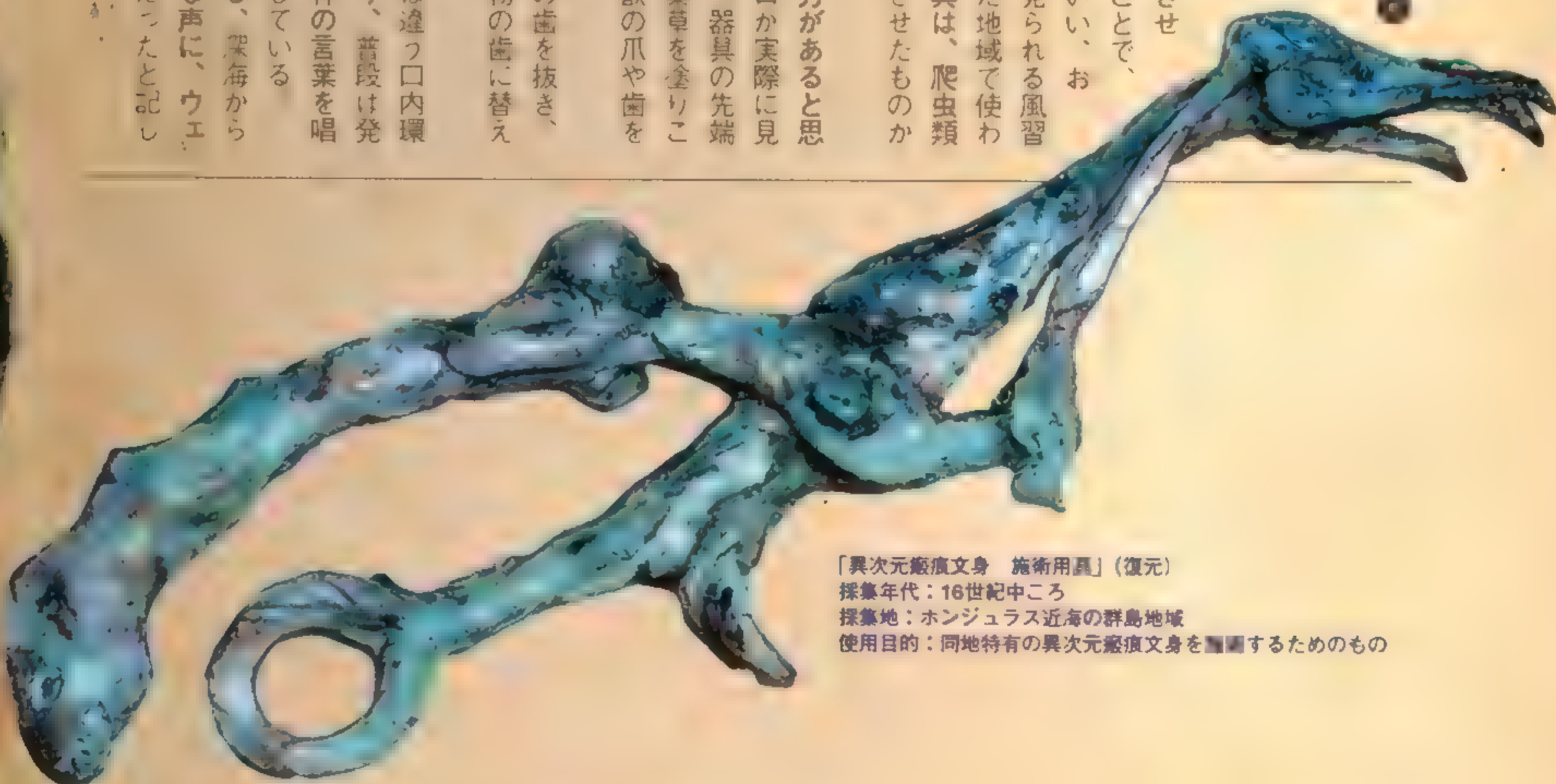
瘢痕文身の道具とともに採集された。

身体変工とは、身体を故意に欠損させたり、形を変えることで、装飾とすることをいい、おもに未開の部族に見られる風習である。採集された地域で使われていた鋏状の器具は、爬虫類と魚類をミイラ化させたものから作られている。

いくつかの使い方があると思われるが、ウェサロが実際に見たのは抜歯である。器具の先端に麻酔効果のある薬草を塗りこみ、抜歯した痕に獣の爪や歯を入れる。

呪術師はすべての歯を抜き、それぞれ違った動物の歯に替えているという。

彼らは、人間とは違う口内環境を作ることにより、普段は発することのできぬ神の言葉を唱えられるのだと信じている。

その口から漏れる、深海から浮上する泡のような声に、ウェサロは身の毛がよだったと記している。

「異次元瘢痕文身　施術用具」(復元)
採集年代：16世紀中ころ
採集地：ホンジュラス近海の群島地域
使用目的：同地特有の異次元瘢痕文身を[illegible]するためのもの

幻想怪奇博物館
～書簡からの再現～

●地下世界の無貌の刑罰●

「地下世界の無貌の刑罰」と題されたこの絵は、ウェサロがハイチの南西、カリブ海に浮かぶ島での体験を、1545年に本国に戻った折に描かせたものだ

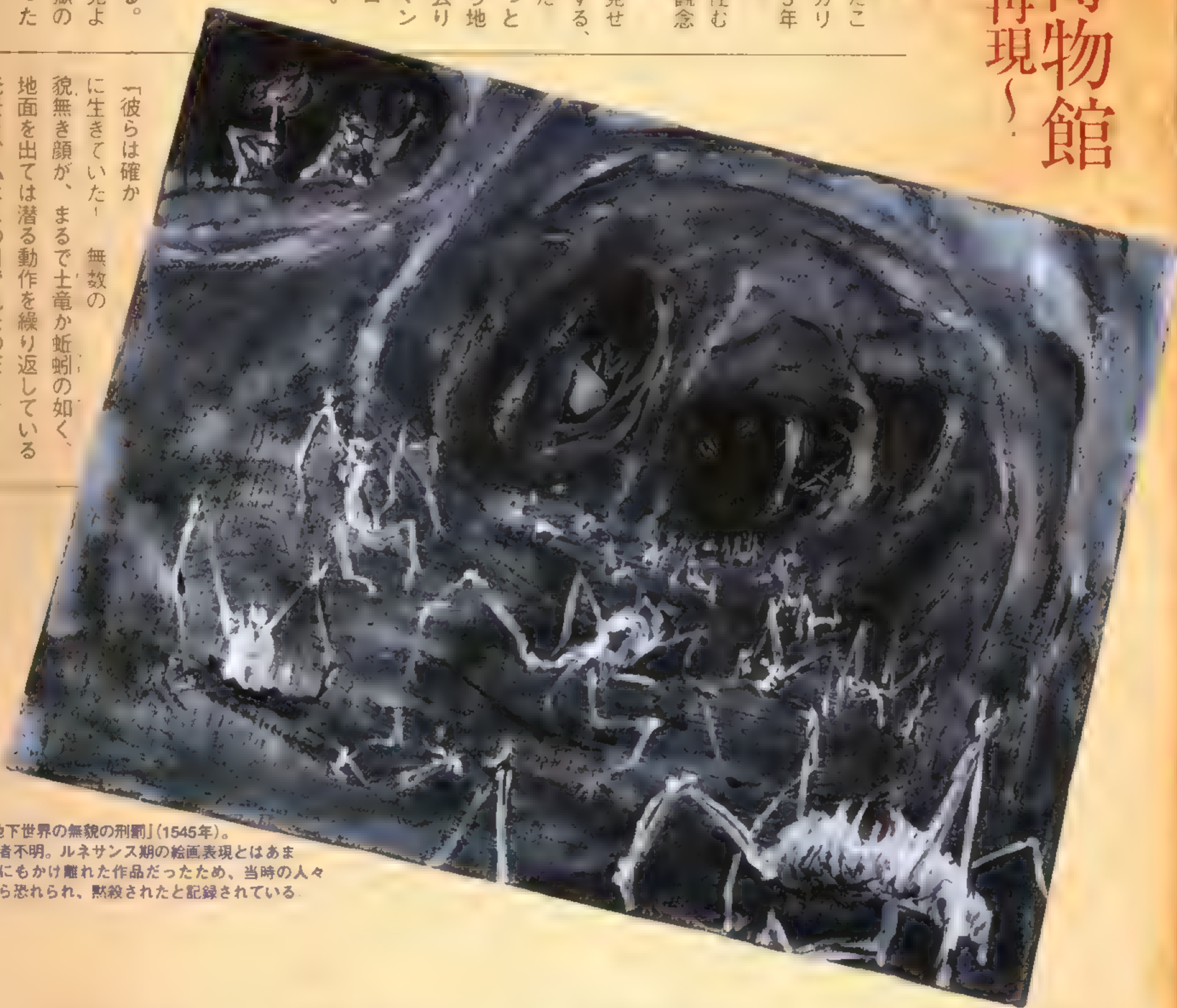
彼の航海日誌によると、この地に住む部族には、地下世界に関する独特の観念があるという

ウェサロは、族長から古い壁画を見せられ、そして、夜になると村を徘徊する、顔のない罪人たちの亡霊の話を聞いた

この部族で行われる刑罰の中でもっとも重いもの、それは、罪人を洞窟から地下世界へと連れていき、そこに置き去りにすることだ。そこにはアトゥア・マングンス（Atua Mangunsu）という盲目の神がおり、罪人の顔を奪うのだという

目も鼻も口も奪われた罪人は永遠に死ぬことができず、今も暗い地下世界で生かされていると彼らは信じ、そうした罪人は地上を夢見るために、霊の姿で地上をさまようと考えている。

ウェサロはその地下世界をひと目見ようと、罪人の洞窟に入り、そこで地獄のような光景を目のあたりにしてしまったと、興奮した筆致で記録している。

「彼らは確かに生きていた！　無数の貌無き顔が、まるで土竜か蚯蚓の如く、地面を出ては潜る動作を繰り返している光景を、私はこの目で見たのだ！」

「地下世界の無貌の刑罰」(1545年)。作者不明。ルネサンス期の絵画表現とはあまりにもかけ離れた作品だったため、当時の人々から恐れられ、黙殺されたと記録されている

●ウオグア化石●

この不思議な化石をウェサロが手に入れたのは、1547年のこと

アマゾン盆地のバルビナ湖周辺に居住する部族の老戦士が、敵対する部族から奪ったというもので、ウェサロはその老戦士を殺害して、これを入手したという

化石となっているものは生物かどうかも不明だが、なぜか前述のカリブ海の島にある盲目の神を刻んだ壁画に描かれた姿と酷似している

老戦士が化石化した生物を指して「ウオグア」と連呼したことから、「ウオグア化石」と命名された。のちにウェサロはこの言葉が「蛙」を意味していると知る。バルビナ湖周辺にも地下世界を信ずる伝承があることから、おそらくこの化石はそこから発掘されたものだろう、とウェサロは記している

この記録が書かれた時期から、航海中に乗組員が突然発狂して海に飛びこんだり、幻聴・幻覚に悩まされる者が増えてきたという記述が見えはじめる

そして、その狂気は、1550年の最後の1ページでピークを迎える

●貌無き者の爪●

残された航海日誌によれば、北極圏にほど近いデーヴィス海峡をさらに北へと航行中であったと思われるソル・エスペランサ号を含めた5隻の帆船は、黒い有翼生物に襲われたとある。

その生物は夜の闇から染みでてきたように空に現れ、まずひとりの船員が攫われた。その後も、その生物は爪で帆を破り、風と波を呼び、夜の空の色に紛れて姿を消しながら、3日間にわたって乗組員を次々とどこかに運び去ったという。

結局、ソル・エスペランサ号は、ラブラドル海の北を航行中の船により、無人の状態で発見された。

船内には2か所、弾痕が残されており、南ドイツ製の単発後装拳銃が1丁見つかった。航海の疲労の中、渡り鳥の集団が空を覆う様を怪物視したのだ、と当時は笑い話にもならなかった。

だが、のちに船内から、落ちている弾丸に混じって、その生物の爪と思しき物が見つかった。

おそらく最後の夜、ひとり残ったウエサロは、数々の収集物と航海日誌を船内に隠し、彼が見たと記す怪物に、拳銃で反撃をしたものと考えられる。

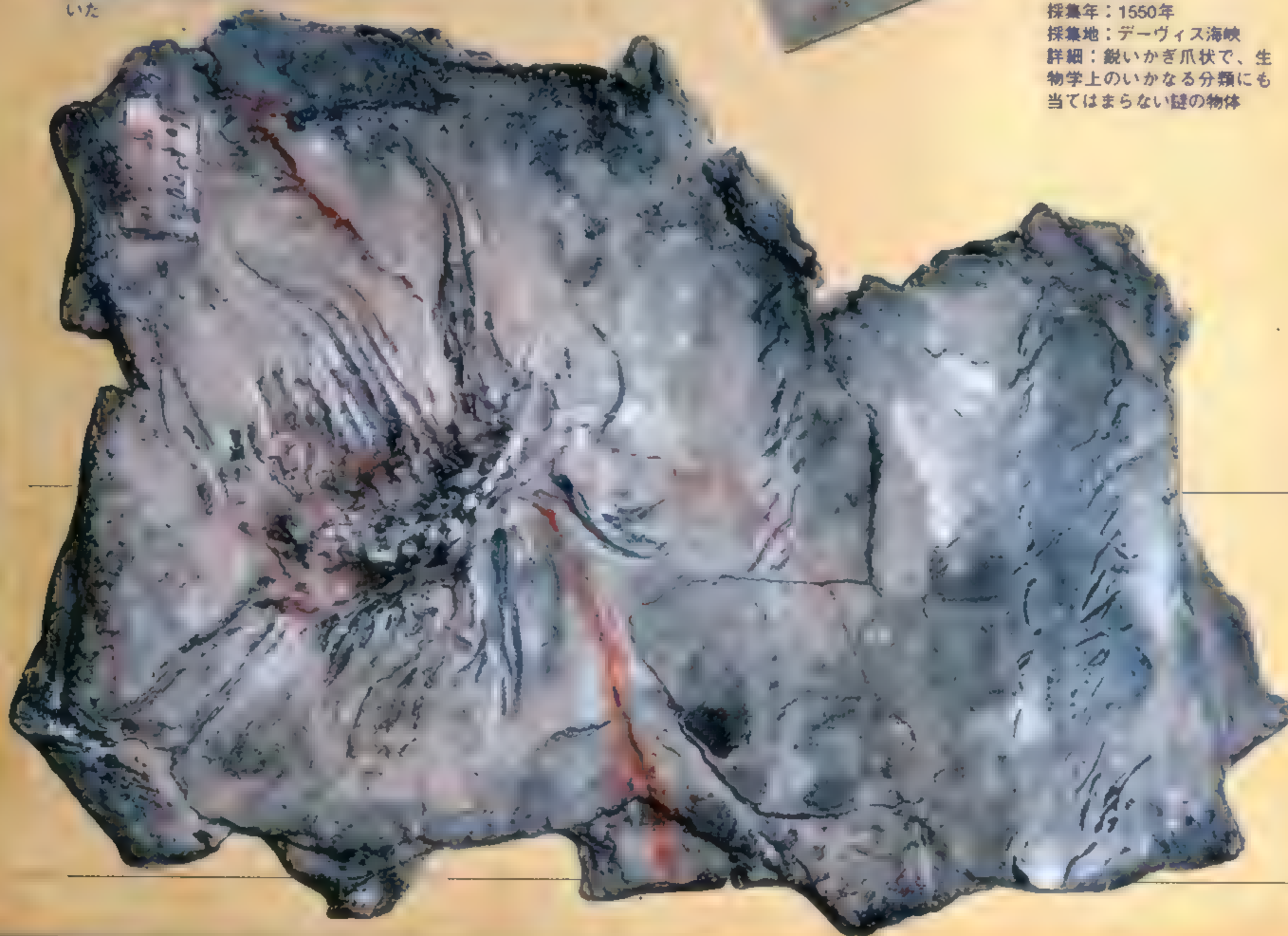
しかし、のちに探しだされたものは航海日誌と爪だけで、彼が発見したとされるものは、何も残されていなかった。

＊　＊　＊

ひとつだけ、付記すべきことがある。

1540年の日誌の始まりに書かれた彼の悪夢の内容と、1550年の最後の日誌の内容が、あり得ぬほどに酷似していたという。それが何を意味するのかは、ウェサロ本人以外、誰にもわからない

貌無き者の爪（ミスカトニック大学所蔵）
採集年：1550年
採集地：デーヴィス海峡
詳細：鋭いかぎ爪状で、生物学上のいかなる分類にも当てはまらない謎の物体

ウオグアア化石（復元）
採集年：1547年
採集地：ブラジル、ウアツマ川上流バルビナ湖周辺
詳細：発掘地、発掘年代、地質時代のすべてが不明。原住民の間では呪術的護身具として扱われていた

ラヴクラフトに訪れた悪夢

以上が、ラヴクラフトの書簡から拾いあげることができた、書物の内容の一部である。

書簡を所持していた彫刻家はすでにこの世になく、われわれが代わってその遺物を復元してみた。

この書物がはたして実在したのか、また実在していたとしても、書かれていたことが実際に起こった出来事の記録なのか、今となってはそれを確かめることもかなわないが、彼がこれ以降に創出した世界をつぶさに読んでいけば、その真実を知ることができるのかもしれない。

ラヴクラフトは、ウェサロから受けとった遺産の数々に、夢と幻想と妄想を絡ませ、次々と暗黒神話を生みだしていった。その魅惑的な悪夢（ナイアルラトホテップ）は、彼を掴んで離さなかったのだ。

彼は震えただろう。

苦痛に喘いだだろう。

歓喜の叫びに喉を裂いただろう。

世界はこんなにもひっそりと悪意に満ちているのに、不感症な顔つきで日常を送る者たちが多すぎる。

人跡未踏の地に建つ不可解な遺跡、人間の頭脳が想像したとは思えぬ不可解な文様、生物めいた光沢を持つ石、禍々しい存在理由をうかがわせる道具類……。

まだ知られていない闇の遺産が、この世にはどれだけ埋もれているのか。

＊　＊　＊

覚めても覚めても続く永劫の悪夢に恵まれ、未知なるものへの恐怖に酔い、溺れ、彼は神経の1本1本に黒い根を張りめぐらされながら、ペンを握らされていたのだろうか。

醜悪にねじれた色の触手が無慈悲にも、その彼の耳に、鼻腔に、眼孔に、口腔に、毛穴に、頭脳に——

暗黒神話の伝道者
H・P・ラヴクラフト伝

15世紀のアメリカ大陸発見から約400年、「フロンティアの消滅」が宣言された1890年に、ハワード・フィリップス・ラヴクラフトは生まれた。46年の生涯で残した小説、評論、詩編は多数にのぼるが、その最大の功績が「クトゥルー神話」の創始であることは言うまでもない。

ではいったい、何が彼をして「神なき20世紀」に、新しい神話群を生みださせる原動力になったのだろうか。その答えを探してラヴクラフトの人生を眺め見たとき、3つのキーワードが浮かびあがってくる——。

H P Lovecraft

20世紀を代表する怪奇小説作家、ハワード・フィリップス・ラヴクラフト（1890〜1937年）。

～狂気～

ラヴクラフトの身辺には、生涯「狂気」がまとわりついていた。

彼の父、ウィンフィールド・スコット・ラヴクラフトは、祖父の代にイギリスから渡ってきた入植者の家に生まれ、普段から気取ったキングス・イングリッシュで話すハンサム・ガイだったが、ラヴクラフトが3歳のとき、出張先のシカゴのホテルで、突然激しい精神疾患を発症した。

そのまま精神病院に入院した彼は、一度も退院することなく、5年後に亡くなる。精神疾患を引き起こした原因は、第3期梅毒による中枢神経系障害だったとの説もある。

愛する夫の死は、ラヴクラフトの母、サラ・スーザンの心に大打撃を与えた。夫の入院後、息子とともに実家に戻って暮らしていた彼女であるが、このころからゆっくりと、しかし着実に精神を病んでいく。

ラヴクラフトを溺愛する一方で、本人を目の前にして「人前に出せないほど醜い子」と広言してはばからない。そして、「この子も失ってしまうかもしれない」という強迫観念のため、学校にもほとんど通わせず、家の中だけで過保護に育てた。

そんなアンバランスな愛情の結果、ラヴクラフトは、精神的に不安定で、常に神経症に悩まされるひ弱な子に育っていく。母のノイローゼ状態は、年を追うごとに悪化し、やがてラヴクラフトが31歳のとき、精神病院で死去することになる。

そして、34歳で結婚し、2年足らずの短期間生活をともにした妻ソーニャも、仕事の失敗を機に精神に変調をきたしてしまう。ソーニャはのちに回復し、離婚することになるのだが、両親ともに狂死し、妻もノイローゼを患うという境遇は、尋常ではない。

だが、皮肉なことに、そんな環境がラヴクラフトにある特異な資質を与え、磨きあげていった。

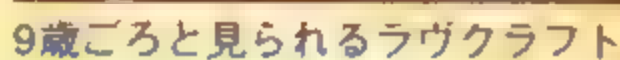
「悪夢」を見る力である。

両親とともに写る幼いラヴクラフト。女の子がほしかったという母のサラ・スーザンによって、少女の服を着せられている。

〜悪夢〜

ごく幼いころから、ラヴクラフトは悪夢に悩まされつづけていた。彼が「Night Gaunts」と呼んだ夢魔は、夜ごと幼な子を襲い、その恐怖から奇声を発し、夜中に目覚めることもしばしばだった。

後年、ラヴクラフトは友人に宛てた手紙の中で、「Night Gaunts」が「全身が真っ黒で顔の無い無気味な飛行生物」であったと回想している。彼自身が書き残している症状を見るに、彼は夜驚症※だった可能性が高いが、悪夢は彼を脅かしながらも、生涯にわたってイメージの源泉であり、ラヴクラフトと魔界をつなぐ架け橋となりつづけたのである。

9歳ごろと見られるラヴクラフト

※夜驚症：夜間に突然泣きわめいたり、歩き回ったりする発作を起こす、突発性の睡眠障害のひとつ

イラスト入りのラヴクラフトの書簡。彼は数多くの書簡を遺しているが、時折小説の構想について触れた内容を書いている。

妻のソーニャ・H・グリーン。精神を病み、結婚生活はわずか2年ほどで破綻を迎える

のちにソーニャが、ラヴクラフトとの生活や思い出を綴った書。

SONIA H. DAVIS
THE PRIVATE LIFE OF H. P. LOVECRAFT

OMPLETE PUBLICATION
. H. P. LOVECRAFT'S
ING MEMOIR

さらに、母方の祖父フィップルが、その「悪夢」に栄養を与えた。フィップルは、フリーメーソンにも所属する地元の名士で、ゴシック小説の類いを愛し、屋根裏の書庫に山ほどの蔵書を持っていた。
　彼は、愛する孫にその書庫を開放し、多くの神話や小説、科学書などを自由に読ませた。そして、夜な夜な膝の上に幼いラヴクラフトを乗せ、彼が創作した怪談話などを語り聞かせるのだ。それは、ラヴクラフトにとって、至福の時間であるとともに恐怖のひとときでもあった。
　祖父との語らいは、少年のか細い神経を傷つける一方、作家としての想像力を強靱に育んだのである。
　ラヴクラフトは4歳で字を読めるようになると、本から得た神話や神秘の知識を小さな体いっぱいに詰めこみはじめ、その結果、7歳にして1編の小説を書きあげる。もちろん、子供の書くたわいない物語だが、早くも異世界を舞台にしたファンタジー作品をものしたのだ。
　ひ弱な少年は、同時に、早熟な怪奇小説の申し子だったわけである。

ロードアイランド州の州都、プロヴィデンス。米国の中でも古い都市に数えられ、開発が進んだ現在も歴史ある建物が姿を残している。

〜故郷プロヴィデンス〜

　そして、彼の内的世界を完成させたのが、故郷プロヴィデンスのあるニューイングランド地方の風土だった。母の方針により、学校という、子どもにとって一番近しい社会から隔絶されていたラヴクラフトにとって、近所に住む少数の子どもたちのほかは、屋根裏部屋の蔵書と、時折散歩するプロヴィデンスの街並みだけが友だったのだ。
　ロードアイランド州プロヴィデンスは、アメリカ合衆国の中では古都と呼んでよい、歴史ある都市であり、ラヴクラフトの暮らした19世紀末から20世紀初頭にかけて、歴史の波に揉まれ、変化していった街でもあった。
　だが、ラヴクラフトは、変わらないもの、古いものだけを見つめつづけた。
　ラヴクラフトは、『闇をさまようもの』の中で、彼が愛した光景をこう描写している。
「夕暮れ時になると、ブレイクはよく机について、西方に広がる景色をうっとりと眺めたものだった——すぐ眼下の記念会館の黒ぐろとした塔、ジョージア王朝様式の裁判所の鐘楼、下町にそびえ立つ小尖塔の群れ、他を圧して屹立する尖り屋根が揺らめいて見えるあの遠くの円丘を」（『ラヴクラフト全集3』大瀧啓裕訳／創元推理文庫より）

　祖父フィップルの邸宅から2キロほど西に離れたブラウン大学のある地域には、18世紀のジョージ王朝様式の建築がたくさん残っていた。窓から眺める、落日の残照を受けシルエットとなって浮かびあがった街の風景が、ラヴクラフトにとってはもっとも心安らぐ景色だったのである。
　また、郊外ののどかな田園風景も、彼にとって好ましい

ミスカトニック大学のモデルになったといわれるブラウン大学（上）とその図書館（下）。

ものだった。夏になると、体調のよい日には、田舎のほうにまでサイクリングに出かけた。ニューイングランド地方の穏やかで美しい自然は、引きこもりがちだったラヴクラフトの心と体によい影響を与えたことだろう。

だが、ニューイングランド地方には、もうひとつの顔があった。アメリカ建国にまつわる裏の顔である。それは、ラヴクラフトの心の暗黒とシンクロし、彼の持つ闇の領域を広げていく。

ニューイングランドの歴史とは、アメリカの輝かしい発展の歴史であるとともに、血塗られた殺戮の歴史でもある。原住民との土地争いや独立戦争で、幾多の命が失われ、大地はその血を吸った。

また、敬虔な清教徒が多い閉ざされた村社会の中、目に見えぬひずみが蓄積されていった。その結果のひとつが、かの有名な「セイレムの魔女狩り事件」である。隣人同士が告発しあい、無実の者が捕らえられ、拷問され、絞首刑にされる、信仰を理由にした殺戮――。それが、中世などとっくに終わったはずの17世紀に起こったのだ。

セイレムにある魔女の像（下）と魔女裁判の様子（上）。アメリカ史上最悪の魔女狩り事件といわれている。

そうした土地の記憶は、百数十年の時間をかけ、歴史の狭間に沈澱していったが、澱は消えることなく、ラヴクラフトが生きた19世紀末にも残り香を漂わせていた。

アーカム、キングスポート、ダニッチ、そしてインスマス。これら、クトゥルー神話世界において特別な位置を占める架空の土地が抱える闇は、すなわち現実のニューイングランドの闇そのものなのだ。

ラヴクラフトは、愛する故郷の景色の中に、何を幻視していたのか。美しい景色の背後に見え隠れする土地に染みこんだ怨念と、それを利用し増幅するものに早くから気づき、とらわれていったのではないだろうか。

プロヴィデンスという名は、奇しくも「神意」という意味を持つ。ラヴクラフトは、その生まれ育った大地から、確かに「神意」を受けとっていた。だが、その神は、キリスト教の神ではない。その神が生まれる以前の地球を支配していた〈旧支配者〉たちだったのである――。

そして、今、ラヴクラフトの墓石には、彼が遺したこの言葉が刻みこまれている。

"I AM PROVIDENCE（我こそはプロヴィデンス）"

プロヴィデンス郊外にあるラヴクラフトの墓。墓石に刻まれた"I AM PROVIDENCE"の文字は、有志の手によるものだ。

Secrets of the Forbidden Grimoire, "Necronomicon"

伝説の書は実在していた⁉

禁断の魔道書『ネクロノミコン』の秘密

禁断の秘書にして、暗黒の聖書とも呼ばれる『ネクロノミコン』。狂えるアラブ人アブドゥル・アルハザードが書き記したこの魔道書は、非常に数が限られ、閲覧すら困難な伝説の書と伝えられてきた。しかし、驚くべきことに、その「ない」はずの本が実在するという。さまざまな観点から『ネクロノミコン』を見ていったとき、そこに隠された恐るべき真実が明らかになる――。

〈ネクロノミコン〉在庫有――目録を飾った驚きの一文

今を去ること六十余年前になる1946（昭和21）年の夏、ニューヨークにあるフィリップ・C・ダッシネス古書籍店の目録に、次のような記事が掲載された。

――注文番号511。『ネクロノミコン』アブドゥル・アルハザード著。オラウス・ウォルミウスによるアラビア語からのラテン語訳。神秘的な印・象徴の木版多数。1647年（マドリッド）刊。小型二折本、総皮装、1715年の年代も含め入念な空押し。表装のやや汚れ、すれあり。本文はきわめてかすかに変色、30ページまでに集中。751～752ページはほとんど完全に破られるも、巧みに修理せられたり。それ以外は保存良好。売価375ドル。

最初のラテン語版のうち現存する14部の1冊で、合衆国に現存するわずか3部の完全版の1冊。他はネブラスカ州マコックのJ・ピアース・ホイトモアの書庫、マサチューセッツ州アーカムのミスカトニック大学付属図書館に所蔵。アラビア語の写本は2部のみ存在が知られ、両者とも戦前にヨーロッパにあったが、その後どうなったかは知られていない。

著者のアルハザードは本書を執筆したとき絶望的なまでに狂っていたといわれ、ほとんど支離滅裂のいくつかのくだりが、その話に信憑性を与えている。しかしフォン・ユンットの『無名祭祀書』において、「此の書の隠秘学文献の土台となりしこと、紛れもなき事実なり」（9ページ）と記されている。――

これを見た怪奇小説マニアたちは、心底驚愕した。H・P・ラヴクラフトが創りだした架空の魔道書であるはずの『ネクロノミコン』が実在し、売りに出されるというのだ。あろうはずのないこの事態に、人々が色めき立ったのは無理もない。

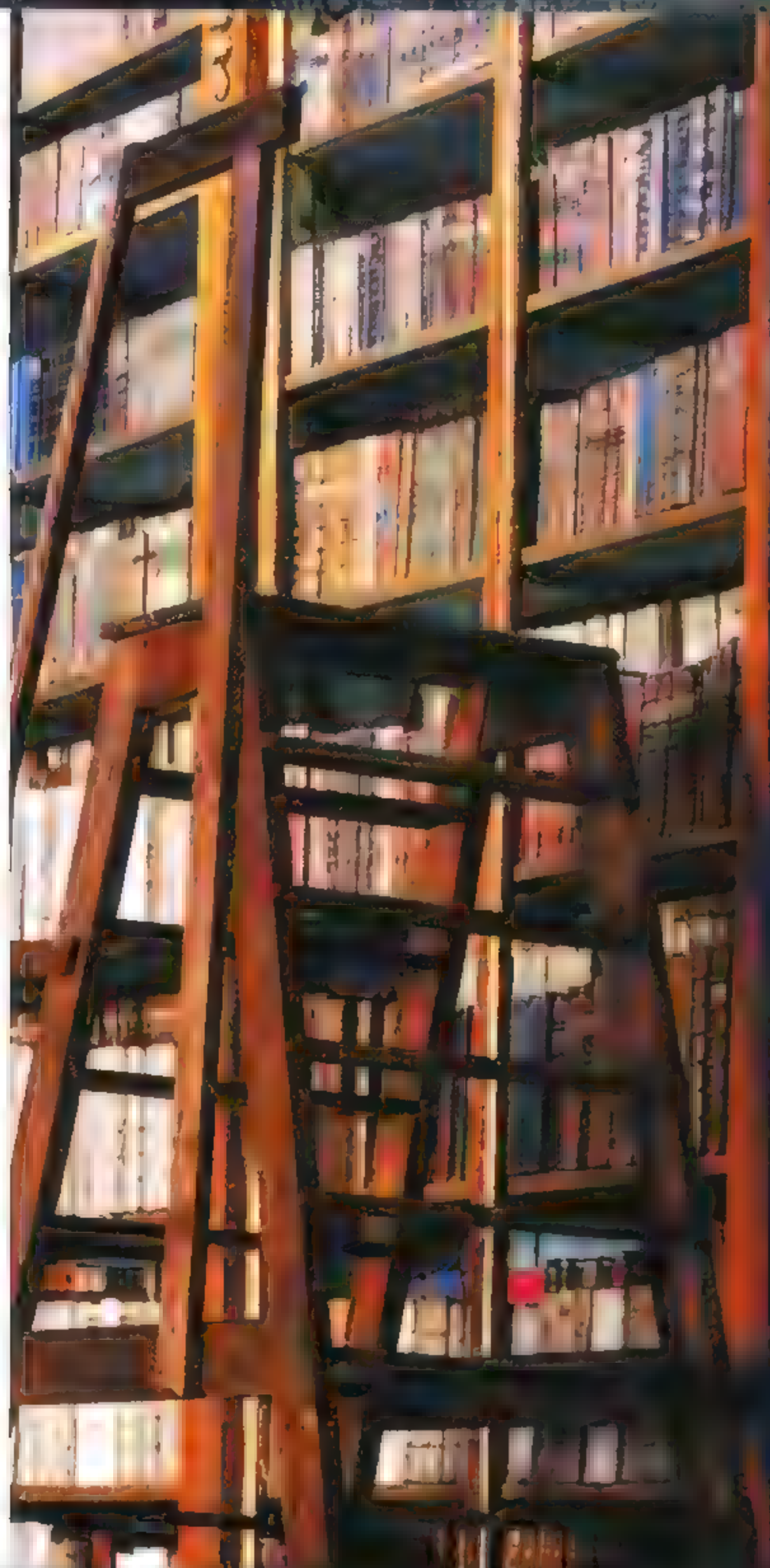
しかし、間もなく、この記事自体がダッシネスのでっちあげだったことが判明する。ルーティンワークにうんざりした古書店主の、ほんのちょっとした悪戯だったのだ。

それを知ったときの、当時のラヴクラフティアンたちの落胆ぶりは、察するに余りある。アメリカらしい大らかさが微笑ましいエピソードだ。

だが、ふとした疑問が脳裏によぎる。これは、本当に「ちょっとした悪戯」だったのかと。

『ネクロノミコン』とオカルティズムとの奇妙な一致

ここで、改めて『ネクロノミコン』を紹介しよう。

原題を『アル・アジフ』という、この書物は、紀元730年にアラブの狂える詩人アブ

1946年、ニューヨークの古書店主が目録に掲載した『ネクロノミコン』の名は、世間の小説ファンたちを驚かせ、図らずもその存在の有無が注目を集めた

クトゥルー神話大系に織りこまれた記述をもとに書きおこされた『ネクロノミコン』の原書。（左）ジョージ・ヘイ編『魔道書ネクロノミコン』と（右）ドナルド・タイスン著『ネクロノミコン アルハザードの放浪』

ドゥル・アルハザードによって書かれた禁断の魔道書であるとされ、日本語では「死霊秘法」と訳されている。

そこには、人類誕生前に地球を支配していた〈旧支配者〉や、あらゆる魔物たちに関するおぞましい知識が列記されていて、クトゥルー神話大系においては、まさにバイブルに値するものだ。前述したとおり、一般的にはラヴクラフトの想像力が生みだした書物ということになっている。

ところが今、われわれはふたつの『ネクロノミコン』を読むことができる。ジョージ・ヘイ編『魔道書ネクロノミコン 完全版』（大瀧啓裕訳／学習研究社）とドナルド・タイスン著『ネクロノミコン アルハザードの放浪』（大瀧啓裕訳／学習研究社）の2冊だ。

両者とも、その序文において、この本が単なる一怪奇作家の妄想の産物ではないことをほのめかし、その歴史的なエピソードを綴っている。もっとも、その「歴史」もラヴクラフトの創作である。1929年に執筆された『ネクロノミコンの歴史』という、わずか4ページにも満たない文献に、簡単ながら『ネクロノミコン』の来歴が記されているのだ。

つまり、上記ふたつの『ネクロノミコン』は、ラヴクラフトを敬愛する作家たちが、ラヴクラフトの遺した設定と、膨大なクトゥルー神話群から注意深く拾いあげた関連記述をもとにして作った偽書、なのだ。少なくとも、世間的にはそう思われている。

しかし、以前から、クトゥルー神話で描かれる邪神たちの物語と、実在のオカルト書との、偶然とはいえない関連性は幾度となく指摘されてきた。

たとえば、レン高原だ。この所在不明の高地は、双方の『ネクロノミコン』に記述があり、〈古のもの〉のかつての都があったとされている。そして、この高原を、神智学の創唱者H・P・ブラヴァツキー夫人に神秘的な叡智を与えたという、モリヤ大師やクート

アメリカのアウルズウィック・プレスより出版された『アル・アジフ（ネクロノミコン）』のもとになった手書き文字の写本。イラクで発見されたものだが、意味不明の文字とされる

ロシア出身のH・P・ブラヴァツキー夫人。オカルティックな霊的進化論をはじめとする神智学を提唱し、彼女の思想はラヴクラフトにも影響を与えたといわれる。

ブーミ大師たちが住まう地として同定するオカルティストも少なくない。

また、宇宙の過去未来すべての出来事が記録されているという「アカシック・レコード」の管理者こそ、『時間からの影』や『異次元の影』で描かれる、超銀河宇宙〈イース〉から到来した精神生命体〈大いなる種族〉であると、まことしやかに囁かれてもいる。

こと細かに探せば、このような例はいくらでも見つかるのだ。

「ネクロノミコン」とは真実を覆い隠す巧妙な作りものだった!?

そうでなくとも、クトゥルー神話には、実在の書物が多く登場する。あまりにも有名な人類学者ジェームズ・ジョージ・フレイザーの研究書『金枝篇』はさておき、同じく『クトゥルーの呼び声』に登場する『西欧における魔女信仰』も、歴史民俗学者マーガレット・マレーによって書かれた学術書である。

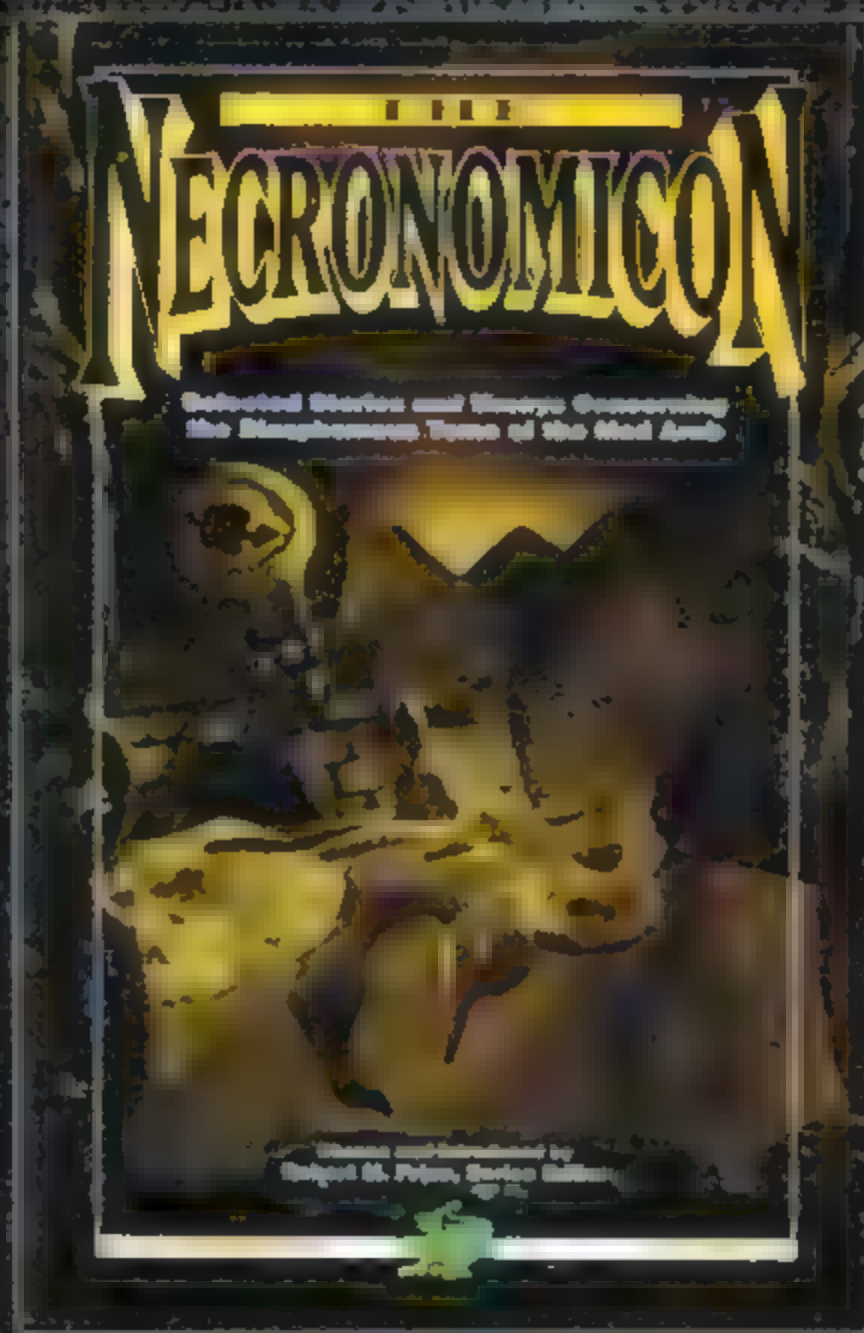
ラヴクラフトは、自らの神話大系を補強し、より現実味を帯びさせるため、積極的に先行研究を利用した。では、ラヴクラフトは、それらの知識をどこで手に入れたのであろうか。

ひとつには、数多くいた文通仲間たちとの情報交換が考えられる。『西欧における魔女信仰』は1921年の刊行であり、当時としては最新の民俗学の研究成果であった。一方、『金枝篇』は1890年、偶然にもラヴクラフトが生まれたその年に、初版が出版されている。つまり、彼が字を読めるようになる以前から存在した本だ。

彼が、いつどこで『金枝篇』に出会ったのかは判然としない。だが、可能性の高い場所が1か所ある。祖父フィップル・フィリップスの邸宅にあった、屋根裏の書庫だ。ラヴクラフトは、祖父の家に14歳まで住んでおり、引きこもりがちだった彼にとって、書庫は格好の遊び場だった。彼は、そこでの思い出を次のように語っている。

暗い屋根裏部屋に置かれた家族の蔵書のなかに、きわめて古い書物を見つけだしたときには、ほかの書物よりもそ

引きこもりがちだったラヴクラフト少年にとって、たくさんの本が置かれた祖父の家の屋根裏部屋は《夢の国》のような存在だったことだろう。

アメリカのケイオシアム社から出ている「ネクロノミコン」のアンソロジー。同書には、アブドゥル・アルハザードの肖像画なるものも掲載されている。

うした古書を読みふけりました。〈中略〉神秘的なもの、幻想的なものも、ことごとくわたしを感動させました。」（『ラヴクラフト全集3』大瀧啓裕訳　創元推理文庫「資料・履歴書」より）

祖父フィップルは、怪奇や神秘を愛する読書家であり、そしてフリーメーソンの一員でもあった。アメリカ合衆国では、土地の有力者や名家の出身者がフリーメーソンに加入するのは、珍しいことではない。

だが、一説によると、フィップルの加入していたフリーメーソンは、とりわけ神秘志向が強いエジプト系のそれだったともいわれている。そんな彼が、民俗学や神秘学の本を蔵していても不思議はない。ただ、当時の同時代の学者が書いた本であれば、それはラヴクラフトが言うところの「きわめて古い書物」にはあたらないだろう。

では、「きわめて古い書物」とは、いったい何を指すのか。

ここで、最初に掲げた古書店の目録に書いてあった「ネクロノミコン」の特徴を思い出してほしい。

『神秘的な印・象徴の木版多数。1647年（マドリッド）刊』

まさに、幼い日のラヴクラフトを夢中にさせたという本と一致するではないか。

たとえば、である。あなたが、偶然にある古書と出会ったとしよう。

幼いころから親しんでいたその本の内容は、あまりにも奇想天外で、おとぎ話としか思えない。だが、何かのきっかけで、あなたはそこに書かれた記述の数々が紛れもない真実であり、しかも悪意ある者や無知な者の手に渡ったが最後、地球どころか全宇宙を破滅に追いやる危険なものだと知る。

秩序と世界を愛するあなたは、どうするだろうか。その本を、この世から抹殺しようとは思わないだろうか。とはいえ、今ここにある1冊を火にくべたところで、なんの解決にもならない。そこで、あなたはこう考える。

「ならば、それ自体が「偽物」であることにしてしまえばよい。「偽物」でありさえすれば、そこに何が書かれていようが、それは「嘘」であり「子供だましの戯言」なのだ。そのためには、世間的に軽んじられているパルプ・ホラーの小道具に使えば、誰も本気にしなくなる。多くの嘘で、真実を覆い隠すのだ。すべてをなかったことにするのだ」と。

だが、それでも実在を疑う者は出てくるだろう。中には、真相を探ろうとする者もいるかもしれない。だから、あなたは、志を同じくする後世の人々に託す。時折「悪戯」や「偽書」としてその名を使うことで、「ガス抜き」をすることを——。

この想像が荒唐無稽なものか、それとも歴史の奥に隠された「何か」に肉薄するものなのか。

「ネクロノミコン」の真実——それは、あなた自身の目によって確かめてほしい。

ラヴクラフトが発見し、彼を魅惑せしめた「きわめて古い書物」とはいったいなんだったのだろうか——！

北極
North Pole
ヒューペルボリア
Hyperborea
スティルウォーター
Stillwater
カナダのネルスンの北に位置する寒村。イタカによると思われる住人の消失事件が起きた
ヤディス=ゴー
Yaddith-Gho
聖なる山。その地底には魔神ガタノトーアが潜む
ムー大陸
Mu
超古代の太平洋に存在したとされる失われた大陸
クン=ヤン
K'n-Yan
ンガイの森
Wood of N'gai
蟇の神殿
Temple of the Toad
ホンジュラスのジャングルに埋もれる太古の神殿
クナア
K'naa
ムー大陸の聖地
Map for Cthulhu Mythos
クトゥルー神話地図ガイド
闇が棲まう
禁断の世界地図
The forbidden world map that darkness lives
灼熱の砂漠に極寒の極地、天を衝く山々、底知れぬ海溝……変化に富んだ地球の姿。
しかし、われわれが認識しているその世界の裏側には、
人知を超えた禁断の地が隠されているのだ
暗き世界からの呼び声に耳をすましたとき、この星の、もうひとつの実像が見えてくる
ルルイエ
R'lyeh
海底に沈んだ巨大な石造都市。あらゆる線と形が歪んだ悪夢の都で、クトゥルーが死の眠りについている。

サーツィー
Surtsey
スコットランド沖に浮上した海底火山

ゴーツウッド
Goatswood
英国ブリチェスター近郊にある町。近くの森にはシャッガイの昆虫族の拠点がある

ルーイブ
Lh-Yib
ヨークシャー地方の荒れ野の地下にある水蜥蜴神族の都市

カダス
レン高原を越えた凍てつく荒野の地。計り知れない高みの頂には城が築かれ、神々が住まうという。位置は特定できず、時空を越えた都市と考えられる

レン高原
Plateau of Leng
所在のはっきりしない謎の高原。中央アジアとも、ミャンマーの奥地にあるとも、あるいは南極の狂気山脈が原型ともいわれる

シュトレゴイカバール
Stregoicavar
ハンガリーの山岳地帯にある寒村。かつては近郊の〈黒い石〉に集う邪教集団の巣窟だった

イアン・ホー
Yian-Ho
太古の秘密が隠された禁断の都市

アイレム
Irem
一説によるとペトラの砂漠に埋もれているといわれる千柱の都市

スン高原
Plateau of Sung
ミャンマー（ビルマ）山岳地帯の奥にある失われた高原。トゥチョ＝トゥチョ人に護られた都市アラオザルの地下洞窟には、ロイガーとツァールが幽閉されている

グ＝ハーン
砂漠に埋もれた地底都市。そこには邪神シャッド＝メル率いる異様な生物がはいまわっているという

無名都市
Nameless City
アラビア南部の大砂漠の彼方に存在する地下の廃都。アラブの狂詩人、アブドゥル・アルハザードの霊がさまようという

レムリア大陸
Lemuria
超古代に沈んだ大陸。ムー大陸と同一視されることもある

月霊山脈
Mountains of the Moon
アフリカ大陸中央部に位置する秘境

狂気山脈
Mountains of Madness
南極大陸を横断する巨大山脈。高さ1万メートルを越す山脈の奥に〈古のもの〉が建造した巨大石造都市が広がっている

アメリカ北東部
〜恐怖の故郷〜
Northeastern United States
The Origin of the Fear

クトゥルー神話における数々の事件の舞台となったアメリカ北東部・マサチューセッツ州。
17世紀初頭、イギリスからの入植者が足を踏みいれた、アメリカでもっとも古い地域である。
諸植民地同士の血なまぐさい争い、住民を狂気に陥れた魔女裁判事件など、
そのたどってきた歴史から立ちのぼる、暗く、陰鬱な空気の影には、
計り知れない「闇」の存在が感じられる

Miskatonic River
ミスカトニック河
B & M鉄道駅
B & M鉄道
森林墓地
Water Street
Main Street
High Street
West Street
Garrison Street
East Street
Washington Street

Map of Arkham

1930年ごろのアーカム市街図

マサチューセッツ州にある地方都市。ミスカトニック河が町の中央部を流れ、歴史ある古びた街並みが続く。町の中心部にはミスカトニック大学がある。アーカム街道を北上するとインスマス、ニューベリイポートへ至る。キングスポートやセイレム、ボストンにもほど近く、ミスカトニック河をさかのぼると、寒村ダニッチへ達する。

Campus Map of Miskatonic University

1930年ごろのミスカトニック大学構内

1797年にアーカムに創立された総合大学。大学の付属図書館には、「ネクロノミコン」や数々の魔道書が収蔵されているため、各地から閲覧希望の研究者や好事家たちが訪れ、また問い合わせも数多い。魔術や原始信仰に関する各分野の研究者を多数輩出しており、超古代遺跡の発掘調査をはじめ、〈旧支配者〉に関する学術研究の総本山的な存在である。

ギルマン・ハウス
Gilman House

ロウリイ鉄道跡
Abandoned Railway Line to Rawley

フェデラル・ストリート
Federal Street

ダゴン教団会館

マヌーセット河
Manuxet River

マーシュ精錬所
Marsh Refinery

灯台
Lighthouse

Map for Cthulhu Mythos
クトゥルー神話地図ガイド

インスマス
～呪われた海妖の町～

Inssmouth
The town which is cursed in horrifying Creatures

マサチューセッツ州エセックス郡マヌーセット河の
河口に位置する古びた港町。
〈インスマス面〉と呼ばれる特異な容貌をした住民は、陰気で怪しく、
周辺地域の住民から忌み嫌われている。
この寂れた町は、
実はクトゥルーとその眷属を崇拝する
[illegible]集団の拠点という恐るべき実態を持ち、
沖合にある〈悪魔の暗礁〉には、
妖しい生き物たちが夜ごと現れては
戯れるという——。

悪魔の暗礁
Devil Reef

第1章

戦慄のクトゥルー神話集

Chapter 1
The Terror Myths of Cthulhu

人類以前の地球を支配した
〈旧支配者〉たちの
おぞましき存在と大いなる力を
なまなましく描きだすクトゥルー神話
密かに、しかし確実に
人類をおびやかす悪夢の物語を、
ここにダイジェストで紹介する。

クトゥルーの呼び声
The Call of Cthulhu

H・P・ラヴクラフト

青年の夢と邪神崇拝の儀式が意味するものとは……?

私は、大伯父の死をきっかけに、ある恐るべき宇宙の秘事を知ってしまった。夢に見るだけで気が狂うほどの、恐怖の実相を。

すべてを知った私は、もうそれほど長く生きることはかなわぬはずだ。同じように禁断の知識を得た大伯父エインジェル博士や、哀れなノルウェー人船員ヨハンセンのように、邪教集団の魔の手が、私を見のがすはずはないのだから……。

名門ブラウン大学の名誉教授にして、古代碑文学の権威であるエインジェル博士が急逝したのは、1926年冬のことだった。家族がいなかった大伯父の、唯一の血縁者であった私は、その遺品整理の最中に、厳重に封印された奇妙な箱を見つけた。

その中には、「クトゥルー教のこと」と書かれた分厚いノートと、数葉の新聞記事やメモ、そして奇怪な浮彫が刻みこまれた粘土板が入っていた。粘土板には、醜怪かつ凶悪としか表現できない、グロテスクな怪物の姿が彫られていた。大伯父の遺した記録によると、それはウィルコックスという彫刻家の青年が作ったという。

1925年2月28日、ニューイングランド地方で小さな地震が発生した。その夜、ウィルコックスは奇妙な夢を見た。

夢の中で、彼は超古代の都にいた。巨石や空高くそびえ立つ石柱で構成されたその都市は、ユークリッド幾何学を無視した、吐き気をもよおすような角度と線で埋め尽くされていた。いたるところに緑色の粘液がしたたり落ちている。そして、地下のどことも知れぬ場所から聞こえる「クトゥルー・フタグン」という、この世のものではない音——。

彼はそれ以降、4月2日まで連日その悪夢に悩まされることになる。初めて夢を見た日、そのなまなましい夢の解釈を求めて、大伯父の学識を頼って訪れてきたウィルコックスであったが、普通なら、彼の体験はただの夢として片づけられたことだろう。

だが、大伯父には、それを見過ごせない理由があった。「クトゥルー・フタグン」という謎の言葉と、粘土板に刻みこまれた怪物を、大伯父は以前から知っていたのだ。

それは、17年前のアメリカ考古学会大会でのことだった。ある男が、碩学たちの意見を求め、学会に参加した。その際、彼が持ちこんだ奇怪な石像とそれにまつわるエピソードが、居並ぶ学者たちの注目と興味を集めたのである。

男の名はルグラース。ニューオリンズの警察に奉職する警部だが、彼はその石像をある邪教集団から押収していた。邪教の信者たちは、悪霊や怪物の伝説が伝わる沼沢地で、屈強な警察官たちでさえ身を震わせるほど奇怪な、阿鼻叫喚の祭儀を執り行っていた。口々に「クトゥルー・フタグン」と呪文を唱え、彼らの神に生け贄を捧げていたのだ。

信者たちは、ほとんどが黒人か混血の水夫だった。ルグラースの調査によると、その宗教は、世にもおぞましい邪神クトゥルーの存在とその復活を信奉する、古代からの秘教だという。星辰が正しい位置に戻ったとき、死の都ルルイエで眠る邪神クトゥルーが甦り、この世を地獄に変えると信じているのだ。

私は関係者たちを訪ね歩き、やがて大伯父の残した記録の数々が真実であることに確信を抱くようになる。

二等航海士の手記が語る恐るべき真実

だが、私をさらなる深みに導いたのは、偶然見つけたある新聞記事だった。そこには、1925年3月に南太平洋で起きた船の遭難事件が載っていた。エンマ号という船が海賊船アラート号に襲われ、20日近く海を漂っていたらしい。

記事には、アラート号が所持していた怪奇な石像の写真が掲載されていたのだが、その石像がルグラース警部の石像、そしてウィルコックスの浮彫にそっくりなのだ。さらに私は、記事が報ずる遭難事件の詳細な日付と、大伯父の残した記録の間に、奇妙な時間の符合があることに気づいた。

1925年3月1日、アメリカでは2月28日だが、南半球を地震と暴風が襲った。すると、ニュージーランドの港から、海賊船アラート号が

緊急出動命令を受けたかのように、慌ただしく出港していった。その日から北半球では、暴力事件や暴動、そしてウィルコックスのような芸術家たちが、突然の狂気や悪夢に陥る事件が多発しはじめる。

3月23日、エンマ号はアラート号に襲撃された。死闘の末、エンマ号の乗組員たちは海賊どもをひとり残らず退治したものの船を焼失し、アラート号に乗り換えて上陸した島で6人の乗員を失う。この日、プロヴィデンスではウィルコックスが人事不省に陥っていた。

そして、4月2日、南半球では再度暴風が吹き荒れた。ウィルコックスが突然の回復を見せたのと同じ日だ。

私はさっそく、その遭難事件唯一の生き残りだったヨハンセン二等航海士を訪ねるべく、はるばるノルウェーに渡った。だが、ヨハンセンはすでにこの世を去っていた。大伯父と同じく、事故死だったという。

遺族からヨハンセンの手記を手に入れた私は、そこにすべての出来事をつなぐ鍵を、そして人類が知るべきではなかった事実を見いだしてしまったのだ。

アラート号が漂着したその島こそ、地震で海上に浮かびあがった大いなるクトゥルーの眠る神殿、ルルイエだったのである。エンマ号の乗員たちは、それとは知らずに、その開けてはならぬ扉を開いてしまった。

耐えがたい臭気立ちのぼる闇の中から、それは現れた。膠質で、緑色の、際限なく巨大なクトゥルーが。その言語を超えたおぞましい姿を見た瞬間、ふたりがショック死した。そして3人がむさぼり喰われた。

ヨハンセンは必死でアラート号にたどり着き、海をかき分け追いかけてくる怪物に、船で決死の体当たりを喰らわせる。一瞬打ち砕かれ、星雲状になったクトゥルー。だが、その姿はみるみる復元されていくではないか。しかし、船足の速いアラート号は、なんとかその追撃から逃げ延びることに成功したのである――。

私を、暗い恐怖が襲った。その体験の意味をヨハンセンが知らぬまま逝ったのは、ある意味幸いだったかもしれぬ。だが、私は知ってしまった。クトゥルーは死んでなどいない。4月2日の地震で、再び海の底に封印されただけだ。

そして、次にまたルルイエが浮かびあがったそのときこそ、人類最後の日が到来するのだ――

インスマスを覆う影

The Shadow Over Inssmouth

H・P・ラヴクラフト

すべてはインスマスへの運命的な旅から始まった

1927年の暮れから翌年の初頭にかけて、極秘裏に行われた港町インスマスへの大規模な捜査と、容赦ない破壊をともなう一斉検挙は、私があの町での恐るべき体験を政府当局に訴え出た結果である。

この件に関する箝口令を無視して、私はその体験を話しておこうと思う。そうすれば、私の今後の行動を理解してもらえるだろう。

マサチューセッツ州エセックス郡のマヌーゼット河の河口に位置する港町インスマスは、19世紀はじめの一時的な繁栄のあとは衰微しつづけ、現在では知る者も稀な、うらぶれた港町となっていた。

私も、1927年7月15日、あの呪われた日まで、こんな町があることすら知らなかった。だが、運命の女神の気まぐれが、私をあの忌むべき町へと導いたのだ。

成人祝いの旅行として、ニューイングランド地方を気ままに旅していた私は、その途中、ふと思いついて母方の出身地であるアーカムへ向かうことにした。旅費を節約するため、安価なバスでの旅を選んだ私に、人人はこぞって思い直すよう忠告する。バスの旅ならば、インスマスを経由せざるを得ないのだが、彼らいわく、そこは陰気な退廃した町で、排他的な土地柄は、余所者にとってとても安全とはいえないらしい。迷信深い人々は、かの町を異教の悪魔に乗っとられた呪われた場所だと言う。

だが、そんな話にむしろ興味を惹かれた私は、なかば民話のような噂話に臆することなく、勇躍、奇妙な男が運転するおんぼろバスに乗りこんだのだ。

インスマスに着いた私は、次のアーカム行きが出発する午後8時まで、町中を散策することにした。だが、私はすぐにこの町を覆う暗い影に気づかされることになる。町はさびれ果て、いたるところに陰鬱な佇まいの廃屋が立ち並んでいる。そして、どこにいても漂ってくる、魚が腐ったような悪臭……。

さらに、この町をもっとも特徴づけるのが、「インスマス面」とでも呼ぶしかない、住人たちの独特な風貌だった。禿げあがった頭部、上部にかけて細くなっていく顔、平たい鼻、まばたきをしない濁った目、そして首の両側は幾重もの深い皺で覆われている。

どうやら年長者ほどこの特徴が強く表れるようだ。そんな彼らの様子は、無様を通り越して醜悪としか言いようがなかった。

私は、この町の歴史を教えてくれるというザドック老人を探しだした。老人は、普通の容貌の人間だった。彼は、最初こそ露骨な警戒心を隠そうとしなかったものの、私が持参したウイスキーを飲むと、やがて話しはじめたのだ。あの狂気じみた話を。

おぞましい血の秘密と そこに待ち受ける真実

ことの発端は、町の有力者オーベッド・マーシュが持ちこんだ、ある悪魔的な計画だったという。

オーベッドは海運船の船長として世界の海を駆け回っていたが、東インド諸島の小島で、カナカイ族という原住民と出会った。不思議なことに、彼ら部族だけは、常に他にない恵みを海から受けていた。堅く守られていたその秘密を、オーベッドだけが聞きだすことに成功する。

なんと、カナカイ族は、海の底に棲む邪神クトゥルーとその眷属〈深きものども〉に大量の生け贄を捧げる見返りとして、豊漁といくばくかの金を約束されていたのだ。さらにおぞましいことに、かの部族は〈深きものども〉と混血し、自分たち自身も眷属に変化していくという。

その言葉を証明するように、ある日突然、カナカイ族はいっせいに姿を消してしまった。取り引き相手の突然の消失に追い詰められたオーベッド。その彼が考えた乾坤一擲の一手こそ、異教の邪神をインスマスで祀り、悪魔の暗礁と呼ばれる岩礁で、〈深きものども〉との取り引きを行うことだったのだ。

さらに、オーベッドは怪物の女を妻として迎え、自身の家系に〈深きものども〉たちの血を迎えいれた。ザドック老人によると、この狂った計画は遂行され、その結果、インスマスは「ダゴン秘密教団」が支配する、退廃と背徳に満ちた魔の町になったというのである。

信じがたい話ではあったが、そこには否定できない何かがあった。実際に、私は見ているではないか。あの魚顔の醜い住人たちを。そして、ダゴン秘密教団の教会から漂ってくる、濃密な邪悪の気配を!

老人は、さらなる恐ろしい計画が密かに進められていることをほのめかしだした。その瞬間、老人の、海を見ていた目が大きく見開かれ、激しく取り乱しはじめたではないか。私に向かって「町から逃げろ!」と叫びつづける老人。

恐れをなした私は、町を出ようとバス停に向かった。だが、バスは出発しなかった。エンジントラブルのため動かないという。仕方なく町唯一の宿に逗留することにした私だったが、漠然とした不安にかられ、眠れずにいた。

夜半を過ぎたころである。私は、何者かが私の部屋の外で、扉を開けようとしていることに気づいた。周囲をすっかり囲まれていたのだ。身の危険を感じた私は、宿を脱出し、逃げはじめた。だが、町の連中は外部に通ずる主要な道をふさぎ、どうあっても私を始末するつもりのようだった。

絶望のあまり呆然とする私。そのとき、私は数年前に廃線になったという鉄道の存在を思い出した。必死に町を通り抜け、線路にたどり着いた私は、潜伏するのに絶好の溝を発見した。

そして、そこで息を潜めていた私の前に、そいつらは現れたのだ。異様で、得体の知れぬ、醜い魚人〈深きものども〉が! そのあまりのおぞましい姿に、私は知らず気を失っていた。

翌日、意識を取り戻した私はアーカムまで逃げ延び、政府の役人たちに、一部始終を話した。結果は、冒頭で述べたとおりだ。あの悪魔の町は、破壊された。すべては終わったかに見えた

だが、私にとって、それはむしろ始まりだった。

アーカムで自分の家系を調査した私は、母方のオーン家の叔父から見せられた資料の中に、驚愕の事実を発見した。曾祖母が、オーベッドの娘であった証拠を。私も、呪われた者のひとりだったのだ――。

あれから2年たった今、私は海の底を夢見る。顔は徐々に変化し、今朝とうとう本物のインスマス面になった。クトゥルー・フタグン! 私はいったい、何を恐れていたのか? もう怖くない。帰ろう、あの栄光に満ちた深海の魔神の巣窟に――。

ダニッチの怪

The Dunwich Horror

H・P・ラヴクラフト

寒村に産み落とされた呪われし子ども

マサチューセッツ州北部の丘陵地帯に、古びた寒村がある。家や田畑は荒れ果て、美しいはずの自然すら嫌悪の情を呼び起こすその村の名はダニッチ。魔女や悪魔信仰の噂が絶えない孤立した村だ

村人は退廃的な生活で堕落し、退化の道をたどりつづけているような連中ばかりだが、そんな彼らですら、忌避する家族があった。ウェイトリイ家である。

当主のウェイトリイ老は、若いころ妖術に手を染めていたとの噂もある、評判の悪い男だ。その娘ラヴィニアは白化症を患った不器量な女だったが、1913年2月2日、独身のまま子どもを産んだ。その夜、山は激しく鳴動し、犬たちは狂ったように吠えたてた。そして、そんな音をかき消すほどの絶叫が、村中に響きわたったという。

父のわからないその子はウィルバーと名づけられ、驚異的な成長を見せた。異常な早熟ぶりと、卓抜した知性を感じさせながらも、どこか獣めいた醜い容姿で、ウィルバーは村中の興味と嫌悪の的になっていく

ウィルバーが生まれてから、ウェイトリイ家は以前にも増して奇矯な振る舞いを見せるようになった。ひとつは、大量の牛を購入するようになったことだ。定期的に買いつけるのだが、不思議なことにいくら購入しても、牛小屋には常に数頭の、無気味な傷跡がついた牛しかいない。

また、村にほど近いセンティネルの丘の環状列石遺跡で、ウィルバー母子が妖しげな儀式を執り行っているのを、何人もの村人が目撃した。

さらに、ウェイトリイ老は、家の改築を何度も行っていたようだが、その廃材から判断する限り、部屋の壁はおろか天井板まで取り払い、建物全体を広大なひとつの空間に仕立てあげたとしか考えられないのだった。

1924年の収穫祭の夜、ウェイトリイ老が死んだ。いまわの際まで「ヨグ＝ソトース」や〈旧支配者〉など、謎の言葉を繰り返しながら……。

そのころには、ウィルバーはすでに成人と変わらぬまでに成長し、独学でとてつもない博識を備えた学者になっていた。各図書館に稀覯書や禁断の書の問い合わせを頻繁に送る

ことで、司書たちの間ではちょっとした有名人になっていたのである。

戦慄の恐怖に立ち向かった博士たちが目にしたものとは!?

ウィルバーが、初めてダニッチの外に出たのは、ラヴィニアが失踪した年の冬のことだった。ダニッチに一番近いアーカムのミスカトニック大学付属図書館におもむいたのだ。彼の目的、それは禁断の魔書『ネクロノミコン』だった。ウィルバーはその不完全な英訳本を携えており、それの補完を狙っていた。

図書館長ヘンリー・アーミティッジ博士は、ウィルバーの様子に不穏なものを感じ、貸出要請には応じなかった。すると、ウィルバーはしぶしぶ引きあげていったが、博士は彼が残した悪臭と、『ネクロノミコン』の一節が分かちがたく結びつくことに気づき、戦慄を覚えたのである

つづく数週間、アーミティッジ博士は、ウィルバーの周辺とダニッチに潜む実体の見えぬ何かについて、詳細に調査した。その結果、博士はある結論に達した。ウィルバーは、地球を脅かす奇怪で邪悪な存在を呼びだし、世界を破滅させようと企んでいるのだ!

あまりにも奇想天外な考えだが、あらゆる事実は、それを示唆していた。博士は、真に激しい精神的恐怖を感じた。一刻も早く、何か手を打たねばならなかった。

ウィルバーが再びミスカトニック大学付属図書館に姿を見せたのは、1928年8月3日のことだった。

その夜、アーミティッジ博士は、配置していた番犬どもがけたたましく吠える声で目が覚めた。その狂わんばかりの喧噪がいったん静まったあと、この世のものとは思えぬ絶叫がアーカムの街中に響きわたったのである。

博士は急いで盗難警報装置の鳴り響く図書館に駆けつけた。そこで、博士は見た。番犬に囲まれ、悪臭を放つ黄緑色の膿とタール状の粘液にまみれてのたうちまわるウィルバー・ウェイトリイの最期の姿を。

その頭と手は、確かに人間だ。だが胴体と下半身は怪物と呼ぶにふさわしい姿だった。胸あたりの皮膚は鰐の皮、背中は鱗に覆われ、腰から下は黒い剛毛が生え、腹部からは緑灰色の長い触覚が20本伸びていた ウィルバーは、その姿の大半を、彼の未知の父親から引き継いでいたのだ。

かつてウィルバーであったものは収縮と崩壊を繰り返しながら、やがて白っぽい粘液質の塊になり果てていった。博士をはじめ、その場にいたごく少数の人々は、嫌悪と恐怖の念をもって、その様子を見守るしかなかった。

しかし、こうしたことのすべても、真のダニッチの怪事件の幕開けにしか過ぎなかったのである。隠されていたダニッチの本当の恐怖は、ウィルバーの死をきっかけに大きく脈動しはじめていたのだった

それは、まずウェイトリイ家の周辺で始まった。地鳴り、破壊音、そして何か途方もなく大きく重いものが歩いたとしか思えない足跡、牛の惨殺死体。そして、とうとう、谷間の家に住む一家が襲われ、全員が消失する事件が起こってしまう。村人たちは、目に見えぬ怪物の出現に震えあがった。

ことの真相にたどり着いたのは、ウィルバーの日記を解読したアーミティッジ博士だった。博士は、助手ふたりを従え、ダニッチに向かった。

センティネルの丘に駆け上った3人は、迫りくる不可視の化物に噴霧器で特別な粉を吹きかけた。とうとう「それ」は正体を現したのである。

混沌としか呼びようのない、汚らわしいロープがのたうち回ったような、ぶよぶよの、おぞましい巨大な姿を!

博士たちは、研究の成果である破邪の呪文を唱えた。苦しむ怪物。そして、激しい閃光や爆発音とともに、断末魔の咆哮が丘を揺るがせた。

「助けて!! 助けてくれ!、父上!ヨグ=ソトース!」

今こそ、すべての謎が解けた。その化物は、ラヴィニアが〈旧支配者〉ヨグ=ソトースと交わって産んだ、なかば異次元に属するものである、ウィルバーの双子の兄弟だったのだ。ただ、ウィルバーよりも、〈さらに父親によく似ていた〉のである。

南極調査隊が発見した氷河に眠る謎の古代都市

私は警告する。今、計画されている大規模な南極調査を、即刻中止するようにと。そのために、私は語ろう。今まで封印してきた、南極での一部始終を。これを語れば、私は嘲笑の的となることだろう。証拠の品品も、偽造と疑われるのは避けようもない。

だが、それでも私は警告する。あの氷の世界に閉ざされているものには、絶対触れてはならない――。

私がミスカトニック大学探検隊の一員として南極圏に到達したのは、1930年10月20日のことだった。これから始まる未知との遭遇を思うと、知らずと興奮に胸がときめいた。時折見える壮大な蜃気楼の、驚くほどのなまなましさに、何やら不吉なものを感じながらも。

それから翌年1月22日までの約3か月間、私たちは、豊富な生物学的・地質学的成果に気をよくしていたが、調査すればするほど、新たな謎が発見されるのである。生物学者であるレイクが、いたく好奇心と野心を刺激されたのも無理のないことだった。

彼が、犬橇隊を編成して、飛行機でさらなる奥地に分け入ったのは1月22日午前4時のこと。そこから翌々日の朝まで、彼は無線で、間断なく驚くべき報告を入れてきたのである。

午後10時5分、興奮しきったレイクから、これまで見つけたいかなる山よりも高い山脈を発見した、との報が入った。台地の高さを考慮に入れれば、主要な山頂はヒマラヤを凌駕するという。山の一部、特に上部は何かの結晶でできており、奇妙に輪郭の整った方形か半円形をした洞窟の入り口が数多く見られる。そして時折猛烈な突風が吹いているらしい。

そして、午後10時15分、とうとう運命の分水嶺となった、あの報告が入ったのである。

それは、まったく未知の性質を持つ、化物じみた生物の化石だった。高さは約2・5メートル。樽状の胴体に膜状の翼が生え、その頭部は五芒星の形をしている。生物として、既存のあらゆる分類に属するものではない。そのありさまは、『ネクロノミコン』に記された〝古のもの〟そのものだった。

レイクは、その巨大な標本14体をベースキャンプに持ちこむことに成功し、解剖を開始した。だが、それ以降、なぜかレイクたちからの連絡はぷっつりと絶えてしまった。重大な事故でも起こったかと心配した私たちは、急遽捜索隊を組織し、ベースキャンプに向かった。

そして、私たちは、レイクの報告にあった驚異的な山脈を目のあたりにするのだが、それは同時に悪夢の始まりだったのである。

キャンプで私たちが見たもの、それはあまりにも凄惨な惨殺死体の山だった。哀れレイク隊は、人も犬も、異様な力でずたずたに切り裂かれていたのだ。そして、若きゲドニーと1匹の犬、さらにキャンプ隊の道具のいくつかが、レイクの報告にあった謎の生物標本とともに消え失せていた。

巨大な迷宮で見つけたのは人類史以前の記録と、そして……

翌日、私とダンフォースのふたりが、ゲドニー捜索のため、飛行機で山脈の奥地に分け入ることになった。ついに山脈を越え、それを見たと

き、もしかしたら私は絶叫していたかもしれない。そこには、あってはならないはずの人工都市がそびえ立っていたのだ！

　着陸した私たちは、驚愕の石造物群をつぶさに見た。それは、明らかにわれら人類に属するものではなかった。太古に、われわれとはまったく異質の、より高い知性が存在したことを、遺跡は物語っていた。

　やがて、地中奥深く広がる開口部を発見した私たちは、その深奥でさらなる驚異に遭遇することとなる。それは、壁一面を覆う精緻な彫刻が物語る、〈古のもの〉たちの歴史だった。

　そこには、彼らが地球に生命が生まれる前に宇宙から飛来したこと、その高度な科学技術で、南極をはじめとした各地に都市を造り、彼らが「ショゴス」と呼ぶ奴隷生物を作ったこと、彼らに続いて地球に飛来した他生物たちとの間に、幾度となく激しい争闘があったこと、その戦いと黎明期の地球の激しい地殻変動により、徐々に彼らの文明が衰退していったことなどが記されていた。

　私は、そこに、重大な問題が隠されていることに気づいた。彫刻の中に、彼ら〈古のもの〉が、漠然とした言いようもない邪悪が秘められた場所として忌避した地点があることに。そこには、彼らが地球にやってきた太古に、すでに崩壊していた都市があったというのだ。

　そこは、初期白亜紀に発生した大地殻変動により、この狂気の山脈よりもさらに高い山脈となったと記されている。私は、今自分たちのいる場所が、あの忌まわしき『ネクロノミコン』に記されたレン高原であること、そして〈古のもの〉ですら恐れを抱いたその高地が、『ナコト写本』がほのめかす、凍てつく荒野カダスであることを、すでに疑わなかった。

　ゲドニー捜索のため、私たちはさらに迷宮の奥に踏みこんでいったが、その先で待っていたものは、若きゲドニーと犬の、丁寧に包まれた遺体と、何者かが使用した形跡のある道具類だった。

　誰が、これらをここまで運んだのかは、すでに疑う余地がなかった。私たちは、これから遭遇するかもしれぬもののことを考え、恐怖した。だが、違ったのである。本当の恐怖は、別の形をして、私たちふたりを待ちかまえていたのだ。

　ゲドニーを殺したはずの〈古のもの〉の無惨な死体。白化した巨大ペンギンたちの突然の恐慌。そして、響きわたった「テケリ・リ！」と叫ぶ謎の声――。それは〈古のもの〉を滅ぼしたショゴスの恐るべき鳴き声だったのだ。あの強力な〈古のもの〉を殺したのは、こいつらしかいない！

　私たちは必死に逃げた。ダンフォースはすでに正気を失っていたと思う。だが、ダンフォースを真の狂気に誘ったのは、さらに激しい恐怖だったのだ。なんとか飛行機にたどり着き、私たちは悪夢の都市から脱出した。しかし、そのとき、ダンフォースは見てしまったのだ。狂気の山脈の、その背後に立ちのぼった蜃気楼を――。

　何を見たか、ダンフォースは決して語ろうとはしない。だが、ときどき、こう囁くのだ。

「ヨグ＝ソトース」と。

墳丘の怪
The Mound

ゼリア・ビショップ

アメリカ西部の村に伝わる恐ろしい幽霊譚を求めて

西部がフロンティアでなくなったのは、ここ数年のことだ。今では、西部もすっかり私たち人間の領域となっている。だが、それはあくまでも表面上のことにしか過ぎない。

私は知っているのだ　アメリカ西部の真の古ぶるしさと、秘められた恐怖を、忘却すらかなわぬあの出来事によって、私はそれを思い知らされたのだ……。

1928年、アメリカ原住民を研究する民族学者の私は、カドウ郡辺境の村ビンガーに入った。実際この村の周辺では、実際に幽霊が出没し、それにまつわる不可解な事件が何度も起きているという、まことしやかな噂について調べるためだ。

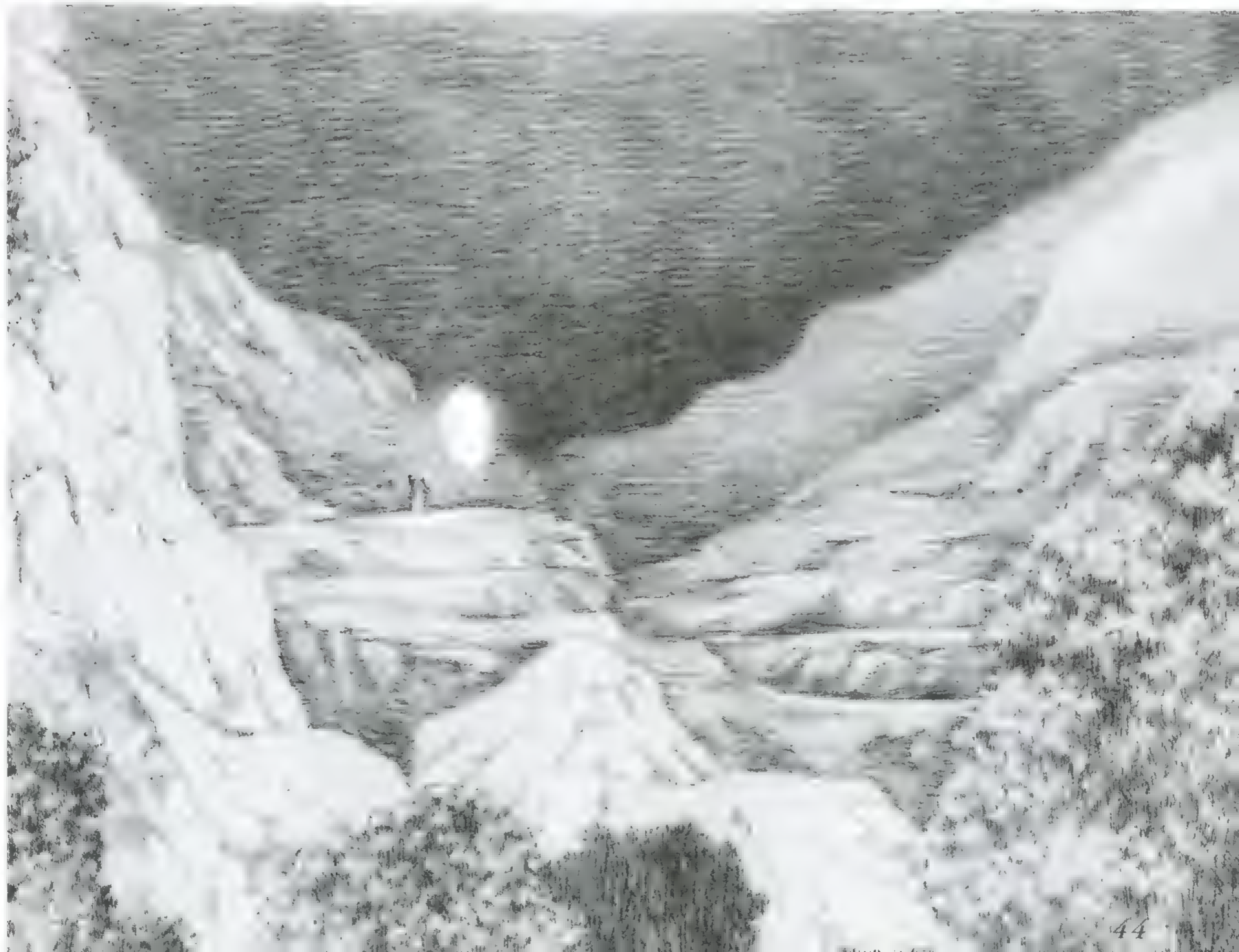
その目的を知った村人たちは、口々に「そんな危険なことはやめろ」と強く諫めてきた。原住民のみならず、開拓民にとっても、墳丘とその幽霊は大いなるタブーだったのである。

調査によると、最初の事件は1891年に起こった。ヒートンという名の青年が墳丘に入ったのち、廃人となって村に戻ってきたのだ。彼は、精神が崩壊するほどの恐怖を味わったらしく、8年後に亡くなるまで、うわごとのように複雑怪奇で信じがたいことを口走りつづけたという。

その後も、数年に一度、墳丘に近づいた者が説明のつかない狂気にとらわれ、死亡する事件が続いた。

逗留先の主人が、私の身を心から案じ、調査を断念させるため、あるものを見せようと誘ってきた

それは、夜になると墳丘をさまよう「首のない女の幽霊」が手にする松明の明かりと、昼間出没する「インディアンの幽霊」の姿だった。

彼らの語る幽霊は実在したのである！

だが、私の興味はむしろかきたてられる一方だった。さらなる情報を得るため、私はインディアンの老酋長、グレイ・イーグルのもとを訪れた。だが、彼も同じだった。詳しく語ることを拒否し、私に墳丘への興味を失わせようとするのだ。

しかし、それがかなわぬとわかると、お守りとして、代々伝わる謎の金属でできた円盤を首にかけてくれた。その円盤こそ、私をすべての真実に導く鍵だったのだ

墳丘に向かった私に、「昼間の幽霊」が姿を見せた。その姿は、インディアンに似て非なるもので、洗練と邪悪と怠惰を漂わせた謎の人間だった。恐れおののく私の前から、それは突然姿を消した。

勇気を振り絞り、発掘を始めた私は、ある地点でグレイ・イーグルのくれた円盤が奇妙な動きをすることに気がついた。まるで磁石が鉄にひかれるように、一点に向かって動くのだ。

その地点を掘りはじめた私は、円盤と同じ金属、そして同じ意匠が彫りこまれた不思議な円筒を見いだした。その中には、信じがたい内容の古い手記が収められていたのだ。

400年の時を超えて手記が教えた驚愕の結末

手記の日付は1545年、パンフィロ・デ・サマコナと署名されていた。

彼、サマコナは、16世紀スペインの探検家コロナドに同行していた隊員だったが、野心的な若者だった彼は、友人のインディアン「突進する野牛」の語る地下の黄金郷を発見しようと、単身この墳丘にやってきた「突進する野牛」は、そこには地下都市に至る開口部があり、その都市に、彼らが「古ぶるしきもの」と呼び恐れる存在がいるという。

サマコナは、万端の準備を整え、地下へと続く洞窟を歩みはじめた。太陽から隔絶された世界に入って3日目、サマコナはついに青みがかった霧に包まれた平原――未知の世界への入り口――に到達したのだ。地下にもかかわらず、平原には草木が生え、川が流れていた。

それからさらに歩きつづけた彼は、やがておぞましい彫刻が刻みこまれた古い石造りの神殿にたどり着いた。そこで彼が見たのは、吐き気を催すような邪神像と気味の悪い獣、そして悠久の太古から生きるクン＝ヤン人こそ、インディアンたちが「古ぶるしきもの」と呼ぶものの正体だった。

彼らは、太古に他の星から渡ってきたのだという。長い年月をこの地下都市で過ごし、生物的な進化と神の域に達する技術の進歩を得たあと、それらを自ら捨て去るほどの退廃の段階に陥っていた。地上の情報をもたらす客人として扱われたサマコナは、徐々に彼らの社会に溶けこみ、地下世界について学んでいく。

体の非物質化などの不思議な力を持つクン＝ヤン人、その彼らが住むツァス、それよりもさらに古い謎の領域ヨス、彼らが信仰するトゥルー（恐らく、あの『ネクロノミコン』がいうところのクトゥルーのことだろう）と蛇神イグの二大神、人と獣が混血した禍々しい人獣、そしてヨスよりさらに下の世界の神、ツァトゥグア。それは、あまりにもおぞましい世界だった。

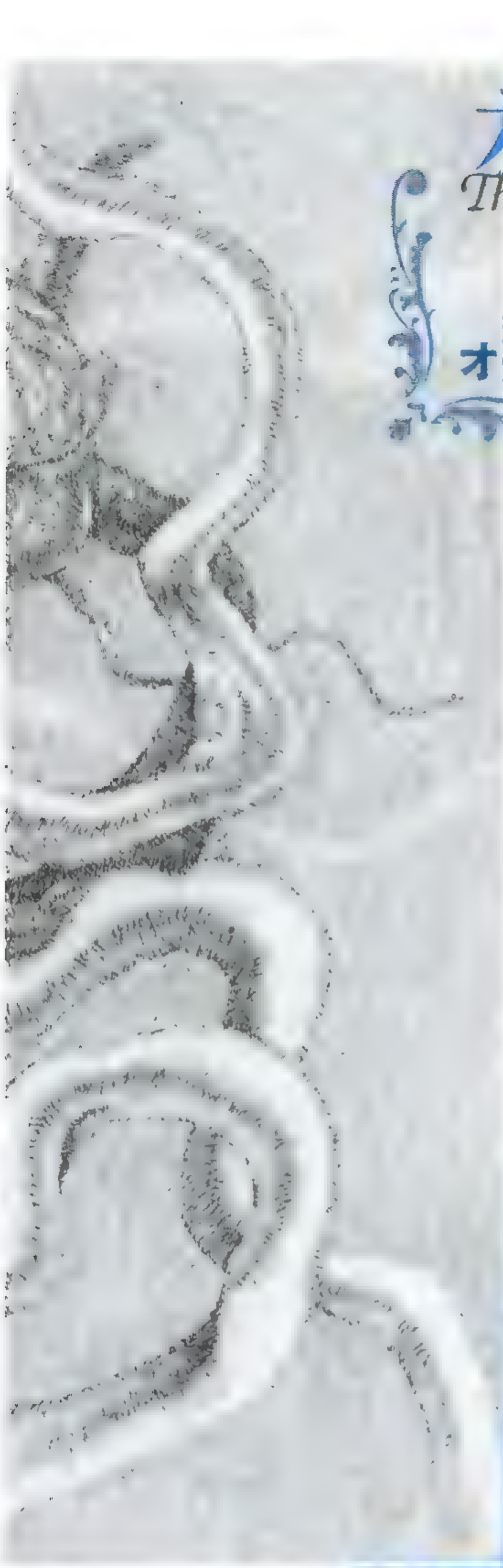
サマコナは、地上への脱出を決心する。だが、それは危険な賭けであった。彼の一度目の脱出行は失敗に終わった。そして、彼に協力したクン＝ヤン人の女性、トゥラ＝ユブが、見せしめのために首を切られ、地上の歩哨となる運命を負わされた。それこそ、あの、夜にさまよう首のない女の幽霊の正体だったのだ。

サマコナは、まだ価値ある者として、もとの待遇に戻ったが、それでも彼は地上をあきらめられなかった。手記は、二度目の脱出の実行を示唆して終わっている。だが、私は見てしまった。サマコナの、無謀な計画の結末を――

手記に残る開口部を探しあてた私は、半信半疑のまま地下に下った。はたして、そこにはサマコナの手記どおりの世界が広がっていた。さらに、私の前に墳丘を訪れ、死に至ったという人々の持ち物が、地下に散らばっていたのである

しかし、開口部は彼らが墳丘に入るずっと以前から閉じられていたのだ。これが、サマコナの手記にあったクン＝ヤン人の非物質化と再物質化という非現実的な能力の証だというのか。そして、さらに下の世界に入りこんだ私は、とうとう邪神像が刻みこまれたあの神殿を見つけてしまった。

私をとりまく空気に、敵意が満ちはじめた。そして、それは現れた。二度目の脱出に失敗し、惨殺され、人間の体を奪われて、永遠の奴隷となったサマコナが。その白い胸には、こう書かれてあった

「クン＝ヤンの意志によりトゥラ＝ユブの首なしの軀体に捕らわれたり」

永劫の探究
The Trail of Cthulhu
オーガスト・ダーレス

人知れず進められる邪神復活の阻止計画

ここに、4つの書簡がある。生まれも育ちも異なる、4人の青年が書き残したものだ。

＊　＊　＊

●アンドルー・フェランの手記

もっとも古い書簡は、1938年9月ごろに、ボストンに住むアンドルー・フェランによって書かれた。

フェランの手記は、彼が新聞に奇妙な求人広告を見つけたところから始まる。広告主はラバン・シュリュズベリイ博士。神秘思想の研究家で、古代人の神話と信仰の権威だ。博士は、室内でも黒眼鏡をかけている、印象的な容貌の老人だった。

面接の結果、採用されたフェランは、博士の秘書を務めはじめたが、やがて奇妙な夢を見るようになる。それは必ず、博士に勧められた金色の蜂蜜酒を飲んだ直後に起こった。

夢の中で、フェランは博士とともにバイアクヘーと呼ばれる蝙蝠のような謎の飛行生物に乗り、世界中で「クトゥルー」の調査を行っていたのだ。

あまりに現実的な夢に、気がおかしくなったのかと自分を疑っていたフェランだったが、ある日、博士が夢で見たのと同じ化物に乗って、どこかに飛び去るのを目撃してしまう。やはり、夢ではなかったのだ。

問い詰めるフェランに、博士は語った。それは、人類以前の太古に地球を支配していた邪神クトゥルーと、その復活を企む邪教集団の恐るべき計画、そしてクトゥルーに敵対する邪神ハスターの力を利用して、それを阻止しようとする博士の孤独な戦いの歴史だった。そして、初めて見た博士の黒眼鏡の奥には、眼球のない黒い穴がぽっかり広がっていた。

絶叫しそうになるフェランに、博士は急いで逃げるよう告げる。博士の家を、クトゥルーの眷属たちが襲撃するというのだ。博士は、フェランに蜂蜜酒と小さな笛、そして五芒星が刻みこまれた不思議な石を手渡した。

博士の家は、その日のうちに焼失している。フェランは、彼の身にも重大な危険が迫り、それから逃れようと、笛を使って何かを呼んだことを手記に書き残して、失踪した。

＊　＊　＊

●エイベル・キーンの書置

神学生エイベル・キーンの書置には、あの呪われた港町インスマスで1940年に起きた大火の驚くべき真相が記されている。

ある日、下宿に戻ったキーンは、自分のベッドに見知らぬ男が寝ているのを見つけた。男は直接心に語りかけてきた。彼はフェランと名乗ったが、それは2年前、この下宿から神隠しのように姿を消した男の名だった。

キーンは、われ知らず、この男の役に立ちたいという、常軌を逸した衝動に駆られた。そんな彼に、フェランが「夢」として見せたもの、それはインスマスでの自身の調査行動と、それを尾行する〈深きものども〉の姿だった。

その夢を強い警告と知りつつも、キーンは好奇心に任せて、フェランという人物と、インスマスの謎の調査に乗りだした。その過程で、彼は禁断の魔書『ネクロノミコン』の存在と、そこに書かれたおぞましき〈旧支配者〉たち、そしてそれを信奉する邪悪な「ダゴン秘密教団」のことを知る。

そして、ついにキーンはインスマスに乗りこんだ。胸くそ悪いその港町で、ダゴン秘密教団の情報を得たキーンを、フェランは下宿で待ちかまえていた。彼はキーンの好奇心の強さにあきれながら、インスマスの町で破壊工作を行うことを打ち明けた。キーンは、同行を強く願った。滅ぼすべき邪悪を、捨ててはおけな

かったのだ。

インスマスで、ふたりはマーシュ家の屋敷に火をつけた。屋敷の中から、町の支配者エイハブ・マーシュが火だるまになって転がりでてきた。おぞましき《深きものども》の正体をさらしながら。火事は延焼し、インスマスの大部分を焼き払うことになった。キーンは、その後すぐに神学校を辞め、姿を消した。フェランと同じように――。

＊　＊　＊

●クレイボーン・ボイドの遺書

現在、ブエノスアイレス大学付属図書館に収められているクレイボーン・ボイドの遺書は、別々の3つの書簡をひとつにまとめたものだ。

ニューオリンズで、悠々自適の研究生活を送っていたボイドの運命は、彼の大伯父アサフ・ギルマンの死によって激変した。彼の遺した研究資料を、ボイドが相続することになったのだ。ギルマンはどうやら世界各地に散らばる異教信仰について研究していたらしい。

だが、その記録には、学術調査とは無関係と思われる最近の事件事故も含まれていた。それらをつなぎ合わせると、大伯父は「クトゥルー」を信仰する邪教集団が企てる恐ろしい計画について調査していたとしか考えられなかった。

その調査を受け継ぐことにしたボ

イドは、ある日、奇妙な夢を見た。謎の老人が、ボイドの身に危機が迫っていることを告げ、彼が取るべき行動について示唆するのだ。その夢に無視できない何かを感じたボイドは、夢の指示どおりに行動し、南米ペルーに渡る。

そこで得た資料の数々を読んだボイドは、「クトゥルー」の実在とその眷属たちの野望が現実の脅威であることに確信を抱き、大伯父の遺志を継いで、クトゥルー信者の決起を阻止する決心を固める。

奥地サラプンコあたりで、キリスト教の神父に化けた〈深きものども〉がクトゥルー教の布教をしているのを発見したボイドは、神父を撃ち殺す。だが、神父だったものは、その皮を脱ぎ捨て、おぞましい姿で湖に消えた。そして、ボイドもまた、行方をくらませたのである

＊　＊　＊

●ネイランド・コラムの記録

怪異小説『異世界の監視者』で成功をおさめたロンドン在住の作家ネイランド・コラムは、ある日、シュリュズベリイ博士の訪問を受けたと、記録に書き残している

いくつか本の内容に関する質問をしたあと、博士はコラムに、本の出版後、身の危険を感じないかと問うた。実はそのとおりであった。そして、コラムは博士に促されるまま窓際から見た表の通りに、〈深きものども〉を見留め、愕然とする。

危険から逃れたコラムは、博士に同行することになった。そして、長い砂漠の旅の末、あの狂える詩人アブドゥル・アルハザードが『ネクロノミコン』に記した〈無名都市〉に潜入したのだ。

そこでコラムは、フェラン、キーン、ボイドの3人が棺に横たわるのを発見する。だが、3人は死んではいなかった。彼らを復活させ、クトゥルーと対決する知識を得るべく、驚くことに、博士はアルハザードの霊を召喚しようとしていた。儀式は成功し、アルハザードは現世に現れた。失われていた知識が甦ったのだ。

クトゥルーの眠るルルイエの場所と、『ネクロノミコン』の一部を手に入れたふたりは、遺跡から吹きすさぶ凄まじい霊風の追撃を逃れて、かろうじて〈無名都市〉からの脱出に成功する。だが、ロンドンに帰る船で、ふたりは嵐に襲われた。〈深きものども〉の襲撃だった。ほかの乗客を守るため、ふたりはバイアクヘーに乗り、いずこかへと去っていった。コラムの記録だけを残して――。

すべてを明かす ホーヴァス・ブレインの物語

そして、これら4つの文書は、ホーヴァス・ブレインの語る物語で、ひとつに収束されることとなる。

ブレインは考古学の研究のため滞在していたシンガポールで、5人の紳士と出会った。彼らはシュリュズベリイ博士とその一行で、彼らの戦いの最後の戦士として、ブレインを選んだのだった。

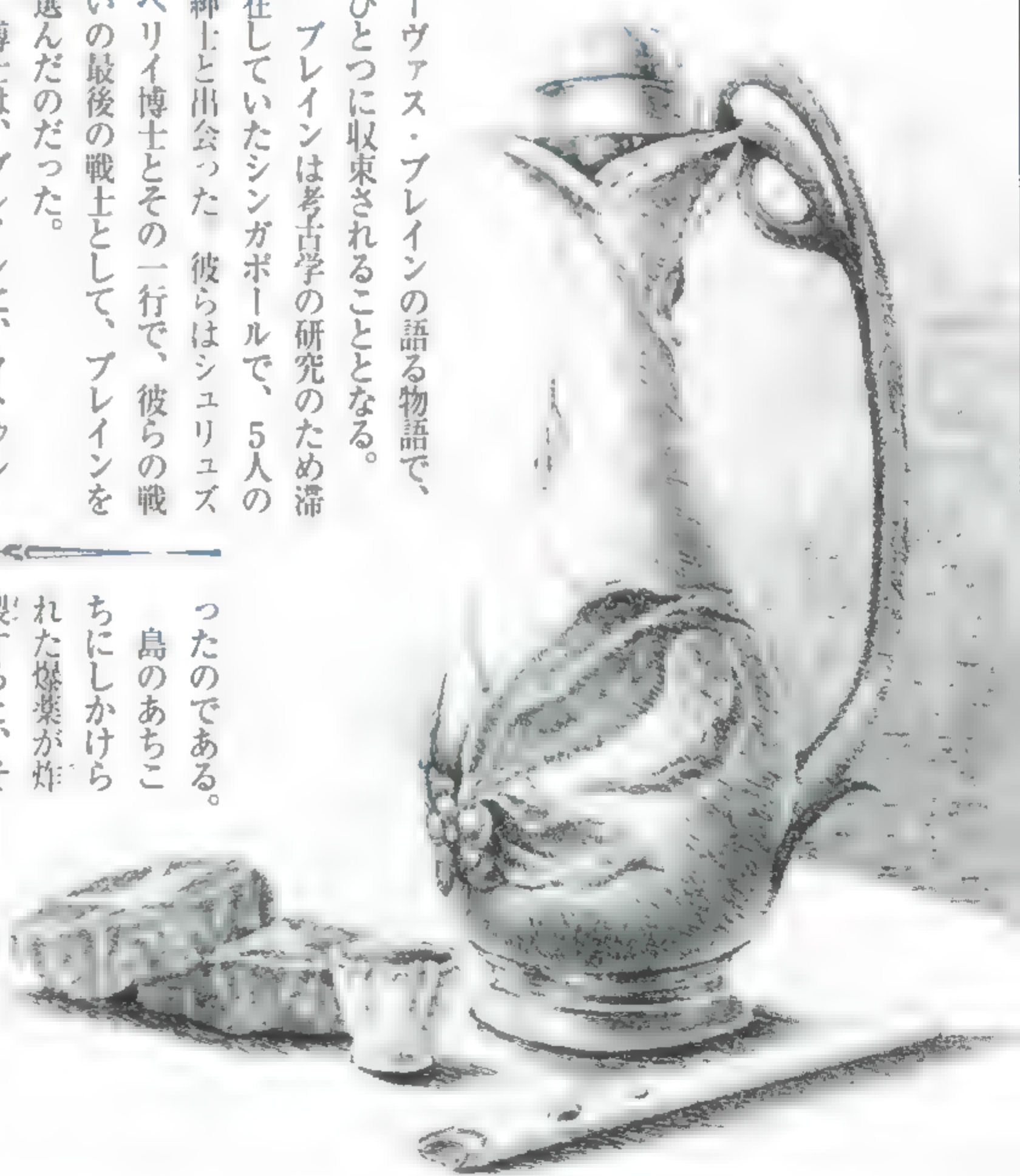
博士は、ブレインに、クトゥルーが眠る地「ルルイエ」の場所を特定する手助けを求めていた。ブレインは、博士の奇怪な話をためらうことなく信じた。彼の血が、それが真実だと訴えていたのだ。彼はインスマスのウェイト家の末裔だった。1928年にインスマスの町を襲った災厄のため、ブレイン家に養子に出されていたのである。

ブレインは、あの呪われたマーシュ家の代理人だった祖父の手記に、博士の話との一致を見つけ、慄然とする。真実を知るため、博士たちに同行した彼は、アメリカの軍艦に乗りこみ、ポナペ島沖合の島にたどり着いた。その場所こそがルルイエだったのである。

島のあちこちにしかけられた爆薬が炸裂すると、そのエネルギーにあぶり出されるように、ついにあのクトゥルーが姿を現した。大爆発にも傷を負うことなく。

とうとう、軍は最後の手段に出た。いったん沖合に退いた軍艦から、1機の戦闘機が発進し、しばらくののち、ルルイエの方向にキノコ雲が立ちのぼった。核兵器が投下されたのだ。ルルイエは島ごと破壊されたのである

クトゥルーの消滅に自信を持つ軍人たちと、眉を曇らせる博士。だが、ブレインの中の〈深きものども〉の血が告げていた。クトゥルーは滅んでいないことを。そして邪神の眷属たちの復讐が始まることを。

第２章

古き神々と異形のものどもの世界

Chapter 2 The World of "Great Old Ones"

原初の地球に降り立ち、
恐るべき力で君臨した〈旧支配者〉たち、
地球や宇宙のさまざまな場所に
封じられた邪神たちは、
復活のときを虎視眈々と狙っている
闇の底に潜む邪悪なる神々と、
古のおぞましきものどもの姿に迫る

太古の地球を統べる神々

〈旧支配者〉

Ancient Ones, Great Old Ones

ホラー作家H・P・ラヴクラフト。その作品で〈旧支配者〉という邪悪な神の存在を世に知らしめた。

ラヴクラフトが記した おそるべき邪神の存在

人類は万物の霊長というが、それは真実だろうか――？

20世紀初期に生きたホラー作家、H・P・ラヴクラフトは、そんな疑問を作品の中で問いかけた。彼はいくつもの作品中に〈旧支配者〉、あるいは〈グレート・オールド・ワン〉（古ぶるしきものたち）と呼ばれる、おぞましき「神」の存在を描くことで、その答えを導きだそうとしていたようだ。

〈旧支配者〉という言葉が初めて登場したのは、ラヴクラフトの『クトゥルーの呼び声』である。

1908年に行われたアメリカ考古学協会の年次総会で、ニューオリンズ警察のルグラース警部が持ちこんだおぞましい小像があった。これは、警部がニューオリンズ南部の沼沢地で、奇怪な儀式を行う狂信的なカルト集団を制圧したときに押収したものだが、逮捕した信徒たちの口から、この像と、それにまつわるおぞましい事実が明らかになる。

彼らが崇拝するのは、人類誕生よりも遥か昔に地球に到来して棲みついた〈旧支配者〉のクトゥルーで、その像はクトゥルー自らによって示されたものである。そして、海底深くに沈み、死の眠りにつく大いなる存在は、いつの日か再び目覚めるのだと――。

再びこの世を支配するため 人類に邪悪な波動を送る

かつて地球が若かったころ、星の世界からやってきた「名状しがたき異形の存在」が地球を支配していた。人類以前から地球に存在していた彼らは、人間の理解を超えた力や意識を持っており、人間の狭量な尺度で見れば、恐ろしく邪悪な「神」という存在としてしか認識できないだろう。そんな彼らのことを〈旧支配者〉と呼ぶのである。

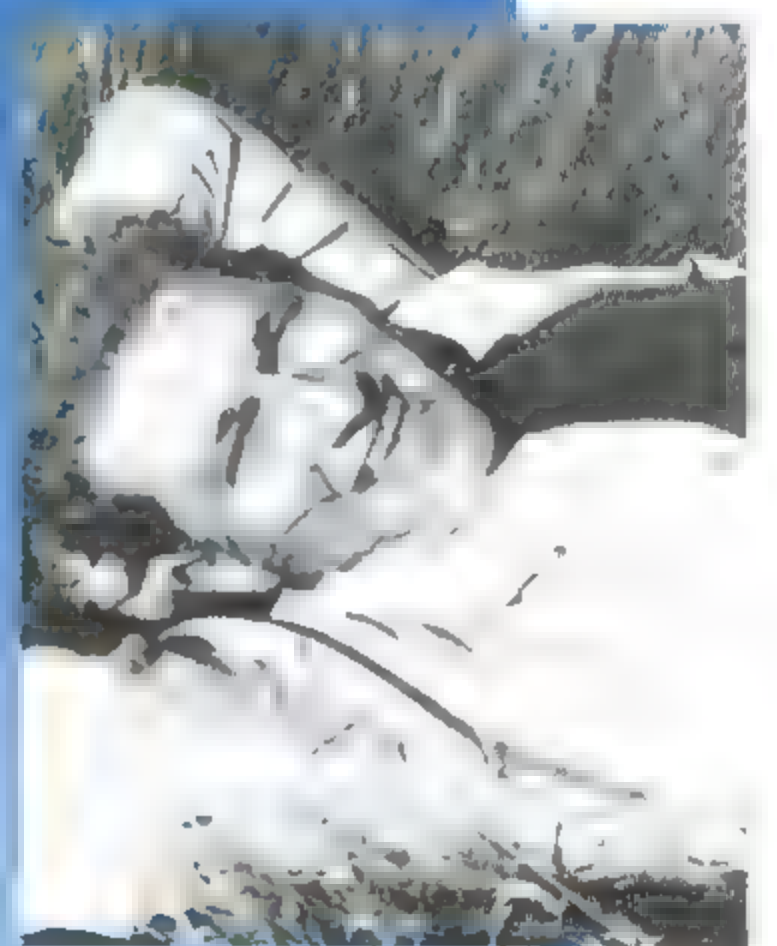
〈旧支配者〉は単一の存在ではなく、いくつもの「神性」が互いに対立しあいながら、地上の支配権を争っていた。やがて、星辰の移り変わりによって、〈旧支配者〉は地上に生きることができなくなり、地底や海底、または宇宙空間へ身を移さざるを得なくなる。

しかし、いずれも滅びたわけではなく、あるものは永き眠りにつき、またあるものは宇宙の彼方より、再臨の機会をうかがっているのだ。い

もうひとつの大きな存在〈旧神〉

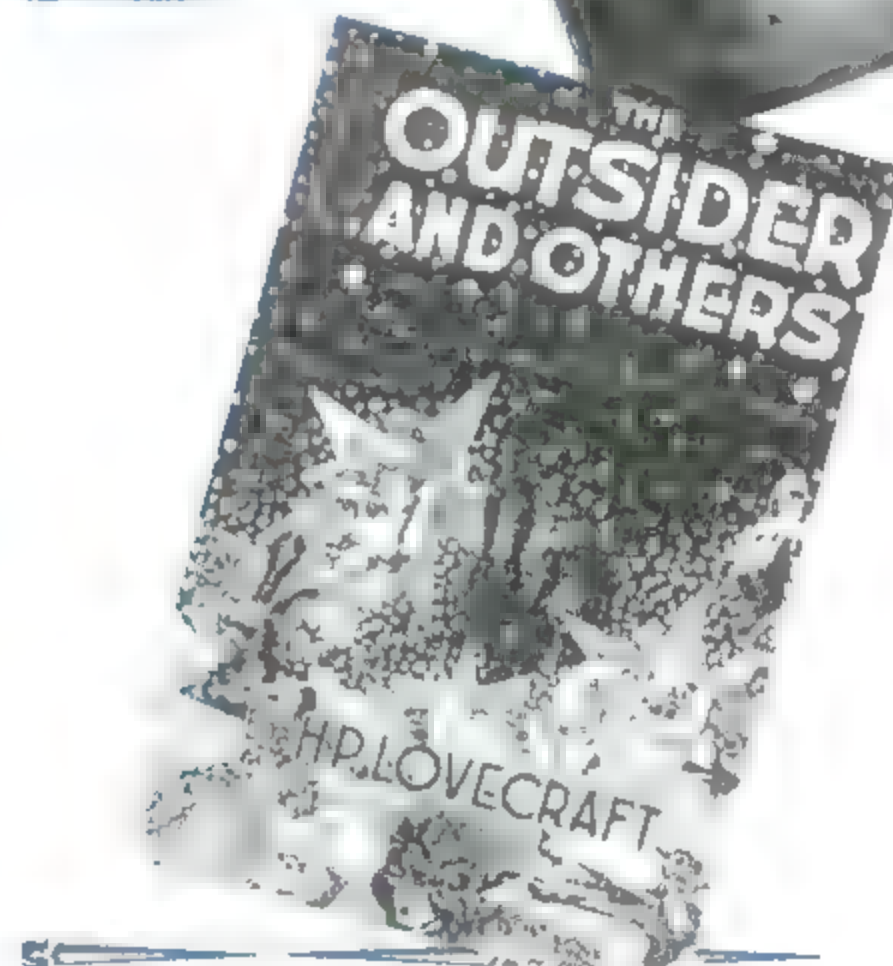
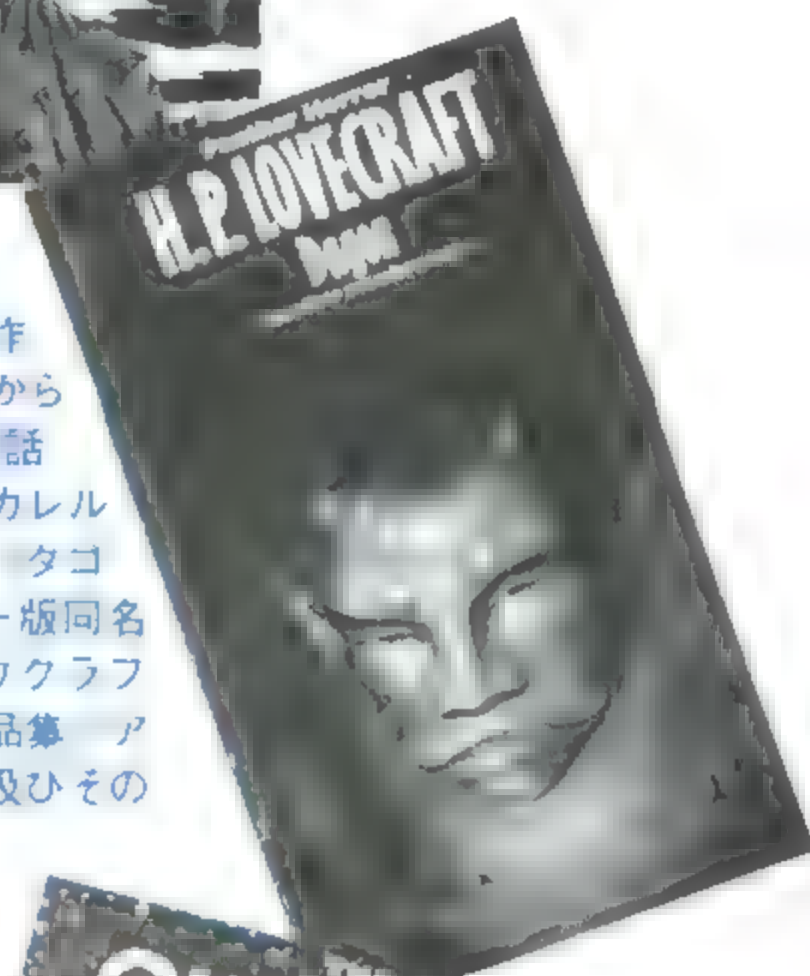
作家オーガスト・ダーレスは、師ラヴクラフトの文業を世に広めるべく、ラヴクラフトおよび同輩、後輩作家たちの作品に共通する“神話大系”としての特色を前面に打ちだす戦略を推し進めた。この戦略が功を奏して、ラヴクラフトとクトゥルー神話大系は、より幅広い読者と、後継者となる作家たちを獲得することができたのである。その過程で、ダーレスは神話大系に、いくつかの設定を新たに導入した。

その第一が善悪対立の構図の導入である。ダーレスは、〈旧支配者〉を宇宙の邪悪の権化のように扱うことにしたのだ。邪悪に対する善の存在として、オリオン座のベテルギウスに存在する〈旧神〉を持ちだし、邪悪な〈旧支配者〉と善なる〈旧神〉が宇宙において対立するという設定にした。〈旧神〉について詳しいことは明らかにされておらず、その実体は神秘に包まれている。

こうした構図を確立したことは、20世紀前半のアメリカにおけるパルプ・ホラーの世界で、エンターテインメント作品として成立するために必要な操作であったが、ラヴクラフトの目指す「新たな恐怖」とは別のものだという見方もある。

若き日のオーガスト・ダーレス。彼はラヴクラフトの作品に惚れこみ、若干17歳にして、怪奇小説専門誌「ウィアード・テイルズ」にデビューを果たしている。

オーガスト・ダーレスは、『永劫の探究』などの神話作品において、〈旧支配者〉を4つの属性に分類した。地（ヨグ=ソトース、ツァトゥグア、ナイアルラトホテップなど）、水（クトゥルー、ダゴン、ヒュドラなど）、火（クトゥグア）、風（ハスター、ツァール、イタカなど）となり、地と火、水と風が敵対関係にあるとした。

この設定はわかりやすいため、多くの後継作家およびゲームの設定に引き継がれたが、人間の知恵がおよばないはずの「宇宙的恐怖」にふさわしくないという批判もある。また、アザトースやウボ=サスラなど、上記の四大属性では明確に分類できない神性も数多い。

ラヴクラフトが発表したクトゥルー神話作品の数々。上から『クトゥルー神話の落とし子』（カレル・トール画）、『ダゴン』（パンサー版同名書より）、ラヴクラフトの最初の作品集『アウトサイダー及びその他の物語』

つしか星のめぐりの整う日がくれば、〈旧支配者〉たちは復活し、この地球を再び支配することだろう。〈旧支配者〉たちは闇の中に横たわり、己の存在を人類の夢に忍びこませた。そのため、邪神たちを崇拝するカルトは今なお滅びずに、世界のさまざまな場所に息づき、その復活のときを待ちわびつつ、邪神の秘密に近づく者を密かに抹殺するのである。

その存在として真っ先に世に知られたのが、『クトゥルーの呼び声』に書かれたクトゥルーであり、その後ラヴクラフトは、数多くの作品の中で、異界の扉の彼方にいるヨグ=ソトース、「外なる神」の使者ナイアルラトホテップなど、さまざまな〈旧支配者〉の存在に言及している。

死の眠りに
封じられし偉大な存在

クトゥルー
Cthulhu

登場する主な作品
クトゥルーの呼び声／インスマスを覆う影／永劫の探究／アーカム計画／狂気の山脈にて／墳丘の怪／地を穿つ魔／ネクロノミコン　アルハザードの放浪

大いなる存在、クトゥルー。蛸に似た頭部に顔面には無数の触腕が生え、ゴム状で鱗に覆われた胴体、手足に巨大なかぎ爪、背中に細長い翼を有すると伝えられる。

芸術家の夢と怪事件から発覚した恐るべき存在

約3億年前に地球へ飛来した「外なる邪神」の一族をクトゥルーと呼ぶ。"Cthulhu"と表記されるが、正確には人類の声帯では発音できない音からなる名前で、クトゥルー、クトゥルフ、ク・リトル・リトル、チューールー、九頭龍、朱沫龍など、類似した音が当てられる。

ラヴクラフトの『クトゥルーの呼び声』によれば、この存在がある種の人々の間で知られるきっかけとなったのは、1925年2月28日の夜、全世界で起こった精神的な衝撃波の感知現象である。

それは動機不明の殺人事件、精神病院や刑務所での不可解な暴動、まったく無関係ながら連鎖的にも見える暴力事件や自殺を引き起こし、多くの鋭敏な精神を狂気の波に飲みこんだ。彼らの多くはその記憶に耐えられず、発狂したか、あるいは、何者かの手によって葬られた。

おそらくは、若き芸術家の卵であるウィルコックスの奇怪な彫像がジョージ・ギャマル・エインジェル教授のもとに持ちこまれなければ、その原因が海底に封じられた邪神であるとはわからなかっただろう。残念ながら、エインジェル教授も、その遺産相続者フランシス・ウェイランド・

クトゥルーに対する伝承の二連句

ふんぐるい　むぐるうなふ　くとぅるう
るるいえ　うがふなぐる　ふたぐん
Ph'nglui　mglw'nafh　Cthulhu
R'lyeh　wgah'nagl　fhtagn
（ルルイエの館にて死せるクトゥルー、
夢見るままに待ちいたり）

『クトゥルーの呼び声』
（クトゥルー1』大瀧啓裕訳／青心社文庫より）

クトゥルーに仕える眷属たち

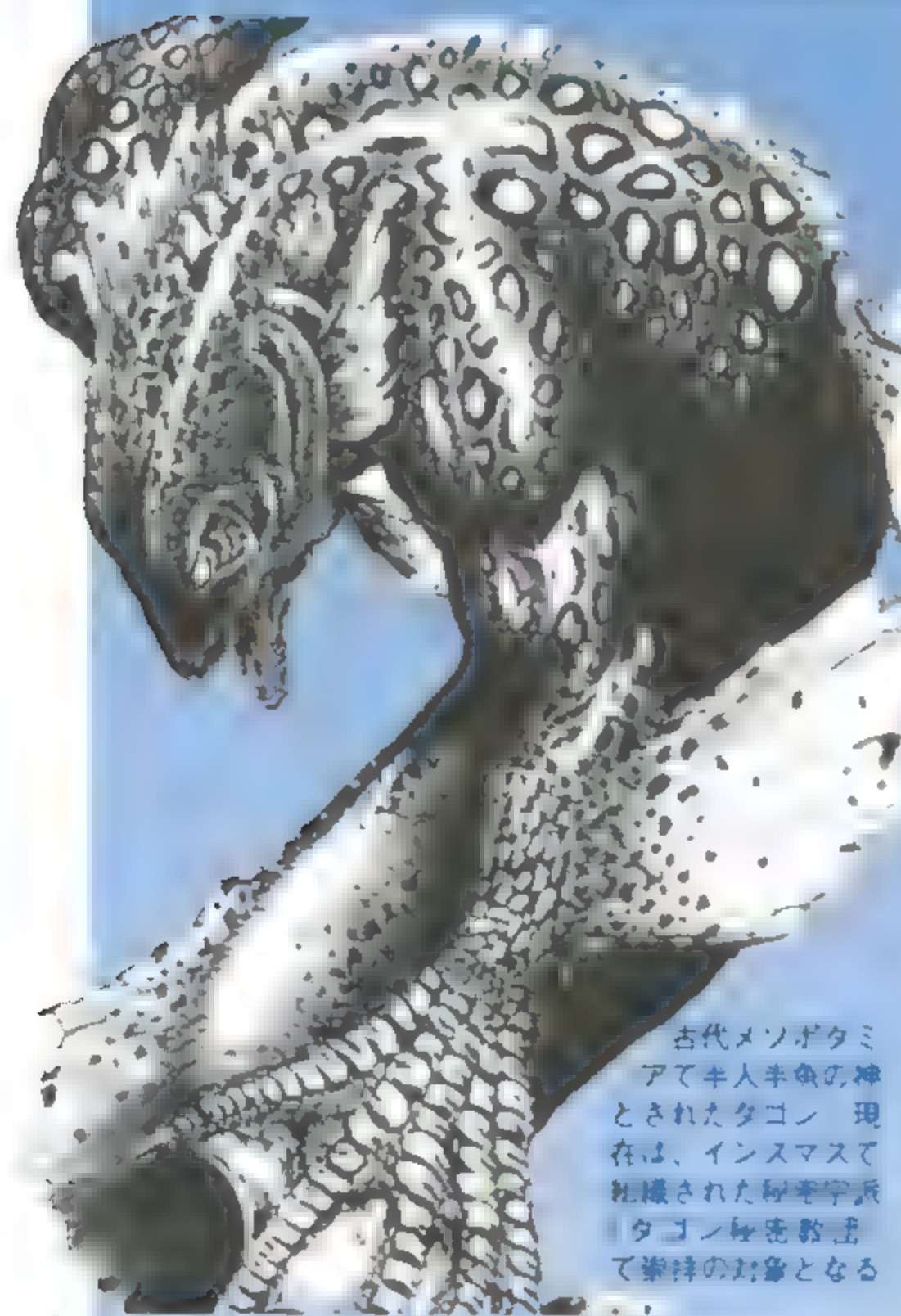
●〈深きものども〉

ムー大陸の沈没とともに、海底に封じられたクトゥルーは死すがごとき眠りについたが、そのルルイエの都に仕えるのが、人と魚の中間に位置する水棲種族〈深きものども〉である。

彼らは太平洋岸の各地で人類と接触し、クトゥルー信仰を広めたが、やがて排斥され、海底へ去っていった。ポナペ島など太平洋の島々の一部では、彼らと原住民の混血が行われており、この風習がインスマスにも流れこんだ。

〈深きものども〉は、寿命による死を持たず、年月の経過とともに成長を続けるといわれる。そのため、〈深きものども〉との混血で生まれた人間は、最初、人間のように育つが、老衰で死ぬことはなく、年を経るごとに魚めいた姿へと変身し、水中での活動に適応していく。

変化の速度は血の濃さや水中生活の頻度によって変わるが、〈深きものども〉との接触や、「ダゴン秘密教団」などのクトゥルー信仰の儀式によって加速される。やがて、彼らは海に帰り、ルルイエ、あるいはイハ＝ントレイなどの海底都市で暮らすという。

〈深きものども〉。頭部は魚に似て、ふくれあがった大きな目と蛙のような口があり、首の両側にはエラ、長い四肢の先には水かきを持つ

古代メソポタミアで半人半魚の神とされたダゴン。現在は、インスマスで組織された秘密宗派〈ダゴン秘密教団〉で崇拝の対象となる

●ダゴンとヒュドラ

〈深きものども〉を導く存在として「父なるダゴン」と「母なるヒュドラ」がいる。彼らはもはや地上に現れることはないが、不幸にもルルイエに近づいた者たちによって目撃されている。また、ダゴンはかつて古代メソポタミアのシュメールにおいて、神として信仰されており、のちにフェニキア人にも「オアンネス」の異称で崇拝された。

ラヴクラフトは彼の実質的なデビュー作『ダゴン』において、のちの『クトゥルーの呼び声』に通じる物語を綴っている。

●クトーニアン

〈地をうがつもの〉とも呼ばれる、地底に棲息する種族で、その実体は体長数十メートルにも達するイカ状の生物といわれる。彼らは大地の底をうがちながら、ゴムのような肉体を有する魔物、シャッド＝メルを中心にして独自の文明を築き、邪神クトゥルーを崇拝している。

本来、クトーニアンの棲息地は地殻の奥深く、マントルに近いあたりだが、1000年に一度、産卵のために比較的地温の低い地表近くに這いあがってくる。彼らはかつてアフリカ中部にある廃都グ＝ハーンに封印されていたが、現在は人知れず世界各地の地下に侵出しているという。

英国陸軍情報部で暗号解読の達人とされた数秘術の使い手、タイタス・クロウの報告によれば、彼らはその強力なテレパシーで何度も人類の歴史に干渉してきた形跡がある。

海底深く封じられ復活の時を待つ邪神

……サーストンももはやこの世にない。

ラヴクラフトの『狂気の山脈にて』において、太古の知的生物〈古のもの〉が残したとされる記録を見る限り、クトゥルーは「一族」で地球に飛来した。彼らは、オカルティストたちがムー大陸と呼ぶ、太平洋にあった古代大陸に棲みつき、超古代の地球を支配していたが、なんらかの理由で大陸はクトゥルーとともに海底に沈んだ。

〈旧神〉に封印されたとも、星辰の移動にともなって力を失ったとも、〈古のもの〉や〈ユゴス星の菌類生物〉との戦争に敗れたともいわれるが、真実ははっきりしていない。

しかし、クトゥルーは死んではいないと見られている。海底に封じられた石造都市ルルイエの神殿にあって、今も復活の時を待っているというのだ。

万物の王である盲目にし

アザトース
Azathoth

登場する主な作品
未知なるカダスを夢に求めて／闇をさまようもの／魔女の家の夢／ヒュドラ／妖虫／アザトホース／ネクロノミコン　アルハザードの放浪

『ネクロノミコン』などに代表される、隠秘学の中でも禁じられたある種の書物において、〈旧支配者〉の中でもっとも格が高いのは、時空の中心に存在する「盲目にして痴愚の神」

時空を超越した究極の混沌の中心に座し、すべての時間と空間を支配するというアザトース

外宇宙への〈門の鍵にして守護者〉

ヨグ＝ソトース
Yog-Sothoth

登場する主な作品
ダニッチの怪／暗黒の儀式／丘の夜鷹／銀の鍵の門を越えて／ネクロノミコン　アルハザードの放浪

ラヴクラフトの『ダニッチの怪』によれば、『ネクロノミコン』にはこう記されているという
「ヨグ＝ソトホースは門を知れり　ヨグ＝ソトホース門なればなり」（『ラヴクラフト全集5』大瀧啓裕訳　創元推理文庫より）

ヨグ＝ソトース、あるいはヨグ＝ソトホースと呼ばれる邪神は、かつて地上に飛来したものの外宇宙に封じられた「外なる神」の一柱（おそらくは単数形）だ。それの人格を語ろうとするのは無意味といえよう。ヨグ＝ソトースは、まさに外宇宙の力であり、同時に、高次元世界へ通じる「門」そのものだからである。

地球とヨグ＝ソトースの間は次元の壁に隔てられているが、次元の壁を乗り越え、その力の一部を地上に顕現させることが魔術的に可能とされている。今、われわれは科学的な合理性で世界を理解しようとしているが、そうした卑小な尺度ではヨグ＝ソトースを理解することはできないだろう。

ヨグ＝ソトースの力の一端を、冒頭にもあげた『ダニッチの怪』の中にうかがうことができる。20世紀初頭、山間の過疎村ダニッチにおいて、ある老魔術師が西欧魔術と先住民の聖地の力を融合させ、ヨグ＝ソトースとの接触に成功した。その結果、この世ならぬおぞましい邪神の申し

ウィップアーウィル
ヨグ＝ソトースに関する怪事件で、しばしば言及される夜鷹の一種。アーカム北方の丘陵地帯に群棲し、夜に群れて飛ぶ怪しき夜鷹の泣き叫ぶ声は、忌まわしき事件の前兆であるという。

〈門の鍵にして守護者〉であるヨグ＝ソトース。その姿は、原初の粘液として泡立つ、虹色の球体の集積物だといわれる。

アザトースであると伝えている。
アザトースはアザトホースとも呼ばれ、時空を超越した究極の混沌の中心にいるという。そこでは、心を持たぬ異形の楽人が踊りつつ、下劣な太鼓を叩き、かぼそく単調なフルートを奏でている。そんなおぞましい音曲がひびく外宇宙の深奥にいる魔王なのだ。
アザトースが人類を認識しているかというとはなはだ疑問であるが、その使者たるナイアルラトホテップが、千もの異形とともに、地球に干渉していることは明らかだ。

アザトースに関しては、わかっていないことが多い。ラヴクラフトは、「アザトースこそ混沌と狂気によって世界を支配するもの」と指摘するが、オーガスト・ダーレスは「アザトースは〈旧神〉と呼ばれる理性の神に敗れて叡智を封じられた〈外なる神〉の主神であり、ナイアルラトホテップはその復活を目指している」としている。
また、中には「この世界自体がアザトースの見る夢に過ぎない」とまで言いきる人々もいるが、そのいずれが実体かは誰にもわからない。

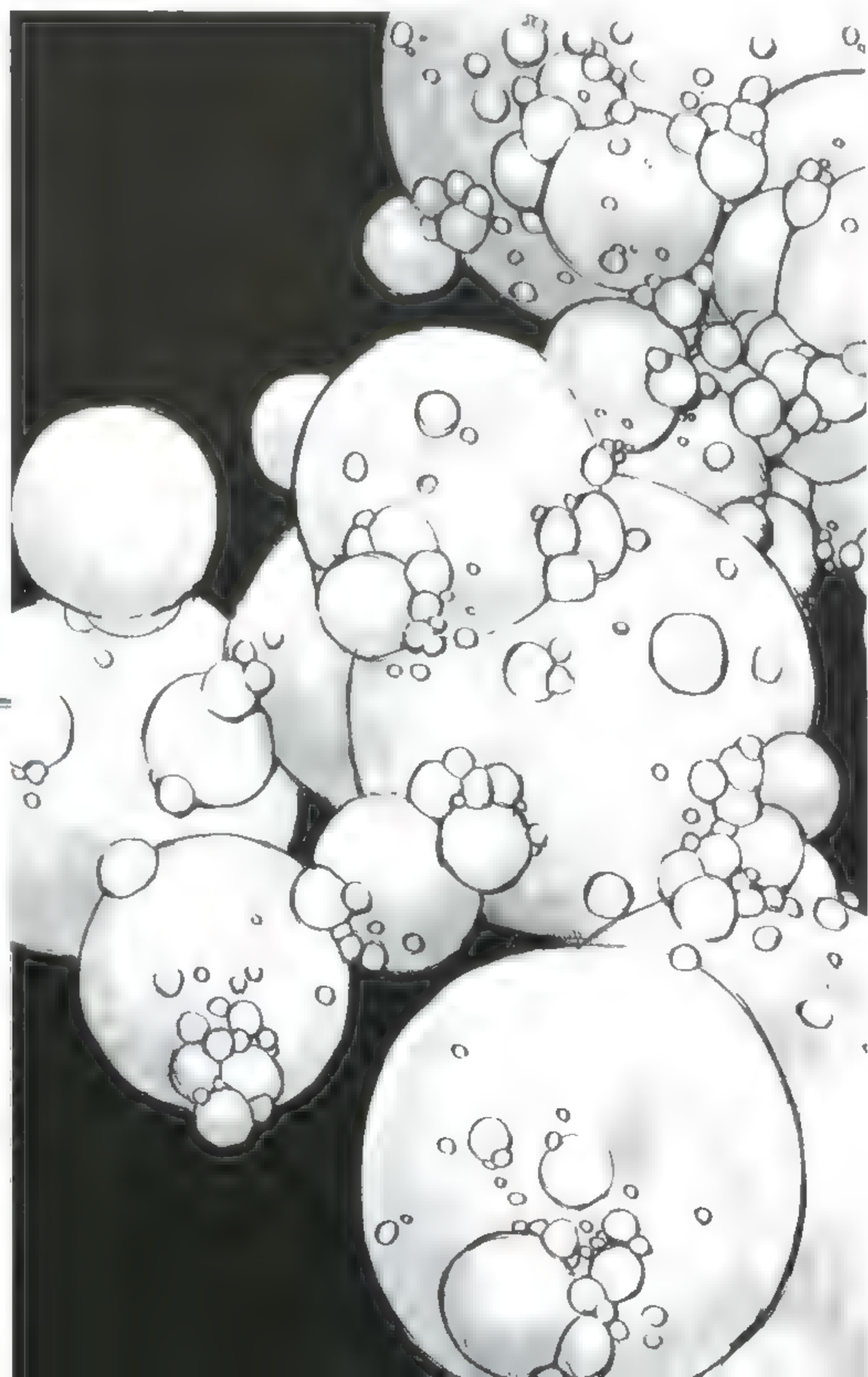
フォマルハウト星に棲まう炎の邪神

クトゥグア

Cthugha

生ける炎の精、クトゥグア。ナイアルラトホテップと激しく対立する存在といわれる。

登場する主な作品
闇に棲みつくもの

クトゥグアは、地球から27光年離れたフォマルハウト星に棲む火の邪神である。アザトースの使者、ナイアルラトホテップと敵対する存在として知られている〈クトゥグアの配下〉と呼ばれる無数の火の玉を従え、生ける炎となって出現する。
ダーレスの『闇に棲みつくもの』では、ナイアルラトホテップの地上における休息所のひとつである〈ンガイの森〉を焼き払ったとされる。

子が産み落とされたのだ。結果的に、その子どもは恐るべき父親から授かった力を発動する前に、人間の手によって滅ぼされている。
現在、ダニッチは廃村になったと伝えられるが、リチャード・A・リュポフの『ダニッチの破滅』によれば、同地域はいまだヨグ＝ソトースの影響下にあり、米軍によって厳重に管理されているという。
なお、ヨグ＝ソトースは超次元の存在であるため、通常の人間の五感では感知できないとされる。
『ネクロノミコン』は語る。「汝は悪臭放つものとして〈旧支配者〉を知るばかりなり」と

暗黒星に潜む〈名状しがたきもの〉

ハスター
Hastur

登場する主な作品
カルコサの住民／羊飼いのハイータ／闇に囁くもの／ハスターの帰還／永劫の探究／イタカ

〈名状しがたきもの〉ハスター、または〈星間宇宙を歩むもの〉ハストゥールと呼ばれるもっとも謎多き神性である

その名前は、クトゥルー神話についてもっとも定評ある報告者ラヴクラフトではなく、19世紀の幻想作家であり、謎めいた失踪を遂げたアンブローズ・ビアスの残した詩篇めいた短編『カルコサの住民』と『羊使いのハイータ』で触れられたのが最初である。

ハスターは、その中では「ハリ湖に住まう神霊」「羊飼いの神」などと暗示されているに過ぎなかったが、いつしか、おうし座に位置するヒヤデス星団のアルデバランに近い暗黒星の〈黒きハリ湖〉に封印されており、人類の魔術的な声に答えて、ヒヤデス星団から地球に介入する存在といわれるようになった

ハスターに従属するものとしては、星間を飛翔するバイアクヘーの存在が知られている。アルデバランが夜空にあるとき、石のオカリナを吹き、黄金の蜂蜜酒を飲んで、ある呪文を唱えるとバイアクヘーが飛来し、力を貸してくれるとされている

ダーレスの『永劫の探究』には、ハスターと外宇宙の神々について詳しいラバン・シュリュズベリイ博士とその助手によってこの方法が実践されたとある

また、妖術師の中には、クトゥルーの眷属や「外なる神の使者」ナイアルラトホテップに対抗するため、ハスターの力を借りる者もおり、しばしば「イア、イア、ハスター」という祈りが唱えられた

ただし、ハスターとの契約は非常に危険なものであり、愚かにもクトゥルーと対抗すべく、この力を利用したエイモス・タトルは恐怖の晩年を迎え、死後、おぞましき姿に変容している　また、エイモスの館は何者かによって完全に爆破され、遺産相続人ポールは失踪した

クトゥルー神話を四大元素説で解釈するダーレス流の考え方では、ハスターは風の属性に分類されており、ハスターに従う者は風の魔力を得るともいわれる

ヒヤデス星団のアルデバランに近い暗黒星に棲むとされるハスター。謎の多い神格である。

黄衣の王

19世紀末から20世紀初頭に活躍した作家ロバート・ウィリアム・チェンバースの短編「黄の印」に登場する、読むだけで狂い、破滅するとされる書物。魔道書『ネクロノミコン』のモデルとされる一方、その中にハスターやハリ湖の名前が見られることから、クトゥルー神話の一環であるとされる

また、後代に至っては、ハスターの化身を「黄衣の王」と呼び、ラマ僧のような姿を当てるようになった。

星間宇宙を飛翔する
有翼の怪生物

バイアクヘー
Byakhee

登場する主な作品
永劫の探究

〈名状しがたきもの〉ハスターに仕える奇怪な生物で、ビヤーキーとも呼ばれる。蝙蝠に似た奇怪な翼を広げ、星間宇宙を飛翔する怪物で、テーブルトーク・ロールプレイングゲーム（以下TRPG）の『クトゥルフ神話TRPG』では、「その外見はカラス、モグラ、ハゲタカ、アリ、腐乱死体のいずれかであるような、いずれにも似ていないような奇怪な姿」として描写される。

バイアクヘーは人間を連れて宇宙を飛ぶことができるが、生きたまま星間宇宙を突破するためには、黄金の蜂蜜酒の儀式を行わなくてはならない。

星間宇宙を飛翔するバイアクヘー。方法を知っていれば、人間でも使役が可能だという。

〈大いなる白き沈黙の神〉とも称されるイタカ。巨人の輪郭に似た雲と、緑色に燃える目のように輝く星を持つ姿に見えるという

空の高みに潜む
恐るべき風の精

イタカ
Ithaqua

登場する主な作品
風に乗りて歩むもの／戸口の彼方へ／イタカ

〈風を歩むもの〉イタカは、北米先住民にはウエンディゴと呼ばれ、畏怖される存在である。大気圏の高層に棲み、信徒から捧げられた生け贄を高空に連れ去って、長い間引きずり回したあげく、地上に投げ捨てるといわれる。

カナダのスティルウォーターという辺境の村で信仰されていたが、儀式の生け贄が逃げだしたことから、村は滅ぼされ、逃げた生け贄は半ば凍りついた姿で発見された。イタカの存在を証明するような出来事であったという。

風に関わりがあることから、しばしばハスターの眷属ともいわれるが、その関係は不明

顔のないスフィンクスやさまざまな人間の姿で現れるナイアルラトホテップ。触腕やかぎ爪が自在に伸縮する肉塊と、咆哮する顔のない円錐形の頭部という姿でも目撃されている。

千の異形をもつ〈無貌の神〉

ナイアルラトホテップ

Nyarlathotep

登場する主な作品

ナイアルラトホテップ／壁のなかの鼠／尖塔の影／アーカム計画／魔女の家の夢／無貌の神／暗黒のファラオの神殿／闇に棲みつくもの／蠢く密林／闇をさまようもの／未知なるカダスを夢に求めて／ネクロノミコン　アルハザードの放浪

ナイアルラトホテップは古代エジプトで信奉され、本来、ギザの大スフィンクスはその真の姿をかたどって造られていたという。

アザトースの使者にして特異な神性を持つ存在

ナイアーラトテップ、ニャルラトホテプともいう。万物の王アザトースの強壮なる使者、ナイアルラトホテップは〈無貌の神〉と呼ばれるが、顔を持たぬがゆえに、千の異形を持つ千変万化の神性である。

ナイアルラトホテップの名前は、特徴ある語尾の示すとおり、もともとはエジプトで信仰されていた際の名前だ。千の異形については、それぞれに相応しい名前で呼ばれているが、煩雑であるため、以下ナイアルラトホテップとして説明する。

古代エジプトにおいて、異端の女王ニトクリスや狂気の王ネフレン＝カなどによって信仰されたというが、その記録は年代記から抹消されている。また、沙漠のどこかで無貌のスフィンクスの像が発見されたこともあるが、これは歴史から抹消された王の印と見られている。

エジプト神話に登場するセトやトート、そしてアステカの神テスカトリポカは、古代にナイアルラトホテップと遭遇した人々が生みだした神ではないかとされる。

エジプトの知恵の神トート（左）とアステカの神テスカトリポカ（右）。いずれもナイアルラトホテップがモデルではないかという説がある。

＊　＊　＊

●幻夢郷の暗躍者

ナイアルラトホテップの重要な特徴は、彼がクトゥルー神話の神々の中でほぼ唯一、人間に変身し、人間社会に干渉することである。

ラヴクラフトはその姿を夢に見たという。夢の中で、ナイアルラトホテップはエジプトからやってきた謎めいた予言者として現れ、不可思議な発明や科学技術の実演によって人人を魅了し、気づくと世界はナイアルラトホテップの支配に下っているのである。

ゆえに、ラヴクラフトにとってのナイアルラトホテップは夢の世界の住人である。生前には発表されることのなかった長編冒険ファンタジー『未知なるカダスを夢に求めて』では、ランドルフ・カーターを幻夢郷で待ち受けるファラオのごとき絢爛たる姿で、ナイアルラトホテップを出現させた。かの有名なセリフがここで発せられる。

「二度とふたたび千なる異形のわれと出会わぬことを宇宙に祈るがよい。われこそは這い寄る混沌、ナイアルラトホテップなれば」（『ラヴクラフト全集6』大瀧啓裕訳 創元推理文庫より）

＊　＊　＊

●這い寄る混沌

先のセリフのとおり、ナイアルラトホテップの姿は多種多様である。ナイアルラトホテップを夢の神としたラヴクラフトでさえ、他の短編においては、魔女を導く古代の邪神のような姿で描いたことがある。

ロバート・ブロックは、エジプトに残るナイアルラトホテップの姿を〈無貌の神〉として描く一方、アザトースの使者であり、邪神復活の策謀を導く暗躍者、陰謀家として、ナイアルラトホテップが化身した人々を登場させている。

ブロック自身のクトゥルー神話の総決算というべき『アーカム計画』では、科学者や神父、ときには邪神と戦うべき政府側の人物さえもナイアルラトホテップの手中に落ちていく。

＊　＊　＊

●闇に吠えるもの

ラヴクラフトは、『闇をさまようもの』の中で、さらに異様なナイアルラトホテップを描いている。

七角形の奇妙な箱に収められた〈輝くトラペゾヘドロン〉によって召喚されるナイアルラトホテップは、真の闇の中だけに存在し、3つの輝く目と大いなる翼を持つという、なんとも異様な姿なのである。

ダーレスによれば、ナイアルラトホテップはウィスコンシン州の〈ンガイの森〉や中央アフリカの密林など、世界各地に密かな領地を持ち、そこでは「闇に吠えるもの」という、三本足で顔のない円錐形の頭部を持つ異形の姿を現すという。『闇に棲みつくもの』には、〈ンガイの森〉を調査し、奇怪な音声記録を残してある教授が失踪した直後、森が謎の火災で焼失したことが書かれている。

眠たげな目に舌先の出た口、ずんぐりした体を持つツァトゥグアは、どことなく愚鈍でユーモラスなイメージを感じさせる

秘密の洞窟に
永劫の歳月を送る神

ツァトゥグア
Tsathoggua

登場する主な作品
サタムプラ・ゼイロスの物語／七つの呪い／魔道士エイボン／墳丘の怪／暗黒の儀式／ネクロノミコン　アルハザードの放浪

ツァトゥグアは、地球が誕生して間もない超古代に、サイクラノーシュ（土星）から飛来した神性で、柔毛に包まれたヒキガエルや羽根のない蝙蝠、ナマケモノを連想させる姿をしている。

氷河期以前に存在したヒューペルボリア大陸。その西部を横断するヴーアミタドレス山の地底にある秘密の洞窟に棲むと伝えられる。怠惰な性格の神で、古代ヒューペルボリアや地底の暗黒世界ンカイで信仰されていたが、現在はンカイにおいても、地の底に隠れ棲む粘液の塊のような不定形の存在だけが信仰しているという。

ヒューペルボリアの高名な魔道士エイボンは、イホウンデーの神官に追われた際、ツァトゥグアの力を借りて木星に逃れ、ツァトゥグアの父方の叔父である神性、フジウルクォイグムンズハーの保護を受ける。眠たそうな表情の頭が球状の体からさかしまにぶらさがっている以外は、ツァトゥグアに似ているようだ。

地母神的な神性のシュブ＝ニグラス比較的人間に好意的な神と考えられている

各地に残る太母信仰の源流的存在

シュブ＝ニグラス
Shub-Niggurath

登場する主な作品
永劫より／墳丘の怪／呪術師の指環／ネクロノミコン　アルハザードの放浪

〈千匹の仔を孕みし森の黒山羊〉と呼ばれ、豊饒と出産を司る、大地母神的な性格を持つ神性。おもにムー大陸や地底世界クン＝ヤンで崇拝され、その信仰は世界各地に広がっている。おそらく、世界各地に残る太母信仰の多くはシュブ＝ニグラスにさかのぼるとされる。

シュブ＝ニグラスもまた「外なる神」であるといわれており、彼女がハスターのつれあいであるとも、ヨグ＝ソトースとの間に子をなすとも伝えられているが、彼女自身の姿の描写すら情報に乏しいほどで、真相は明らかではない。

一方、彼女の落とし子である〈シュブ＝ニグラスの黒い仔山羊〉は、蹄のある脚と触手の生えた頭部、常に涎をたらす口を持つ巨大な怪物である。森の奥で行われる生け贄の儀式によって召喚されるといわれる。

北米原住民に崇拝される〈蛇の父〉

イグ
Yig

半人半蛇の姿といわれるイグ。米国中西部だけでなく、ムー大陸やクン＝ヤンでも崇拝の対象となっていた

登場する主な作品
イグの呪い／墳丘の怪／永劫より／闇に囁くもの／奇形／ネクロノミコン　アルハザードの放浪

米国中西部の平原地帯で信仰されるイグは〈蛇の父〉と呼ばれる古代の蛇神だ。その信仰は遥かムー大陸の時代にさかのぼるといわれる。蛇人間、または龍のような姿をしており、世界各地の蛇神信仰はイグがモデルだと考えられる。

イグはその眷属である蛇を害する者を蛇に変え、おぞましい死を与える。普段はおとなしい神性で、蛇に敬意をもって接する限り、危害をもたらすことはないが、自身の子どもたちが冬眠に備えて飢える秋になると凶暴化する。

イグを信仰する北米先住民たちは、秋になると独特の太鼓を叩きつづけ、イグの怒りを和らげようとするが、開拓者はその信仰を理解することがない。

ある種の人々は、イグもまた地球の創世期に飛来した「外なる神」の一柱で、爬虫類や昆虫の誕生に力を貸したと主張するが、確認はされていない。

地球誕生とほぼ時を同じくして存在しているウボ＝サスラ。知性も決まった形も持たず、生命の原型である単細胞生物を生みだしている。

生命の輪廻の果てに横たわる神

ウボ＝サスラ
Ubbo-Sathla

登場する主な作品
ウボ＝サスラ

誕生から間もない地球の蒸気を発する沼に横たわり、手も足も頭も臓器もない原形質の無定形の姿から、生命の起源となった単細胞生物を生みだした神性。地球の生命体の原点であり、地球の生命は遥かなる輪廻の果てに、ウボ＝サスラのもとに回帰するといわれている。

ウボ＝サスラに関する仮説は多数あり、ウボ＝サスラがすべての〈旧支配者〉の生みの親であるとも、実はアザトースに等しい根源的な存在であったが、〈旧神〉に反逆したために知性を奪われ、原初の混沌に堕したとも伝えられる。C・A・スミスの謎めいた同名の掌編にその姿が描かれている。

ウボ＝サスラの周囲には禁断の叡智を記した謎の石板があるというが、それを解読できるほどウボ＝サスラに接近できたものはいまだ現れていない。

すべての不浄の父母たる塊

アブホース
Abhoth

登場する主な作品
七つの呪い

〈宇宙の不浄すべての母にして父〉と称される原形質状の奇怪な神性。
　古代ヒューペルボリア時代の魔峰ヴーアミタドレス山の地底に広がる地下世界の最深部、粘液質の入り江に横たわり、おぞましい細胞分裂を果てしなく繰り返して、ありとあらゆる解剖学的な可能性を秘めた落とし子を生みだしている。多くの子はそのままアブホースにむさぼり喰われるが、時折、生き延びたものが地上に這いだすという。
　アブホースは信仰もされぬ異形の存在であるが、かつて、ヒューペルボリアの貴族ラリバール・ヴーズが、妖術師らにかけられた〈七つの呪い〉の果てに、アブホースの面前に立ったとされる。

地下世界の最深部で、いとわしい分裂を永久に繰り返す灰色の塊、アブホース

グロテスクな風貌のラーン＝テゴス　北極の廃墟と化した石像都市で、巨大な象牙の王座に座した状態で発見されたという

ラーン＝テゴス
Rhan-Tegoth

登場する主な作品
博物館の恐怖

　およそ300万年前、人類誕生以前の北極に外宇宙（ユゴス星か？）から飛来し、北極のすでに滅びた文明で信仰された神性。球形の胴体に蟹のようなハサミのついた6本の長い手足、三角形に配置された魚のような目と長い鼻を持つ。全身にチューブ状の吸水管が密生しており、これで生け贄の血を吸い尽くす。
　20世紀初頭、探検家の手によって発見された休眠中のラーン＝テゴスは、アレウト族の神像としてオンタリオ博物館に収められたが、やがて行方がわからなくなっている。一説には、ある造形作家のアトリエで目撃されたという。

血の臭いで甦る邪悪な吸血神

チャウグナル・ファウグン
Chaugnar Faugn

登場する主な作品
恐怖の山／墳墓の王

　象に似た姿の吸血神。蝙蝠のような形で、先に触手がついた耳を持つ。鼻の先端は円盤状に広がり、ここから生け贄の血をすするという。
　中央アジアのツァン高原で、トゥチョ＝トゥチョ人によって信仰されていたが、メトロポリタン美術館の調査員が誤って接触し、美術館に仏像として収められた。多くの被害者を出したのちに、ある新兵器によっ

高さおよそ8フィート、樽状の胴体にヒトデを思わせる五芒星形の頭部を持つ〈古のもの〉 その外見とは裏腹に高い知能を持ち、高度な文明を築いていた

太古の地球を支配した異形の生物

〈古のもの〉 Old Ones

登場する主な作品
狂気の山脈にて／狂気の地底回廊

まだ地球が若いころに外宇宙から飛来した種族のひとつで、南極の〈狂気山脈〉に広がる古代都市の遺跡で確認されている。五角形の樽のような胴体に奇怪な触手や目、膜状の翼を持つおぞましい外見で、植物と動物双方の要素を有するという。本来は水中を好むが、外宇宙や陸上でも生活できる。

高度な知能を持ち、労役用に可変形態を持つ生命体ショゴスや、愛玩用であり、食用でもある人類の祖先を造りだした。

古代地球で覇を唱えた彼らは、クトゥルー族など、外宇宙から飛来した他の種族との抗争を繰り返した。やがて自ら造ったショゴスが反乱を起こし、大戦争の末にこれを鎮圧したが、種族としては衰退し、いまや半ば冬眠状態で生き長らえているにすぎない。

ラヴクラフトなどは、彼らを〈旧支配者〉の一部と見なす一方で、他の邪神に比べれば、よほど人間的だと描写している。

て滅ぼされたという。

これを運びこんだ調査員の証言によれば、チャウグナル・ファウグンとその兄弟たちはピレネー山中に棲んでいたが、生け贄を求めることからローマ帝国と戦いになった。そこで、チャウグナル・ファウグンはアジアへ移り、時を待つことにしたと伝えられる。

象のような姿形のチャウグナル・ファウグン ふだんは石化しているが、血の臭いをかぎつけると動きだす。

使役奴隷として誕生した原形質生物

ショゴス Shoggoth

登場する主な作品
狂気の山脈にて／無人の家で発見された手記／戸口にあらわれたもの／インスマスを覆う影／狂気の地底回廊／地を穿つ魔／ネクロノミコン アルハザードの放浪

泡立つ粘着性の原形質生物ショゴス あらゆるものを喰らい、その本質をも自身に取り込む能力を持つといわれる

〈古のもの〉が都市の建造に使役するために、無機質から合成した不定形の生物。無限の可塑性と延性を持ち、支配者からの催眠暗示の命令を受けて、必要に応じて発声することもできる。

直径約15フィートの原形質の塊で、力は非常に強く、建造作業にも向いていた。ショゴス生成の際、〈古のもの〉はウボ＝サスラの肉体の一部を流用したとも見られている。

やがて、知性を発達させたショゴスは創造主に反抗し、これが「ショゴス大戦」と呼ばれる〈古のもの〉衰退の原因となる。結局ショゴスは敗れて再度支配されたが、〈古のもの〉も急速に衰え、南極の都市に隠棲することとなった。

本来、ショゴスは南極にしかいないとされるが、一部の妖術師やカルト崇拝者はこれを召喚し、使役したとされる。

時間の秘密を極めた精神生命体

〈大いなる種族〉
Great Race

登場する主な作品
時間からの影／異次元の影／
ネクロノミコン　アルハザードの放浪

〈大いなる種族〉は、時空を超えて精神の交換を行う技術を持つ精神生命体で、生存のために時を超え、安全な未来の探索を続けている。

彼らは超古代の地球に棲息していた円錐形の〈先住種族〉を精神的に侵略し、地球を支配したが、〈飛行するポリプ〉との戦いに敗れ、滅び去ったとされる。彼らはその滅びを回避するべく、さらに時空を超えて、現在の人類文明に対しても精神交換の試みを行ったという。彼らの精神交換は人類史に多くの痕跡を残している。

最終的に、彼らは5000万年後の甲虫種族の精神に移住し、新たな文明を築くことになる。

もともとは精神生命体の〈大いなる種族〉は、太古の地球に棲息していた巨大な円錐体生物と精神交換を行い、地球の支配者となった

暗黒星ユゴスを本拠地とし、地球にも飛来してきた〈ユゴス星の菌類生物〉。種族によってさまざまな形態があるという

無限宇宙の彼方より飛来した知的生物

〈ユゴス星の菌類生物〉
Fungus-beings of Yuggoth

登場する主な作品
闇に囁くもの／狂気の山脈にて／
銀の鍵の門を越えて／暗黒星の陥穽／
ネクロノミコン　アルハザードの放浪

宇宙を旅して鉱物資源を採掘する生物。太陽系ではユゴス星（冥王星？）に拠点を持ち、地球を訪れているピンク色をした、一見巨大な昆虫か甲殻類のようだが、その実体は一種の菌類で、渦巻状の頭部の色を変えて、互いの意思疎通を行う

知能が非常に発達しており、人間の脳を筒状の金属容器に入れて生かしつづけたり、残された人体の頭部を生存時と同様に保存し、機械を使って会話させることができる技術を持つ。

形態は種族によってさまざまで、自らいろいろな形態に偽装することもできる。ヒマラヤ山中で目撃される、白色の柔毛に覆われた類人猿のような雪男ミ＝ゴウは、この〈ユゴス星の菌類生物〉の一形態と考えられている

食屍鬼（しょくしき）

屍食鬼、グールとも呼ばれる。地下のどこかで発生した種族。食屍鬼は人の肉を好物とする半ば犬、半ば人のような存在で、ゴムのような肌を持ち、前かがみで跳ねるように歩く。日光を嫌い、地下に棲息して屍肉を食う。かつては墓地や洞窟に隠れ棲んでいたが、地下鉄の誕生以来、人の手で拡大された地下世界に移り棲み、地下鉄事故の遺体を喰らったりしているという。そのおぞましい姿は、20世紀初頭に失踪した謎の画家リチャード・アプトン・ピックマンが残したわずかな作品で見ることができる

食屍鬼は地球のみでなく、別世界の〈夢の国〉にも棲息している。

シャッガイの昆虫族

巨大な眼球と3つの口、10本の足、半円形の羽を持つ昆虫型の知的生物。鳩ほどの大きさで、人間の脳に寄生することができる。故郷のシャッガイ星が滅亡したため、宇宙を漂泊し、ルギバクズ（天王星）に定着した。のちに、一部は宗教的対立によって英国ゴーツウッド近くの森に移住している。

非常に退廃的な存在で、奴隷化した生物を拷問することを好む。

第３章

禁断の扉を開く忌まわしきアイテム

Chapter 3

The Arcane Items for the Forbidden Doors

われわれの目に触れないところに、
恐るべき邪神と忌まわしい太古の歴史が
書かれた数々の魔道書と、
禍々しき異形のアイテムたちが存在する。
そこに隠された闇の力の正体とは——？

ネクロノミコン
Necronomicon

アラブの狂詩人アブドゥル・アルハザードによって産み落とされた暗黒の魔道書『ネクロノミコン』。非常に限られた数しか現存しないとされる。

読む者すべてを狂気に陥れる禁断の書

『ネクロノミコン』は原題を『アル・アジフ』といい、西暦730年ごろ、アラブ人のアブドゥル・アルハザードの手によって書かれた魔道書である。その名が語られるときには必ずといってよいほど、「禁断の」「呪われた」「忌むべき」「不埒な」などといった形容がなされ、閲覧する者を絶望的な狂気と恐怖のただ中に突き落とすといわれている。

その存在を最初に明らかにしたのがラヴクラフトであった。彼が1922年に書いた短編『魔犬』の中に、その名が初めて登場したのである。『魔犬』の主人公は、友人とともに古い墓を暴いて奇妙な形の魔除けを発見する。抗いがたい誘惑に駆られて魔除けを盗みだし、その性質と死者の霊魂が象徴するものを調べようと『ネクロノミコン』を読みふけるのだが、やがて恐ろしい最期を遂げる――。

ところで、『ネクロノミコン』はほとんどの国の政府当局、あらゆる教会によって、厳格に出版が禁止されており、その所在は非常に限られている。

公的機関に現存するとされるものは、15世紀にドイツで印刷されたラテン語版が大英博物館に、17世紀にスペインで印刷されたラテン語版がフランス国立図書館、ハーバード大学のワイドナー図書館、ミスカトニック大学付属図書館、ブエノスアイレス大学図書館などに所蔵されているという。

ほかに、個人のコレクターやオカルト研究家が所蔵するものもある。とあるアメリカの大富豪やセイレムのピックマン家、そしてダニッチの住人ウィルバー・ウェイトリーなどが所蔵していたという記録が残っているのだ。

登場する主な作品

魔犬／魔宴／クトゥルーの呼び声／『ネクロノミコン』の歴史／ダニッチの怪／銀の鍵の門を越えて／末裔／本／永劫の探究／魔道書ネクロノミコン／ネクロノミコン　アルハザードの放浪

『ネクロノミコン』関連事件年表

年	事件
西暦730年ごろ	『ネクロノミコン』のオリジナル版である『アル・アジフ』が、アラブ人のアブドゥル・アルハザードによってダマスクスで書かれる
950年	『アル・アジフ』がコンスタンチノープルのテオドールス・ピレータースによってギリシャ語に翻訳され、『ネクロノミコン』の題名が与えられる
1050年	コンスタンチノープルのミカエル総主教によって出版が禁止され、焚書処分にされる
1228年	オラウス・ヴォルミウスがギリシャ語版をラテン語に翻訳する。このころにはもう原本のアラビア語版は1冊も残っていなかったとされる
1232年	教皇グレゴリウス9世によって、ラテン語版およびギリシャ語版が「禁書」に指定される
14**年	ラテン語版『ネクロノミコン』のゴシック体の印刷本がドイツで出版される
1500～1550年	ギリシャ語版がイタリアで印刷される
1586年	『ネクロノミコン』がジョン・ディー博士によって英訳される
16**年	ラテン語版からスペイン語に翻訳される またラテン語版がスペインで印刷される
1922年	ラヴクラフトが『魔犬』の中で『ネクロノミコン』について言及
1946年	ニューヨークの古書籍商ダスクネスの目録に『ネクロノミコン』が記載される
1973年	アウルズウィック・プレスより『アル・アジフ：ネクロノミコン』が出版される
1977年	サイモンの『ネクロノミコン』が出版される
1978年	ジョージ・ヘイ編集により『魔道書ネクロノミコン』が出版される
2004年	ドナルド・タイスンの『ネクロノミコン アルハザードの放浪』が出版される

ウィルバーが所蔵していたのは、一般には魔術師として知られ、エリザベス女王の主治医でもあったジョン・ディー博士が英訳したもので、その内容は不完全なものであったらしい。ウィルバーはそれを補うためにミスカトニック大学におもむき、同大学に保管されていたラテン語版を参照する必要があったとみられている。

暗黒の魔道書には何が書かれていたのか？

『ネクロノミコン』の忌むべき内容については、実は断片的にしか知られていない。〈旧支配者〉、とりわけクトゥルーを暗示するとされる有名な一連句「そは永久に横たわる死者にあらねど……」や、ウィルバーがミスカトニック大学の図書館で書き写していた「〈旧支配者〉かつて存在し、いま存在し、将来も存在すればなり……」という一節、あるいは、〈旧支配者〉を崇拝する教団らによる描写などでうかがえる程度で、いずれも読む者を恐怖に陥れる冒瀆的な内容であるが、その全容は謎に包まれている。

数々の作品の中で、ラヴクラフトは『ネクロノミコン』の一部をほのめかしただけであったが、長い間、多くの者が現物やその内容を捜し求めていた。

1946年夏、ニューヨークの古書籍商ダッシネスが、店の販売目録に『ネクロノミコン』の名を掲載した。のちに、これはダッシネスの「間違い」だったことが明らかになるが、それは隠秘学者や世間のオカルト・マニアを驚かせ、大いに話題になったことからも、その注目度の高さがうかがえるだろう。

この謎めいた書について、ラヴクラフトがどこから情報を得たかに関してはさまざまな説が語られている。父ウィンフィールドがフリーメイソンであったこともあってか、20世紀最大の魔術師と呼び声の高いアレイスター・クロウリーの『法の書』との関連が指摘されたり、メソポタミア地域に伝わるシュメール神話との関連がささやかれることもあった。

また、実在する『サセックス草稿』〈悪の祭祀〉や『ヴォイニッチ写本』『エノクの書』などの中に『ネクロノミコン』が隠されていると指摘する者もいる。さらに、『ネクロノミコン』を「発見」して再現したという出版物も複数現れているが、その真偽はいまだにはっきりしない。

この本は何度もカトリック教会より焚書や発禁の対象になったという。そこに封じられた「禁断の知識」に触れた者には、おそましい末路のみが待ち受ける。

異界のものを召喚する本か？

ルルイエ異本

R'lyeh Text

登場する主な作品
破風の窓／ハスターの帰還／丘の夜鷹／地を穿つ魔

数多くの魔道書を読んでいたエイモス・タトルは、謎の中国人から『ルルイエ異本』を入手した。タトル自身はその後壮絶な死を遂げている。

著者や書かれた年代、言語などは不明。クトゥルー神話の魔道書を研究したリン・カーターによれば、人類誕生以前の言語であるルルイエ語で書かれているという。

ニューイングランドに住んでいたエイモス・タトルは、これをアジアの暗い内陸部から手に入れた。人間の皮で装丁されており、チベットの奥地から来た中国人に10万ドル（戦前の金額である！）を支払ったとみられている。

タトル以外にも本書を所蔵している例があり、ルルイエ語から現代人が解読可能なほかの言語に翻訳されている可能性もある。内容は明確にはわからないが、ハスター、クトゥルー、ナイアルラトホテップ、シュブ＝ニグラスに言及していることが確認されている。

本書をもとにして、ラバン・シュリュズベリイ博士が書いた論文『ルルイエ異本を基にした後期原始人の神話の型の研究』は、ミスカトニック大学付属図書館に保存されている。

水棲の魔物を喚ぶ伝説の書

水神クタアト

Cthaat Aquadingen

登場する主な作品
盗まれた眼／縛り首の木／狂気の地底回廊／地を穿つ魔

著者不明。クトゥルーなどの水棲精霊を召喚する呪文や祈祷文を集成した本。世界に3冊しか現存しておらず、そのひとつを隠秘学者タイタス・クロウが所有している。人間の皮で装丁されているが、その発汗機能は失われておらず、雨が近づくと汗をかくという。

大英博物館にも所蔵されているらしいが、博物館はそれを否定している。〈ナイハーゴの葬送歌〉や〈五芒星の印の創り方〉、ツァトゥグアの解説などが記載されている。

タイタス・クロウが所有する本の装丁には人皮が用いられているという。

海にまつわる魔道書

クトゥルーや〈深きものども〉をはじめとする、水棲の神話生物について述べたと思われる本は多い。とあるドイツ人の手によるもので、17世紀にすべて破棄されたとされる『深海祭祀書』（ウンテル・ツェー・クルテン）をはじめ、ガントレイ著『水棲動物』、ガストン・ル・フェ著『深淵に棲む者』、コンラート・ゲルナーが1898年前後に書いた『魚類大鑑』、イギリスのマッギルクリストの著書『ネッシーについての一考察：暴かれるネス湖の秘密』などがあげられる。

暗黒の内容に満ちた『エイボンの書』は、『ネクロノミコン』にすら出ていない禁断の知識が記されているという

超古代の恐るべき邪悪の知識

エイボンの書

Book of Eibon

登場する主な作品
ウボ＝サスラ／戸口にあらわれたもの／無貌の神

超古代大陸の大魔道士

氷河期以前に地球にあったとされるヒューペルボリア大陸の北の半島、ムー・トゥーランの魔道士エイボンによって書かれた魔道書『エイボンの書』は邪教徒の神ゾタクア（ツァトゥグア）と盟約を結び、その背徳の関係から魔術を身につけていた。ゾタクアと敵対関係にあった女神イホウンデーの神官たちは、エイボンを捕らえようと、エイボンの五角形の塔を襲うが、エイボンはすでに魔術的な金属で作られた扉から土星に逃れたあとだった

エイボンの失踪ののち、弟子がエイボンの書き残したさまざまな草稿を集め、それを1冊の本とした。これが『エイボンの書』である。『エイボンの書』にはエイボン自身の魔術的な実験、シャッガイやナスの谷への旅の話、同じくムー・トゥーランの魔道士ゾン・メザマレックやエヴァグらの業績、ウボ＝サスラなどの神性の解説が記されている

時を超え、現代に伝わる写本の数々

氷河期にヒューペルボリアが破壊されたのち、複数の写本がゾブナやロマールなどの超古代の地を経て、アトランティスから人類の地中海世界に伝わった。また、グリーンランドの氷河に覆われた地層から発掘された写本もある

ヒューペルボリアの言語からギリシア語に翻訳されたものもあるといわれるが、残念ながらこれは現存しない。現存するもっとも古い本はカイアス・フィリパス・フェイバーが9世紀にラテン語へ翻訳したものである。これをもとに17世紀にローマで印刷が行われたらしく、ミスカトニック大学にある『エイボンの書』のラテン語版はこれに由来する

1240年ごろ、中世フランスはアヴェロワーニュのガスパール・ドゥ・ノールがこの本をフランス語に翻訳した。この版は妖術師一族のヴァン・デル・ハイル邸や、プロヴィデンスの星の知慧派教会にあったとされる。また、英語に翻訳されたものもあるらしい。

人類誕生以前に書かれた
最古の魔道書

ナコト写本
Pnakotic Manuscripts

登場する主な作品
蕃神／博物館の恐怖

著者は不明で、『エイボンの書』を保持していたのと同じある秘密教団がヒューペルボリア語版を人類に伝えた。古代北極のロマールの地からも1冊が伝えられ、そちらはこの世とは別世界の〈夢の国〉にあるウルタールの寺院に保管されているという。

とてつもなく古いものだという噂があり、人類出現以前に書かれたものだともいわれている。『エルトダウン・シャーズ』との奇妙な対応も指摘されており、両者は地球、もしくは別な惑星の恐ろしい生命がもたらしたものかもしれない。

〈大いなる種族〉やツァトゥグア、カダスに関する言及があるほか、慄然たる原初の神話が図版を交えて述べられており、異形の神々についても多くのことがらが語られている。

現存する『ナコト写本』が書かれている言語ははっきりしないが、ヨーロッパとアメリカに数冊、図書館や個人の蔵書として保管されている。

人類誕生の遙か以前に書かれたという「ナコト写本」
いったいどんな生命体の手によるものなのか

禁断の伝承をまとめた
戦慄の書物

無名祭祀書
Unaussprechlichen Kulten

登場する主な作品
夜の末裔（まつえい）／黒い石／闇をさまようもの／永劫より

世界の奇怪な伝承をまとめた「無名祭祀書」作者フォン・ユンツトが迎えた謎の死は、恐るべき暗黒の知識を世に知らせた報いなのか

ドイツ人のフリードリッヒ・ヴィルヘルム・フォン・ユンツトは世界を旅し、さまざまな秘密教団を調べて奇怪な伝承を採取した。のちに彼はそれをまとめ、1839年にデュッセルドルフで出版したのが本書で、『黒の書』とも呼ばれる

ユンツトは次の本の準備をしている最中、鍵のかかった部屋の中で喉にかぎ爪の跡が残る絞殺体で発見された。原稿もばらばらに寸断されていた。その復元を試みた友人のアレクシス・ラドウは、それを読んだとたんに燃やしてしまい、自らもカミソリで喉をかき切ってしまったという。

オリジナルのドイツ語版のほか、ロンドンのブライドウェルから出版された誤訳の多い英語版、ニューヨークのゴールデン・ゴブリン・プレスから出版された削除版の存在も知られている。

悪名高い魔術師の呪わしき絶筆

妖蛆の秘密
Mysteries of the Worm

登場する主な作品
星から訪れたもの／暗黒のファラオの神殿／セベクの秘密／生きながらえるもの／妖蛆の王

ルドウィク・プリンによって1542年に書かれた魔道書。プリンは錬金術師、妖術師、魔術師などとも呼ばれ、第9次十字軍唯一の生き残りだと自称していた。

彼はシリアで捕らわれた際に中東の魔術に触れ、古い東洋神話の霊鬼や鬼神に出会ったという。一時期はエジプトにも暮らした。晩年はフランダースに移り、前ローマ時代の埋葬所の廃墟で、召喚した魔物や使い魔とともに暮らしたという。最期はブリュッセルの異端審問所で処刑された。

『妖蛆の秘密』は、おもに中東地域の異端信仰について記されており、処刑を待つプリンが獄中で執筆した。ラテン語で書かれた原稿は秘密裏に持ちだされ、プリンの死後1年たったころ、ケルンで印刷された。教会はただちに出版禁止の措置をとったが、小部数が密かに出回り、写しもとられている。

プロヴィデンスに住むある夢想家がこの本を翻訳しようとしたが、目に見えない吸血妖魔に襲われて非業の死を遂げた。

忌まわしい知識に満ちた魔道書『妖蛆の秘密』。翻訳を試みた男性は、不可視の魔物によって体をねじ曲げられ、全身の血を吸い尽くされたという

人間の冒瀆行為を暴露した異本

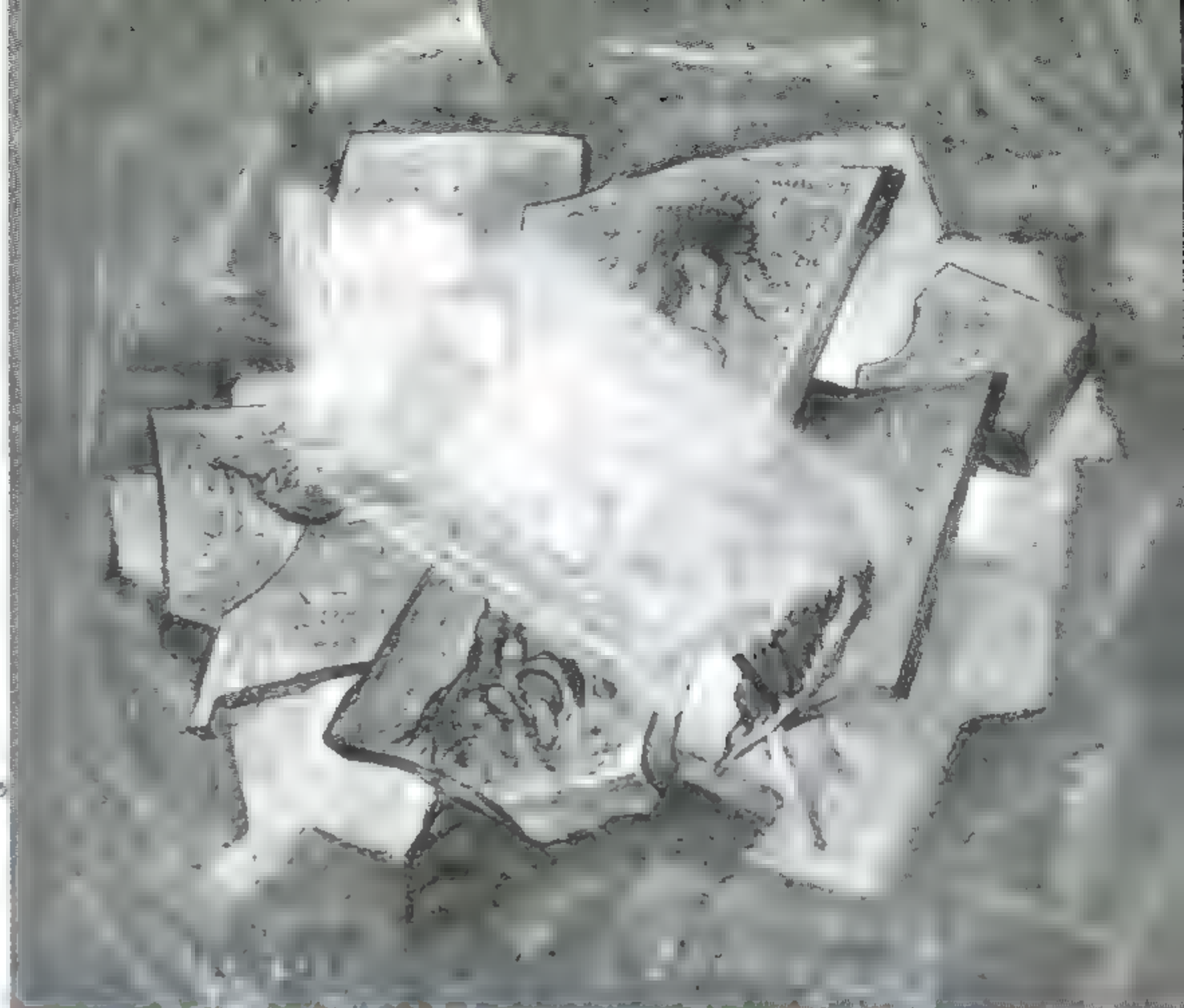
屍食教典儀
Cultes des Goules

登場する主な作品
闇をさまようもの

作家オーガスト・ダーレスの祖先であるフランス貴族、ダレット伯爵が18世紀初頭のころに書いたという異端の書。奇人と噂されたダレット伯爵は、パリで放埒な生活を送る一団によって行われていた降霊術、黒魔術、死体食、屍姦などをこの本で暴露したという。伯爵自身がそのような冒瀆的な行為に身を染めていたかは明らかではない。

同書に関する情報は非常にわずかである。貴族がスキャンダラスな内容の本を書いたということで、教会や貴族社会がその存在を必死で隠匿しようとしたのかもしれない。

ミスカトニック大学、星の知慧派教会、そのほか個人の蔵書の中にも同書の存在が認められており、写本ではなく印刷されたもののようだ。おそらくフランス語で書かれていると思われる。また「削除版」も作られたようで、個人蔵の同書の中にはそうした内容のものもあるらしい。

降霊術や人肉嗜食など、衝撃的な内容に満ちているという『屍食教典儀』。

発見された粘土板は全部で23個　そこに刻まれた「古代文字」が翻訳され、「エルトダウン・シャーズ」として発表された

粘土に刻まれた太古の記憶？

エルトダウン・シャーズ
Eltdown Shards

登場する主な作品
時間からの影／アロンソ・タイパーの日記／彼方よりの挑戦／知識を守るもの

20世紀初頭、イギリス南部エルトダウン近郊の砂利採取場で、石炭紀初期の地層から出土した粘土板に刻まれていた模様を、アーサー・ブルック・ウィンタース＝ホール牧師が解読して、1912年に刊行した文書。

同牧師は、模様が人類出現以前の象形文字であるとし、この太古の不可解な「刻銘」を「翻訳」して自費出版したのだが、シャーズの限られた数に比べるとこの「翻訳」は驚くほど長いため、その内容に疑問を呈する研究家も多い

内容は、時空を超えて精神をほかの精神と交換できる〈大いなる種族〉について書かれている

また、イェークーブ人が宇宙に送りだした〈立方体〉が地球に到達したこと、その正体を知った〈大いなる種族〉が封印し、特別な神殿の中に護持していたが、今では行方がわからないことが記されているという。

一方、『ナコト写本』との奇妙な対応も指摘されている。

書き写された旧支配者の秘密

セラエノ断章
Celaeno Fragments

登場する主な作品
永劫の探究／破風の窓

もとは壊れた石版の形で遺されたもので、書物としては、ラバン・シュリュズベリイ博士によって英語で書かれた手書きの覚書があるのみ

博士自身の手で題名が書かれた、鍵付きのふたつ折りの本で、博士が2回目の謎の失踪を遂げた1938年に、博士に雇われていたアンドルー・フェランによってミスカトニック大学図書館に最終的に預けられた

題名から、博士がプレアデス星団中のセラエノに行き、同地にある図書館で調べたことがらが記されていると推察される。

内容は〈旧支配者〉に関するさまざまな情報、地、水、火、風の四大元素にクトゥルー神話の神々をあてはめる試み、宇宙空間の旅行を可能にする黄金色の蜂蜜酒のことも書かれている　ちなみに、博士は『ルルイエ異本を基にした後期原始人の神話の型の研究』『ネクロノミコンにおけるクトゥルー』といった著作や覚書でも知られる。

ラバン・シュリュズベリイ博士がセラエノの大図書館に滞在中、その内容に接し、書き写したとされる「セラエノ断章」

禁断の書庫をのぞく

実在する魔道書たち

クトゥルー神話世界に登場し、または関連するとされる数々の書物。
その存在の定かでないものが圧倒的に多い中で、確かに実在する書もある

「ヴォイニッチ写本」

ロンドンの古書籍商ウィルフレド・M・ヴォイニッチが1912年イタリアの僧院で発見した謎めいた写本。オカルト的な彩色図版と暗号文書からなり、いまだ解読されていない。一説には『ネクロノミコン』を暗号化したものだともいわれる。

「悪魔崇拝」

フランスの異端審問官ニコラ・レミが「レミギウス」という名で書いた、魔女と妖術に関する資料で、魔女裁判の際には審問官の参考書として使われたという。

「魔女への鉄槌」

ドミニコ会の修道士ヤコブ・シュプレンゲルとハインリッヒ・クラメールの共著で、1486年にラテン語で書かれた書物。内容は中世の宗教裁判官に対する参考書というもので、魔女の定義や呪術の紹介にはじまり、異端者の見分け方と拷問の仕方などが詳細に記されている。この本により、推定900万もの人々が恐るべき拷問を受け、死に追いやられた。

「金枝篇」

イギリスの人類学者ジェームズ・ジョージ・フレイザーの著書。1890年に2巻で出版。その後さらに内容をふくらませた13巻からなる拡大版が1911〜1915年に出版された。古代から連綿と伝わる伝説、魔術、信仰の起源などについての研究が記され、魔術的、宗教的、科学的な見解を考察する人類学の古典的大著である。

「西欧における魔女信仰」

「西ヨーロッパの魔女儀式」ともいわれる。イギリスの歴史民俗学者マーガレット・マレーにより、1921年にオックスフォード出版局から出版された。中世のいわゆる魔女集会とキリスト教以前の信仰とが関連したものであると提唱し、大きな議論を呼んだ。

『ゾーハル（光輝の書）』

『ゾハールの書』ともいわれる。

ユダヤの秘教カバラの教典。もとはアラム語で書かれたものだが、多数の違った版や翻訳版があり、ラテン語、ドイツ語、英語、フランス語などに翻訳されている。オリジナルはモーセス・デ・レオンにより1280年に書かれた。

瞑想と啓示を通して神に近づく努力を示す、中世ユダヤの神秘主義的な伝承を伝えるものとして非常に重要な本である。

『エメラルド碑板（タブレット）』

著者は不明。伝説によると、ヘルメス神自身がエメラルドの板に刻んだという。フェニキア語から多数の言語へ翻訳され、中世ヨーロッパにおける錬金術の中心的な本となった。また、神智学者のモーリス・ドウリルが、ユカタン半島で発見したという碑板を翻訳して1948年に出版している。

『法の書（アルウェル・レギス）』

魔術結社「ゴールデン・ドーン」を飛びだしたあと、ハネムーン旅行に出ていた魔術師アレイスター・クロウリーが、新妻のローズ・ケリーを霊媒として受け取った超自然的なメッセージを書き留めたもの。「秘密の首領」である「エイワス」という名の守護精霊から送られてくる教えが記されている。

魔術結社o.t.oの参入者ケネス・グラントは、クロウリーの教義とクトゥルー神話の類似性を指摘し、この書が『アル・アジフ』に対応するものだと主張している。

闇の邪神を召喚する魔道具

輝くトラペゾヘドロン

Shining Trapezohedron

登場する主な作品
闇をさまようもの／尖塔の影／アーカム計画

ナイアルラトホテップの化身である〈闇をさまようもの〉の崇拝に使用されるアイテム。

暗黒の惑星ユゴスで作られ、地球にもたらされたのちに〈古のもの〉の所有物となる。その後エジプトのファラオであるネフレン＝カが手に入れ、地下礼拝室にそれを置いて邪悪な儀式に使った。1844年に考古学と隠秘学の研究で名高いイノック・ボウアン教授がそれを発掘し、プロヴィデンスに持ち帰って星の知慧派教会の神聖な品としたのである。

輝くトラペゾヘドロンは4インチほどの大きさで、ふぞろいの平面部を数多く備え、紅い線の入ったほとんど黒に近い多面体の結晶物である。不均整な形の金属箱の中に7本の支柱でつり下げられており、離れると卵形もしくは不規則な球形に見える。そして、暗闇で箱から解放すると〈闇をさまようもの〉が出現するという。

1877年に星の知慧派教会が解体されたあとも、その廃墟に残されていたが、1935年に起きた怪事件ののち、ナラガンセット湾に投げ捨てられた。

恐るべき邪神を召喚できる輝くトラペゾヘドロン。見つめていると透明になり、内部にあらゆる時代の空間が現れるという

忘れ去られた邪教の象徴

黒い石

Black Stone

登場する主な作品
黒い石

ハンガリーの寒村シュトレゴイカバール近郊に立つ石塔。高さは約16フィートほどで、八角形の方尖塔(オベリスク)のような形をしており、奇妙な半透明の石を彫って作られている。碑の周囲には判読不可能な彫刻が施されているが、その大部分は欠けたり、風化したりしている。フン族が残したものともいわれるが、フォン・ユンツトらはそれを否定している。

かつて黒い石は、この地域に住んでいる原始的な山の民が邪悪な儀式を行う場所であったが、1526年にイスラムの軍隊がこの地域に進入したときに、山の民はすべて殺害されてしまった。

石を見つめると狂気が引き起こされ、近くで眠りにおちた人々は一生悪夢を見つづけるといい、今でも近くの住民は黒い石を避けている。ニューヨーク在住の天才詩人ジャスティン・ジョフリは、この悪夢によって『石碑の民』を書いたといわれる。

黒い石の周囲で、太古の民は恐るべき神に捧げるため、狂乱と暴力に満ちた魔宴を行っていた。

古代アラブの民によって作られた魔法のランプ。光をともすと、この世のものではない光景が映し出されるという。

見る者を異界へと誘う魔法のともしび

アルハザードのランプ

Lamp of Alhazred

登場する主な作品
アルハザードのランプ

アラビアの砂漠に埋もれているともいわれるアイレムを造った伝説の部族アドによって製作されたランプ。アブドゥル・アルハザードが一時期所有していたことから、この名で呼ばれている。

金のような材質で、楕円形の小さな壺のような形をしている。一方には曲線を描く取っ手がついており、もう一方には灯心に火をつけるための口がある。表面には未知の言語の文字や絵が奇妙な模様を描いている。油を満たして点灯すると、ランプは壁やその周囲に、〈無名都市〉、カダス、ルルイエ、レン高原など、クトゥルー神話に関連した場所の映像を映しだすという。最後にランプを所有していたプロヴィデンスの作家ウォード・フィリップスは、このランプが映しだした映像を見て、さまざまな怪奇幻想小説を書いた。

のちにフィリップスは失踪し、未解決の事件として忘れられていったが、ランプには時空を超える「門」としての機能があるのかもしれず、彼の失踪もそれに関係しているふしがある。

手にする者に時空を超える力を与える

銀の鍵

The Silver Key

登場する主な作品
銀の鍵／銀の鍵の門を越えて

長さ5インチほどの古めかしいくすんだ銀の鍵。グロテスクな彫刻の施された、大きさおよそ1フィート平方の樫材の箱に入れられている。

遙か昔にヒューペルボリアで鍛造されたと信じられており、十字軍兵士であったジェフリー・カーターがそれを手に入れて、カーター家に代々伝えられることとなった。

鍵を夕日に向けて持ち、9度回しながらある呪文を唱えると、鍵を持った者はどの時空にでも移動できるようになるという。〈門を護るもの〉にして〈導くもの〉である神ウムル・アト＝タウィルが守護する〈窮極の門〉の鍵を開けることも可能と考えられる。

祖父から鍵を受け継いだランドルフ・カーターは1928年に失踪したが、この鍵を用いて30年前の過去の自分に会ったのだとも、〈夢の国〉へ行き、その都イレク＝ヴァドの王になったのだとも伝えられる。

謎めいたアラベスク模様と無気味な象形文字に覆われた銀の鍵。時空を超える魔力を宿すといわれている。

〈旧支配者〉の手先から身を守る護符

五芒星形の印

Seal of the Five-pointed Star

古代の地ムナールの灰白色の石に、炎の柱を囲む五芒星形を刻んだ護符〈旧神の印〉〈ルルイエの封印〉〈旧き印〉とも呼ばれる。中央の意匠は目を表しているとみられている。

これを所持する者は、〈深きものども〉、ショゴス、トゥチョ＝トゥチョ人、ミ＝ゴウなどの〈旧支配者〉の手先から身を護ることができるが、なぜこの印にその効果があるかは不明。〈旧神〉が〈旧支配者〉を封じこめる際に、〈旧支配者〉をある音節と印（そのひとつが五芒星形の印であった）に対して無力になるよう、その精神に記憶を挿入したのだともいわれる。

ともあれ、シュリュズベリイ博士はこの護符を身に着けるようにしていたし、ウィルマース・ファウンデーションはクトーニアンを捕獲するための封印としてこの印を利用し、効果を発揮している。そのほか、枝のような印にも同様の効果が得られると考えられている

登場する主な作品
永劫の探究／魔女の谷／暗黒の儀式／恐怖の巣食う橋／湖底の恐怖／彼方からあらわれたもの／モスケンの大渦巻き

ラバン・シュリュズベリイ博士によれば、〈旧神〉はクトゥルーを封じる際、この五芒星の印を用いたという

宇宙の知的生物が生んだ脅威の科学技術

円筒型脳収容器

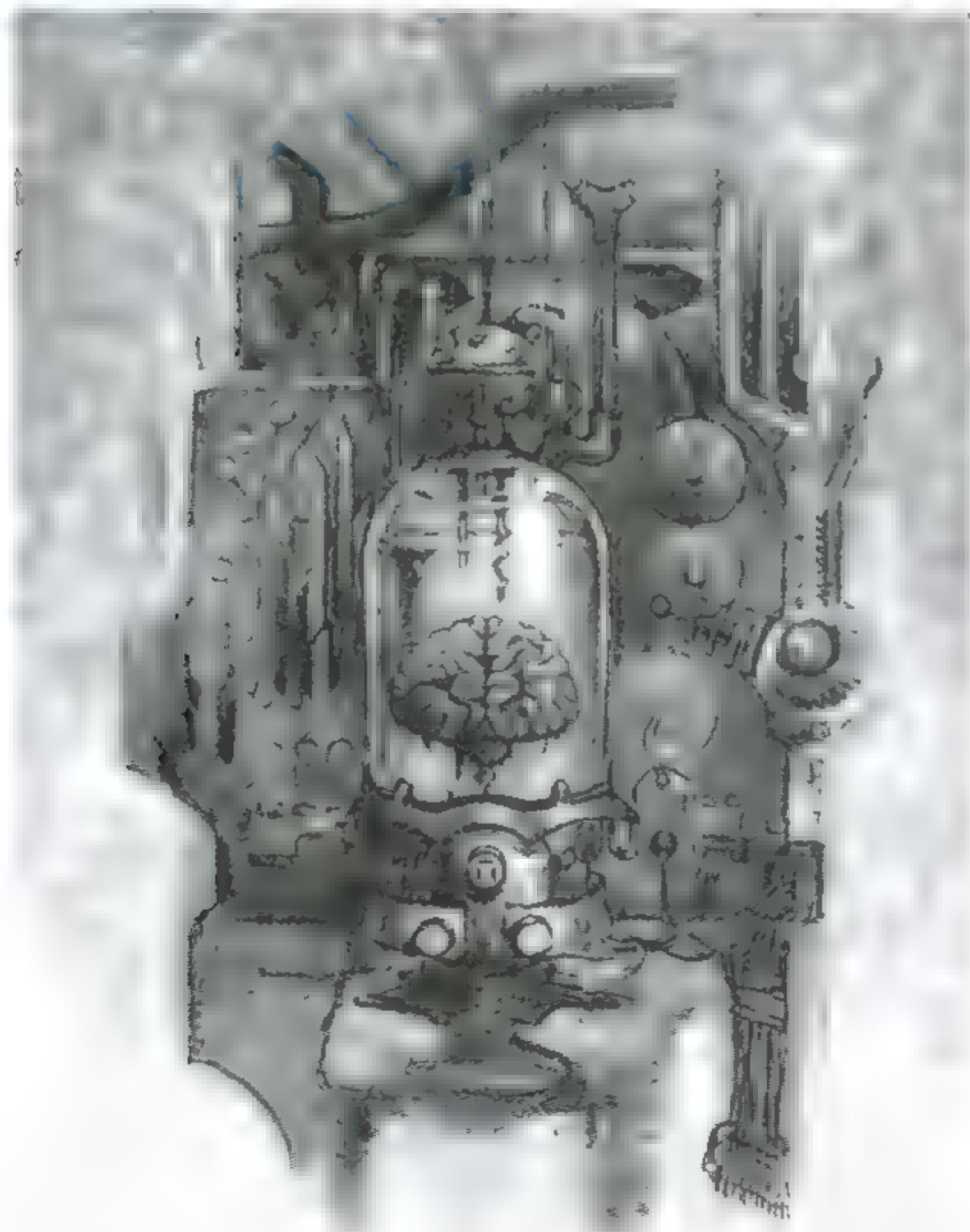
Brain Cylinder

登場する主な作品
闇に囁くもの／アーカムそして星の世界へ

生物の脳を意識があるまま保存し、宇宙や時空連続体を超えて旅行させる装置。ユゴスで採掘される特殊な金属製で、高さ1フィート、直径1フィート弱、二等辺三角形を構成する3つの奇妙なソケットがついている。中には液体が満たされており、時折補充される。〈ユゴス星の菌類生物〉の技術によるもので、外科手術によって取りだされた脳は、ソケットからさまざまな装置と接続することによって、感覚と発声能力のある生活を送ることができる。また、脳を摘出した体を生かしておく方法もある。ただし、体を生かしておく必要がないときには「外科手術と呼んでは粗雑に過ぎる巧妙な裂開処置」が行われるという。

ミスカトニック大学で文学を教えていたアルバート・ウィルマースは、ヴァーモント州にいる文通相手を訪ねた際、この円筒が10個以上並んでいるのを目撃している。円筒の中には人間のほか、菌類生物、海王星の生物の脳が収容されていたらしい

意識を持ったまま生物の脳を保存できる装置。実際に、脳を宇宙の彼方へ運びだされたとみられる失踪事件も起きている

第4章

闇の真実に導かれし者たち

Chapter 4
People Led by the Truth of Darkness

封じられた暗き場所より、
邪悪な波動を送る〈旧支配者〉たち。
大いなる神々に対し、あまりにも
小さな存在にすぎない人類は、
なすすべもなくその力に晒されている。
ある者はその妖しい魔力にとらえられ、
またある者は圧倒的な力に抗うべく、
果敢に戦いを挑む――

暗黒の書を生みだした
狂えるアラブ人

アブドゥル・アルハザード

Abdul Alhazred

登場する主な作品

「ネクロノミコン」の歴史／無名都市／永劫の探究／ネクロノミコン　アルハザードの放浪

8世紀のウマイヤ朝に生きた狂気の詩人

『ネクロノミコン』の生みの親とされるアブドゥル・アルハザードの生涯については、いくつかの似て非なる物語が存在している。謎と秘密に満ちた人物たるゆえんであろう。

アルハザードは、ラヴクラフトの『無名都市』において、次の二行連句の作者として初めて登場した。

「そは永久に横たわる死者にはあらねど
測り知れざる永劫のもとに死を超ゆるもの」（『ラヴクラフト全集3』大瀧啓裕訳　創元推理文庫より）

その後も、ラヴクラフトは、さまざまな作品にアルハザードとその著書『ネクロノミコン』を登場させるが、1927年に「『ネクロノミコン』の歴史」と題するエッセイが書かれ、ここで初めてアルハザードの素性が明かされた。

彼は、イエメン国サナア出身の狂える詩人であり、紀元700年ごろのウマイヤ朝に生きた人物だというのだ。

アルハザードは、その放浪の人生の中で、バビロンの廃墟やエジプト・メンフィスの地下洞窟を訪れた。

さらに、古代アラブ人が「ロバ・エル・ハリイエー（虚空）」（現在名は「ルブ・アル・ハーリー（空白地帯）」）と呼び、現代では「ダーナ（真紅の砂漠）」と称されるアラビア南部の砂漠に踏みこみ、死の邪霊と怪物が棲むその場所で10年を過ごしたという。

禁断の知識を求めた旅は不可解な死で終焉を迎える

ドナルド・タイスンは『ネクロノミコン　アルハザードの放浪』で、ラヴクラフトが遺したアルハザード伝説をさらに補強し、彼の一代記に仕立てあげた。

アブドゥル・アルハザードとは、アラビア語で「喰らいつくすものの僕」を意味するという。もとはイエメン王の寵愛も深い、若き美貌の詩人であったが、王の娘と情を交わしたため、陽物、鼻、耳を削がれ、砂漠に追放されてしまう。

なんとか命をとりとめたアルハザードは、砂漠の邪悪なる地霊と交流し、おぞましい知識を得る。やがて彼は、失われた円柱都市アイレムに到達し、そこで人類以前の地球を支配していた文明種族の歴史と謎に触れたのだった。ちなみに1992年、

アラブの狂詩人、アブドゥル・アルハザード。その名は「喰らいつくすものの僕」を意味し、長き放浪の中で得た禁断の知識を『ネクロノミコン』としてまとめた

晩年をダマスクスで過ごしたアルハザードは、白昼の街中で不可視の怪物に襲われ、命を落としたとされる

アイレムのモデルとなった伝説の遺跡「ウバル」が、オマーン南部の砂漠で発見されている。

その後、アルハザードは世界を放浪し、さらに多くの禁断の知識を得た。紅海を越えてエジプトのナイル河をさかのぼり、アレクサンドリアからバビロンに達して、古代ペルシアのマギ族からは古(いにしえ)の秘儀を学んでいる。

晩年、アルハザードはダマスクスに住み、『アル・アジフ』を執筆した

この『アル・アジフ』をギリシア語に訳したものこそ、あの暗黒の聖書『ネクロノミコン』なのだ。

12世紀の伝奇作家イブン・カリカンによると、アルハザードは恐ろしい最期を迎えたようだ。白昼、多くの人々が行き交う大通りで、目に見えない怪物に捕らえられ、むさぼり喰われた。周囲の群集は、あまりの恐怖に立ち尽くすしかなかったという。紀元738年のことだと伝えられている。

アブドゥル・アルハザードがたどったと想定される漂泊のルート

6 晩年、シリアのダマスクスに住みつき、『アル・アジフ』(=『ネクロノミコン』)を執筆するが、738年に市場で不可解な死を遂げる

5 マギ族の修道院に入りこみ、秘密の図書館に侵入を果たす

4 エジプトからバビロニアを経てティグリス河畔へ

3 失われた都市アイレムや〈無名都市〉を訪れ、さらにレン高原やルルイエなどの異界をめぐる旅のあと、エジプトへ渡る

2 18歳のとき、王女との恋に落ち、その罰として「虚無の広がり」として知られる「ロバ・エル・ハリイェー」の砂漠に追放される

1 イエメンのサナアに生まれ、12歳から宮廷に暮らす

参考：『ネクロノミコン アルハザードの放浪』(ドナルド・タイスン著 大瀧啓裕訳／学研

小説の語り手「わたし」

ラヴクラフト作品の多くは、「わたし」という一人称で書かれている。これは、20世紀初頭に多く見られた小説の1スタイルで、手紙や日記の体裁をとるのが特徴だ。

その中で、主人公「わたし」は、邪神や異界の存在と遭遇した体験や、あるいは遭遇した人物から聞きとった異常な内容を語る。

ほとんどの「わたし」は、医師や学生、研究者、潜水艦の士官など、科学的な知識や理性に秀でた者として設定されているが、彼らは現代科学や理性では克服しえない「宇宙的恐怖」に遭遇した体験と思いを、文字に落として整理しようとする。

その結果、彼らの記録は、図らずも彼らが狂気に冒されていく過程を描くことになる。そして、望まざる結果を暗示する走り書き、もしくは、人外の存在に触れた後悔の言葉で、物語を終えるのだ。

ウェイトリイvs.ミスカトニック大学の三教授

Whateleys vs. The professors of Miskatonic University

登場する主な作品
ダニッチの怪

呪われた家系 ウェイトリイ一族の秘密

クトゥルー神話には、いくつかの退廃した一族が登場する。『ダニッチの怪』の主役ともいうべきウェイトリイ一族は、その好例である。

ニューイングランド地方の辺境、深い森や丘陵地に囲まれた地域にある村には、孤立した社会をつくる開拓者たちが住み着いていた。彼らは文明社会から切り離され、近親結婚などを重ねた結果、人間として衰退の一途をたどっていた。

その中には、17世紀末、セイレムに吹き荒れた魔女狩りの嵐から逃げだしてきた高名な一族も含まれていたが、魔道に魂を売ったその魔女の血筋は、村の中で、さらなる堕落の渦に飲まれていった。

ウェイトリイ一族は、そうした血統のひとつであった。その中でも、もっとも忌まわしいウェイトリイ老一家の娘、ラヴィニア・ウェイトリイは白化症を患う不器量な娘であったが、魔道に通じており、ある儀式の結果、1913年2月2日の早朝、密かに子どもを産んだ。ヨグ＝ソトースの落とし子、ウィルバー・ウェイトリイである。

ウィルバーは異常な速度で成長し、幼少のころから驚くべき体力と才能を発揮した。悪い噂の絶えなかった祖父が死に、母ラヴィニアが失踪したとき、ウィルバーは10歳であったが、早熟で、なおかつ母譲りの魔道の知識を備えていた彼は、父なる邪神の召喚を企てる。

しかし、不完全な魔道書では目的を果たせず、ミスカトニック大学の付属図書館を訪れた。そこでウィルバーは、彼の野望を阻止する宿敵、ヘンリー・アーミティッジ博士と出会うのである。

だが、ヨグ＝ソトースの呪わしい子はひとりではなかった。ラヴィニアが産んだのは双子だったのだ。もうひとりの息子は、ウィルバーよりも父親に似た、目に見えぬ怪物だった。餌を与えていたウィルバーの死によって飢えに狂った怪物は、ウェイトリイ家から脱走し、近隣の家畜や人々を襲いはじめる。

恐るべき野望を阻止したミスカトニック大学の教授たち

ウィルバーの来訪は、ミスカトニ

アーミティッジ博士、ライス教授、モーガン博士の3人は、入念に用意した装置と呪文を用いてヨグ＝ソトースの落とし子に立ち向かい、これを退治した

▲呪われた家系のウェイトリイ一族。病身のラヴィニアはヨグ＝ソトースと交わり、獣じみた風貌のウィルバーと、父親の形質を強く受け継ぐ不可視の化物という双子を産み落とした

ック大学付属図書館を預かるヘンリー・アーミティッジ博士に危機感を抱かせる。

すでに老境に達していた博士ではあったが、その鋭い頭脳はいささかも衰えていなかった。ウィルバーの調査の痕跡を見て、迫りくる〈旧支配者〉ヨグ＝ソトースの危険に気づいたのだ。彼が呪文の書写を禁じなければ、ダニッチの事件は最悪の結果を生んだだろう。

その後、ウェイトリイ家から回収された台帳の謎の暗号を解読したアーミティッジは、ウィルバーとウェイトリイ老一家の企てを理解し、ヨグ＝ソトースの落とし子を放置するわけにはいかないと考えた。

悪魔より恐ろしい化物を退治するという、彼の勇気ある決意に同調したのは、同輩のウォーラン・ライス教授とフランシス・モーガン博士。綿密に準備を調えた3人はダニッチにおもむき、怪物を虚空の彼方へと消し去る呪文を唱えた。

忌まわしき落とし子は永遠に葬り去られ、恐るべき事態は未然に防がれたのである。

その他のミスカトニック大学の教授たち

●ナサニエル・ウィンゲイト・ピースリー

ラヴクラフトの『時間からの影』に登場する、ミスカトニック大学の政治経済学教授。1908年から1913年にかけて、原因不明の記憶障害と精神的混乱に見舞われた。それは〈大いなる種族〉による精神交換が原因であった。

5年間の長きにわたり、〈大いなる種族〉の肉体で過ごした記憶を取り戻した教授は、その内容を書き残すとともに、〈大いなる種族〉の痕跡を求めて、オーストラリアの砂漠地帯での発掘に参加した。彼を補助した次男ウィンゲイト・ピースリーは、同大の心理学教授。

●アルバート・N・ウィルマース

ラヴクラフトの『闇に囁くもの』に登場する、アーカム在住のアマチュア民俗学者で、ミスカトニック大学では英文学を教えている。ヴァーモント州の洪水の際に目撃された怪物に関する投稿をきっかけに、ヘンリー・エイクリイと文通を行い、ユゴス星から来た菌類生物の暗躍を知ることになる。

ブライアン・ラムレイの『地を穿つ魔』には、彼の遺志を継ぎ、クトゥルー眷属邪神群（CDC）の研究を行う国際組織「ウィルマース・ファウンデーション」が登場する。

魔道の力を操る邪悪な存在

時を超えて暗躍する妖術師たち

クトゥルー神話には、魔道に堕ち、世界を混沌に導こうと画策する妖術師たちが登場する。そんな忌まわしき彼らの一部を紹介しよう。

ジョウゼフ・カーウィン
Joseph Curwen

登場する主な作品
チャールズ・デクスター・ウォード事件

ラヴクラフトの『チャールズ・デクスター・ウォード事件』において、自身の子孫である主人公チャールズを狂気に導く17世紀の妖術師。

1692年、魔女狩りで有名なセイレムの町からプロヴィデンスに移り住む。古今の魔術や錬金術に精通し、盟友とともに不老不死の秘術を開発。プロヴィデンスでは、貿易商として成功する一方、農場で謎の実験を繰り返していたが、1771年までほぼ変わることがなかった外見や奇怪な行動のせいで、妖術使いとして警戒され、街の人々に襲撃されて命を落とす。

その死後、ことごとくその存在の記録を抹消されていたカーウィンは、単なる興味から系図を調べはじめたチャールズを利用して復活を果たす。

妖術師ジョウゼフ・カーウィン。不死の秘術を実現させるために、たくさんの奴隷たちを実験台にしていた

「暗黒の男」に仕え、地獄めいたサバトを執り行うキザイア・メイスンと、その使い魔ブラウン・ジェンキン

キザイア・メイスン&ブラウン・ジェンキン
Keziah Mason & Brown Jenkin

登場する主な作品
魔女の家の夢

ラヴクラフトの『魔女の家の夢』に登場するキザイア・メイスンは、17世紀にセイレムで逮捕された魔女である。彼女は、「暗黒の男」と呼ばれる邪悪な存在に仕え、ある種の直線と曲線によって空間の壁を抜けて、別の空間に移動する術を心得ていた。魔女としての名前は「ナハブ」。

一時、アーカムに滞在していたが、隠れ住んだとされる館は今も実在し、「魔女の家」と呼ばれている。そこには老婆の亡霊が出現するという噂もある。

ブラウン・ジェンキンは、鋭い牙を持つ、小柄で毛むくじゃらの生き物で、キザイア・メイスンの使い魔である。魔女の血で養われたその顔は人間のようで、あらゆる言語を話せるという。

ナイ神父
Brother Ny

登場する主な作品
アーカム計画

ロバート・ブロックの『アーカム計画』に登場する異端宗派〈星の知慧派〉教会の神父。

〈星の知慧派〉は1844年にプロヴィデンスで組織された邪悪な新興宗派で、ナイアルラトホテップを信仰の対象とする。一度、当局の弾圧を受けて閉鎖されるが、ナイ神父によって再興されている。

神父は「スペードのエースのような」と表現される漆黒の肌を持つ黒人だが、黒い衣装と白い手袋を好む。その実態は、千の異形を持つナイアルラトホテップの化身のひとつであり、世界を混沌に陥れるために暗躍する。

漆黒の肌と謎めいた容貌のナイ神父　その正体はナイアルラトホテップの化身と考えられる

リチャード・アプトン・ピックマン
Richard Upton Pickman

登場する主な作品
ピックマンのモデル／未知なるカダスに夢をもとめて

ラヴクラフトの『ピックマンのモデル』に登場するボストンの画家。写実的な手法で、恐怖を描写することを好み、しばしば食屍鬼（グール）の生活をその題材に選んだ。代表作は『食事をする食屍鬼』および『教え』。ボストンの貧民街ノース・エンドにそのアトリエを構えていた。

セイレムの出身で、祖先には17世紀の魔女狩りの犠牲者もいる。

いくつかの衝撃的な作品を発表したあと、突如として失踪してしまう。失踪直前の時期には、奇矯な性格が高じて、狂気に陥っていたと証言する友人たちも存在する。一説によれば、〈夢の国〉で食屍鬼のリーダーになったという。

圧倒的な画力を持つリチャード・アプトン・ピックマン。彼の描く食屍鬼は、驚くべきことに実物の写真をモデルにしたものだった。

いまわしき血に呪われた町

インスマスの住民たち

The Residents of the Inssmouth

登場する主な作品
インスマスを覆う影／永劫の探究／ルルイエの印／深きものども／インスマスの黄金

奇病と暴動によって荒れ果てた港町

マサチューセッツ州辺境の港町インスマスは、17世紀にマヌーゼット河の河口に建設された

その後、造船業や海運業で栄えたが、1812年の米英戦争を境に衰退し、ほかにたいした産業もなく、魚かエビをとるくらいの仕事しかない寂れた町になっていった

1848年、謎の伝染病が蔓延し、それに起因した暴動が起こったのちに、海運業を営んでいたオーベッド・マーシュ船長が「ダゴン秘密教団」を組織して町をその本拠地としたことから、邪教崇拝者の巣窟と化した。それ以降、町の実質的な支配者となったマーシュ家は、町はずれに金の精錬所を所有し、町の利権とともに代々引き継いできた

町は周辺地域の住民から忌み嫌われ、現在はアーカムとインスマスを結ぶバスの路線が、かろうじて外部とのつながりを保っている状態である

「インスマス面」に秘められたマーシュのおぞましき密約

老船長オーベッド・マーシュは、東インド諸島の小島から女性を連れ帰り、自らの妻とした。さらには同地の住民を移住させ、インスマスの人人との交婚を積極的に勧めてもいる

よその土地の血が流入したためか、インスマス出身者の多くは「インスマス面」と呼ばれる独特の面相をしている。妙に頭が狭く、鼻が平べったく、目は開きっぱなしでふくらみ、じっと人を睨んでいるように見えるのだ

吹き出物だらけのサメ肌は汚らしく、首の両側はしわだらけで、まるでエラのようにくびれている。おまけに若くから頭が禿げる傾向も見られ、この容貌は、年寄りほど顕著になっていく傾向があるという。

実は、これはオーベッドの恐るべき契約によってもたらされたものだった。彼はかの島で〈深きものども〉の存在を知り、クトゥルーとその眷属であるダゴンを崇拝する見返りとして、金と魚群を得ることになったのである

そうして進んだ〈深きものども〉との交わりの結果、一族の者やそれに関わる人間たちは、成長とともに両生類さながらの面妖な風貌へと変わり、やがてインスマスの沖合にある〈悪魔の暗礁〉の深淵に棲む同族のもとへ還っていくのである

陰鬱でさびれた港町インスマスと、そこに暮らす「インスマス面」の住人たち　彼らは〈深きものども〉との混血によっておぞましい変貌を遂げ、やがて暗き海の深みへ姿を消す

神話の恐怖を体験した者たち

「宇宙的恐怖」の世界をのぞく

ラヴクラフトは、かれの代表的なエッセイ「文学と超自然的恐怖」の序説で、次のように書き記している。

「人間の感情の中で、何よりも古く、何よりも強烈なものは恐怖である。恐怖の中でも、もっとも古く、もっとも強烈なのが、未知のものに対する恐怖である」——と。

彼は、血まみれの骸骨や生ける屍体、あるいは吸血鬼や人狼といった、あからさまな恐怖の対象を出すのではなく、目に見えずとも、立ちのぼる不安な空気や、そこに内包されるなんとも言いがたい恐怖を感じさせる小説をよしとし、そのスタイルを貫いていた。

人間が未知のもの、理解の域を超えた大いなる力の存在に覚える畏れと恐怖の感情を、ラヴクラフトは「宇宙的恐怖（コズミック・ホラー）」と位置づけ、ひとつのジャンルに育てあげていったのである。

彼の作品には、そうした「未知の領域に存在する何か」と接触したことで、恐るべき体験と悲惨な最期を迎える登場人物が多数登場する。

脳髄を抜きとられた状態で生かされていたヘンリー・W・エイクリイ。最後に確認されたのは、安楽椅子に残された彼の顔と2本の手だけであった。

奇怪な宇宙生命体と接触した ヘンリー・W・エイクリイ

『闇に囁くもの』に登場する博学の郷士。彼は、ヴァーモント山中で活動する、謎の生物を追いかけるうちに失踪する。怪生物の正体は宇宙から飛来した〈ユゴス星の菌類生物〉で、高い知能を持つ彼らによってエイクリイは脳髄を抜きとられ、生かされた状態で宇宙の彼方へ連れ去られたと推測されている。

サバトの悪夢に取りこまれた ウォルター・ギルマン

『魔女の家の夢』の主人公。ミスカトニック大学の学生で、稀代の魔女キザイア・メイスンが隠れ住んだという部屋に下宿したギルマンは、メイスンに憑依されてしまう。妖しい異世界の夢に悩まされた末、使い魔ブラウン・ジェンキンに生きたまま心臓を喰われ、無残な最期を遂げる。

この世ならぬ調べを奏でるエーリッヒ・ツァン。絶命してなお、彼のヴィオールは狂乱の音楽をかき鳴らしていたという。

異界の音楽を奏でつづけた エーリッヒ・ツァン

『エーリッヒ・ツァンの音楽』に登場するヴィオール奏者。フランスのオーゼイユ街という、地図にない市街地に住んでいた。主人公はツァンが夜ごと奏でる音色に惹かれるが、彼が弾いていたのは、おぞましくも魂を揺さぶる異界の音楽であった。やがて、ツァンは異界の魔に襲われて命を落とす。

定められし運命の超越を目指して

永劫の探究者たち

人は「死すべきもの」としてこの世に生まれてくる。そして抗うことのできぬ時の流れとともに生きていく存在である。だが、クトゥルー神話に登場する幾人かの人物は、あるものは時空を超え、あるものは死せる肉体を蘇らせて、人の運命を克服し、悠久の時の流れに逆らおうとした。ここでは、そんな永劫の探究者たちにご登場願おう。

ラバン・シュリュズベリイ博士

Laban Shrewsbury

登場する主な作品
永劫の探究

オーガスト・ダーレスの『永劫の探究』は、ラバン・シュリュズベリイ博士と4人の若者が、邪教教団とクトゥルーに戦いを挑む連作長編である。シュリュズベリイ博士は、アーカムに住む神秘思想の研究家で、一時期ミスカトニック大学で教鞭をとったこともある。

代表的な著書は『ルルイエ異本を基にした後期原始人の神話の型の研究』および『ネクロノミコンにおけるクトゥルー』。

髪は真っ白だが、口髭も顎髭もなく、がっしりとした突きだし気味の顎と、半ばすぼめた口、猛々しい鷲鼻といった特徴的な容貌をしている。すぐそばからでも見通せない暗いレンズの眼鏡をかけているので、目の様子はまったくわからない。

約20年間失踪していたが、実はその期間、遥か銀河の彼方、プレアデス星団の惑星セラエノにある大図書館で、壊れた石板の形で保存されていた『セラエノ断章』に触れ、失われた知識を獲得していた。

バイアクヘーを操り、クトゥルー復活を阻止しようと活躍したラバン・シュリュズベリイ博士。確かに視力を持つはずなのに、その目に眼球がないのを見た者もいるという。

タイタス・クロウ&アンリ＝ローラン・ド・マリニー

Titus Crow & Henri-Laurent de Marigny

登場する主な作品
黒の召喚者／ド・マリニーの掛け時計／プリスクスの墓／地を穿つ魔／ニトクリスの鏡／名数秘法

タイタス・クロウは英国におけるオカルトの重鎮で、魔術を武器にクトゥルー眷属邪神群（CDC）と対決する邪神狩人である。

第2次世界大戦中、クロウは英国軍本部に身を置き、ナチスドイツの暗号を解読するとともに、ヒトラーのオカルト嗜好に関する助言を任務としていたが、戦後はその力を用い、悪に立ち向かうようになった。

生涯の親友アンリー・ローラン・ド・マリニーは、ニューオリンズに住む世界的な神秘家エティエンヌの息子で、魔法遺物の収集家である。

後年、ふたりは謎の群発地震事件に絡んでいた地底の魔クトーニアンと戦い、ウィルマース・ファウンデーションと協力するが、その後失踪した。本邦未訳の長編では、彼らは「異界への旅」に向かったことになっている。

ともに魔道関係の遺物に関心を持つタイタス・クロウとアンリ＝ローラン・ド・マリニー。親友同士でもある彼らは、邪神狩人として活躍する。

ハーバート・ウェスト
Herbett West

登場する主な作品
死体蘇生者ハーバート・ウェスト

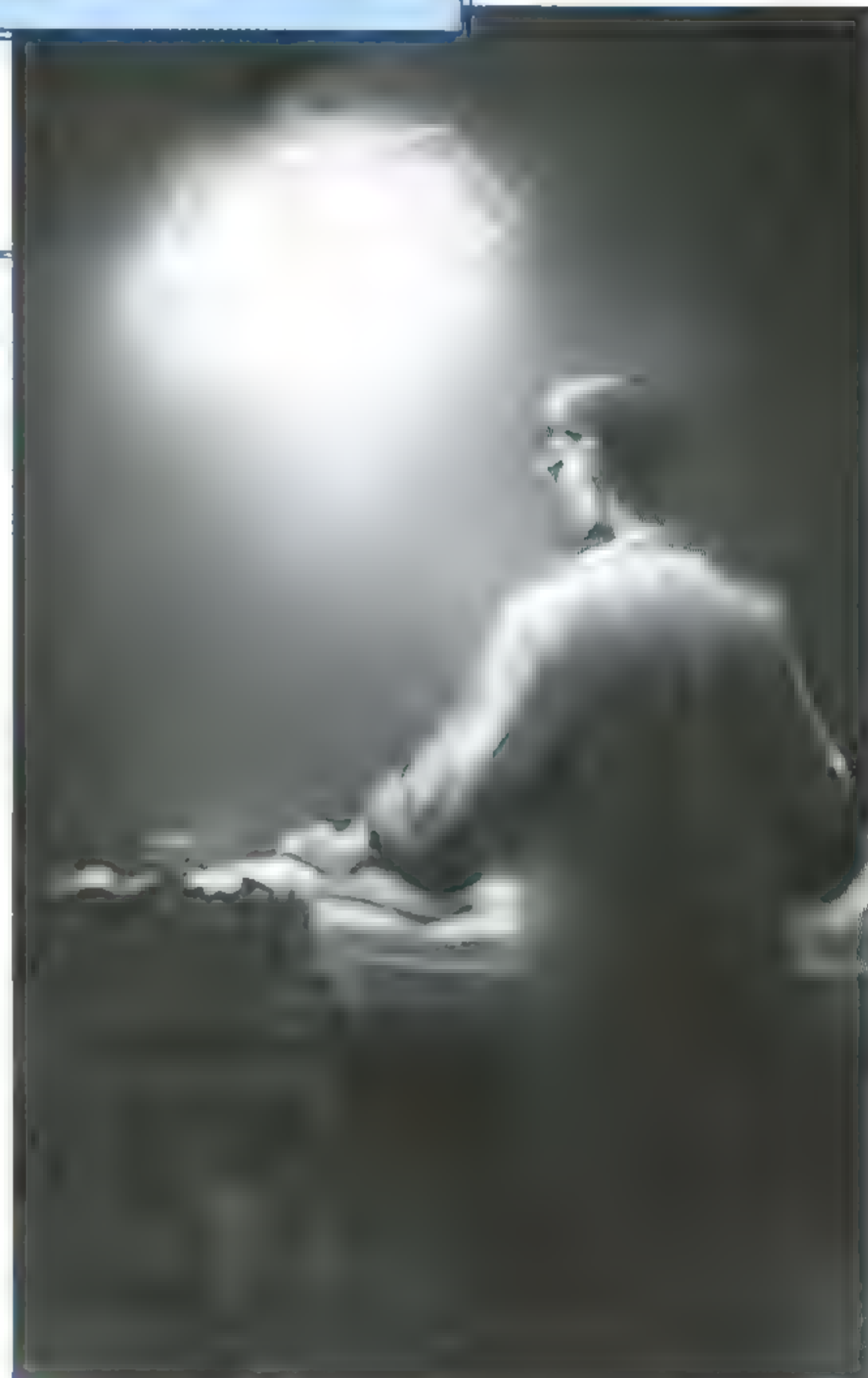
ラヴクラフトの『死体蘇生者ハーバート・ウェスト』の主人公。ミスカトニック大学に通う医学生で、死の本質と人為的に死を克服する可能性についての説を唱えたことで有名であった。

やがて、生命機械論にもとづいた死体の蘇生実験に取りつかれ、墓場から死体を盗みだし、あるいは疫病で死んだ患者の遺体を実験台にするなど、学究の道を踏み外した行為はエスカレートしていく。

さらに、第1次世界大戦で従軍し、その戦場においてさえも実験を続けていたが、最後には自身が甦らせたグロテスクなゾンビの群れによって八つ裂きにされた。

「生命は本質的に機械的な性質を持つ」と考えたハーバート・ウェスト。結局は、実験台にした死者たちによって命を落とす。

ムニョス博士
Munoz

登場する主な作品
冷気

ラヴクラフトの『冷気』に登場する、ニューヨークのとあるアパートに住むスペイン人老医師。体を温めてはいけない奇病にかかったという理由で、その住居を強制的に冷却していた。

博士は才能豊かな医者でありながら、中世の魔術的な処方にも通じ、さまざまな古書や稀覯書を所有していた。

実は、博士は奇病を患っていたのではなく、18年前に死んだ肉体を蘇生させ、器官を保持するための人工保存を続けていたのだが、冷却機械の故障によって、身体組織を保つことができず、おぞましい最期を迎えた。

冷却装置の力を借りて、死後18年間も自身の肉体と器官を保持しつづけていたムニョス博士。

次元と時空の門を超えた旅人

ランドルフ・カーター
Randolph Carter

数々の作品に登場するラヴクラフトの「分身」

登場する主な作品
ランドルフ・カーターの陳述／名状しがたいもの／銀の鍵／銀の鍵の門を越えて／未知なるカダスを夢に求めて／チャールズ・デクスター・ウォード事件

ラヴクラフト作品の中には、自伝的な要素を持つ作品がいくつかある。その例にあげられるのが、オカルト研究家ランドルフ・カーターが登場する作品群だ。そして、このカーターはラヴクラフトの分身的な存在でもあるのだ。

彼は、その名前が冠された名作『ランドルフ・カーターの陳述』で、友人にして、禁断の知識に通暁した神秘家のハーリイ・ウォーランの探索を目撃する語り手として初めて登場する。

この作品は、ラヴクラフトが実際に見た夢をもとに書かれており、ウォーランは実際の友人をモデルにしたとされている。続く『名状しがたいもの』では、カーターが作家としての活動を始めたことが明らかにされ、『銀の鍵』以降の作品においては、〈夢の国〉へ向かう旅を始める。

時空と次元を超え〈夢の国〉をさまよう冒険者

カーターの祖先、初代ランドルフ・カーターは、十字軍に従軍し、捕虜になった際にアラビアの魔術を学んだエリザベス朝の魔術師であり、家には〈夢の国〉へ導く力を持つ〈銀の鍵〉が伝わっていた。

カーターは9歳のとき、その鍵を得て「夢見る力」を得るが、30歳で人生に疲れ、「夢見る力」を失ってしまう。彼は力の喪失がもたらした空虚を埋めるため、フランス外国人部隊の一員として第1次世界大戦に従軍、また作家として活動し、オカルトの研究も進めたが、心は満たされぬまま、50歳を迎える。

そんなある夜、カーターは祖父の夢に導かれ、〈銀の鍵〉を再び見出して、地上から〈夢の国〉へと去った。これが『銀の鍵』の内容である。

そして、『銀の鍵の門を越えて』は、『銀の鍵』の続きとして、エドガー・ホフマン・プライスが書き、ラヴクラフトとの合作として発表したものだが、その中では、カーターは「次元の窮極の門」を超え、異形の魔物へと変貌する。

一方、ラヴクラフト自身が習作として、密かに書いていた『未知なるカダスを夢に求めて』では、「夢見る力」を取り戻したカーターは、〈夢の国〉を縦断する冒険の旅に出るのだった。

〈銀の鍵〉を使って次元の門をくぐり、〈夢の国〉へ旅立ったランドルフ・カーター。ラヴクラフトの分身的な面も持つ。

銀の鍵を死守した男、エドマンド

エドマンド・カーターは、17世紀を生きたランドルフの先祖である。セイレムで妖術師の嫌疑をかけられ、絞首刑の判決を受けるものの、かろうじて逃れ、1692年にアーカムへ戻った。そして彼は、グロテスクな彫刻が施された古の驚異とでもいうべき樫材の箱に、先祖から継承された〈銀の鍵〉を収め、大きな屋根裏部屋に隠したのだった。

特別寄稿

日本を侵蝕するクトゥルー神話

～怪獣と妖怪と邪神の謎に迫る～

東　雅夫（アンソロジスト／クトゥルー文学史家）

「アンバランス・ゾーン」の妖しい魅力に惹かれて

　最初に読んだラヴクラフト作品は、創元推理文庫版『怪奇小説傑作集3』（一九六九）に収録されていた「ダニッチの怪」（同書での訳題は「ダンウィッチの怪」）だったと記憶する。一九六九年の冬、小学校六年当時のことである。

　その際の正直な第一印象は、おお、コズミック・ホラーよ！　でも、嗚呼ネクロノミコン!!　でもなく……あっ、これはウルトラQじゃないか！　だった。

　「ウルトラQ」とは、一九六六年一月から半年間、TBS系列で放映された円谷プロダクション制作の空想特撮ドラマで、「ウルトラマン」に代表されるウルトラ・シリーズの原点となり、六〇年代後半の日本を席巻した第一次怪獣ブームを招来した作品であることは、御存知の方も多いだろう。作中に登場するガラモン、カネゴン、ナメゴン、ケムール人といった人気キャラクターの名前は、怪獣や特撮に興味がない人でも、どこかで耳にしたことがあるに違いない。

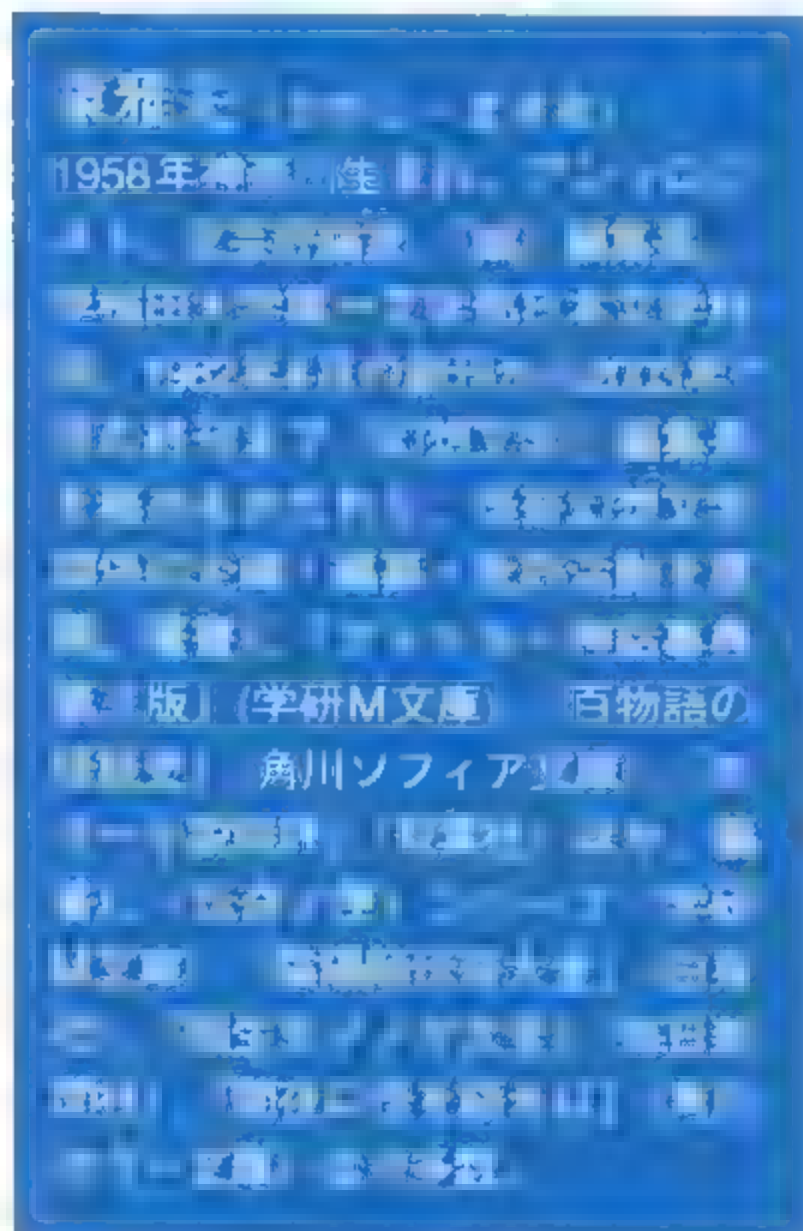
「そうです。ここは、すべてのバランスが崩れた、恐るべき世界なのです。これから三十分、あなたの目は、あなたの身体を離れて、この不思議な時間の中に入っていくのです……」

　無気味に蠢動するテーマ音楽とともに流れる、石坂浩二の印象的なオープニング・ナレーションを、懐かしく想起される向きもあろう。ちなみに、いま右の引用を書き起こしていて更めて感じ入ったのだが、これはラヴクラフト的なコズミック・ホラーの世界とも、どことなく通い合うところがある一文ではなかろうか　とりわけ、身体を離れて不思議な時間の中に入っていく……というあたり

　そもそも私が怪奇幻想小説の世界へ参入するひとつのきっかけになったのが、小学校低学年の頃に接して激甚な衝撃をうけた「ウルトラQ」の作品世界――劇中で用いられるキイワードに従えば「アンバランス・ゾーン」が醸し出す妖しい魅力なのであった

　町の書店の児童書コーナーから大人が読む文庫本のコーナーへ遠征して、初めて手に取った本が、カフカ『変身』の岩波文庫版だったのも、「ウルトラQ」に同タイトルの作品（第二十二話「変身」）あればこそ、であったし、それから程なくして創元推理文庫の棚で『怪奇小説傑作集』全五巻と邂逅したのも、書物の世界にアンバランス・ゾーンを希求した必然の成り行きだったといってよい。

独特なムードを湛えた『怪奇小説傑作集』初刊当時のカバー装画

1958年[illegible]生まれ。[illegible]（学研M文庫）[illegible]百物語の[illegible]角川ソフィア文庫[illegible]

「ウルトラQ」とクトゥルー神話に見る共通点と類似点

さるにても「ダニッチの怪」である

物語前半の陰鬱でオカルティックな怪奇ムードから一転、飢えた透明怪物が餌を求めて村を荒らしまわるというスペクタクルな展開は、まさに「ウルトラQ」的な怪獣映画を彷彿せしめる。わけても私を震撼させたのは、不可視の巨大怪物が農場に襲来するありさまを活写した、次のような臨場感満点の描写であった

「みんながこっちでその電話をじっと聞いていると、むこうの電話口からは、ビショップ家のものがみんな息をはずませているらしいようすがよく聞こえた。すると、だしぬけにもう一度サリーの悲鳴が聞こえたかと思ううちに、家畜置場の頑丈な杭垣が、たったいまおしつぶされたが、つぶしたやつの姿はまるっきり見えないと電話口のむこうからいってきた。そのうちに、こっちで聞いているみんなの耳に、チョンシーやセスじいさんの悲鳴も聞きとれたが、サリーはもうきゃあきゃあ泣くような声で、なんかすごく重たいものが家にぶちあたった――いいや、稲妻でもなんでもなく、ただ表のほうから重たいものがぶちあたり、くり返しくり返し、自分のからだをおしあててこようとしているが、それでも表がわの窓からはなに一つ見えないのだそうだ。そうしているうちに……そのうちに……」（大西尹明訳）

文明の利器のシンボルともいうべき電信機器越しに、この世ならぬ怪異の跳梁ぶりをなまなましく伝えるという趣向は、初期短編「ランドルフ・カーターの陳述」（一九一九）から晩年の大作「狂気の山脈にて」（一九三一）にいたるまで、ラヴクラフトがことのほか好んだ手法だが、それはまた「ウルトラQ」や、その源流となった東宝怪獣映画でも（たとえば「ゴジラの逆襲」におけるテレビ中継班遭難シーンや、「空の大怪獣 ラドン」におけるパイロットと指揮官のやりとり等）なじみ深いものだ

さらにいえば、「まるで象がずしんずしんと歩いてるみてえな、なんか大きな音が、自分んちのほうへむかってくるのが聞こえてきたそうだ」（大西尹明訳）とも描写される「ダニッチの怪」の怪物接近シーン自体が、「ゴジラ」第一作における有名なゴジラ初登場のシーン（嵐のなか大戸島に上陸したゴジラによって民家が蹂躙される）を、見事に先触れしていたのであった。

今にして思えば、「ウルトラQ」とラヴクラフト／クトゥルー神話作品との間には、当時気づいていた以上に多くの共通点・類似点を数えあげることができそうである

オーソドックスな半魚人スタイルに造形された海底原人ラゴン（第二十話）と〈深きものども〉、文明社会のエネルギーを吸い取って無限増殖する風船怪獣バルンガ（第十一話）とウボ＝サスラやアザトース(!?)、あるいは触手さながらの吸血根を蠢かせて人間を襲う古代植物ジュラン（第四話）といったもっぱら視覚的な連想もさることながら、クトゥルー崇拝の一大拠点でもある南太平洋の群島を舞台に、島の守護神たる大蛸スダールの猛威を描く第二十三話「南海の怒り」や、猛吹雪のなか南極探検隊員に迫る巨大なペンギン怪獣の恐怖を描いた第五話「ペギラが来た！」、超古代文明の遺品である影像か、

DVD版『ウルトラQ』（パナソニック）より。ケムール人、ラゴン登場作他を収める5巻と、異次元テーマの異色作を集めた7巻

「ウルトラQ」のガラモンを彷彿させるダニッチの怪物（若菜等・画）。金の星社版『悪魔のおとし子』より

破滅の使者たる貝獣を召喚する第二十四話「ゴーガの像」、二〇二〇年の未来から、地球人の若い肉体を奪いにやってくるケムール人の暗躍を描く第十九話「２０２０年の挑戦」あたりの設定と着想、ストーリーは、それぞれ「クトゥルーの呼び声」「狂気の山脈にて」「闇をさまようもの」（カール・ジャコビの「水槽」でも可）「時間からの影」（「闇に囁くもの」でも可!?）といった代表的神話作品のそれと、奇妙なほどの符合を示しているのである

また、第十二話「鳥を見た」や第二十六話「２０６便消滅す」、再放映で初めて日の目を見た異色作「あけてくれ！」など、異次元に触れることの戦慄と恍惚をリアルに描いた一連の作品が、ラヴクラフトの提唱するコズミック・ホラーのありようときわめて近い視点を有することも、忘れずに指摘しておきたい。

なお、「ウルトラQ」「ウルトラマン」から三十年後に制作された「ウルトラマンティガ」（一九九六～九七）の最終三話では、先兵怪獣ゾイガーの大群を率いた邪神ガタノゾーアが海底遺跡から復活、浮上した超古代都市を背景に、光の巨人と幻妖バトルを繰りひろげる巡り合わせとなったことも申し添えておこう

天才エディター大伴昌司が結ぶ ふたつのアンバランス・ゾーン

実は、「ウルトラQ」とラヴクラフト／クトゥルー神話との間には、ささやかな、けれどたいそう興味深くもある接点が存在するのだ

「ウルトラQ」という番組は、当初「UNBALANCE（アンバランス）」という仮タイトルのもと、当時日本でも放映されて注目をあつめた「ミステリーゾーン」や「アウターリミッツ」などの海外SFドラマを意識して、企画が進められていたとされる。

そのため当時、文壇の新興勢力となりつつあった日本SF作家クラブのメンバーも企画に参画し、検討用脚本の執筆などに協力しており、その中には半村良、光瀬龍、福島正実、大伴昌司の名前が見いだされる

そしてこの大伴昌司（一九三六～七三）こそ、「ウルトラQ」とクトゥルー世界との幽き接点と目される人物なのである。

今日、大伴といえば、SF特撮映画の紹介者、怪獣図鑑本や「週刊少年マガジン」巻頭グラビアなどの企画編集者・ライターとして、オタク文化の黎明期に巨大な足跡を遺し夭折した天才エディターといったイメージが一般的であろう。

しかしながら、SFや特撮怪獣物の分野で才能を発揮する直前の一時期、大伴は慶應義塾大学の推理小説同好会以来の盟友で、共にSRの会（関西に拠点を置くミステリー愛好団体の老舗）同人でもあった紀田順一郎らと日本初の恐怖文学専門誌「THE　HORROR」を旗揚げしているのだ　作家・評論家として現在も幅広い分野で活躍する紀田が、当時を回顧した談話から引用する

「創刊当初の同人は、私と大伴くんと現在シナリオ・ライターとして有名な桂千穂の三人でした。その後SF関係の人たちなんかも支持してくれて、同年四月に出した第二号の会員欄を見ると、光瀬龍や宇野利泰、荒俣宏くんの名前もあったりして時代を感じさせますね。

この雑誌は英米恐怖短編の紹介を中心に、四号、一年半続いて休刊になりました。その間平井先生には『怪談つれづれ草』という連載エッセイや、デ・ラ・メア、ダーレスの詩の翻訳などをいただきま

谷中全生庵の百物語の会にて。大伴昌司氏（中央奥）と紀田順一郎氏（中央手前）

した。本当はもっと続けたかったんですが、「SFの手帖」という増刊号を出した頃から、大伴くんがSFの方に興味を示し始め、めざす方向がちょっと違ってきた。それに私の方も会社を辞めて独立したので、今までみたいに遊び半分じゃできなくなって、それでお互いに少し疎遠になっちゃったんですね」(「幻想文学」第四号掲載のインタビュー「恐怖文学出版夜話」より)

「THE HORROR」の創刊は一九六四年一月頃だったというが、円谷プロダクションで「UNBALANCE」の企画が具体的に動き出すのは、同じ一九六四年の秋頃からであったらしく、はからずも右の紀田の言葉を裏付ける形となっている。

1964年創刊の「THE HORROR」と、大伴氏がSFへ転身を図るきっかけとなった増刊「SFの手帖」の表紙

日本におけるクトゥルー神話布教の原動力となった人々

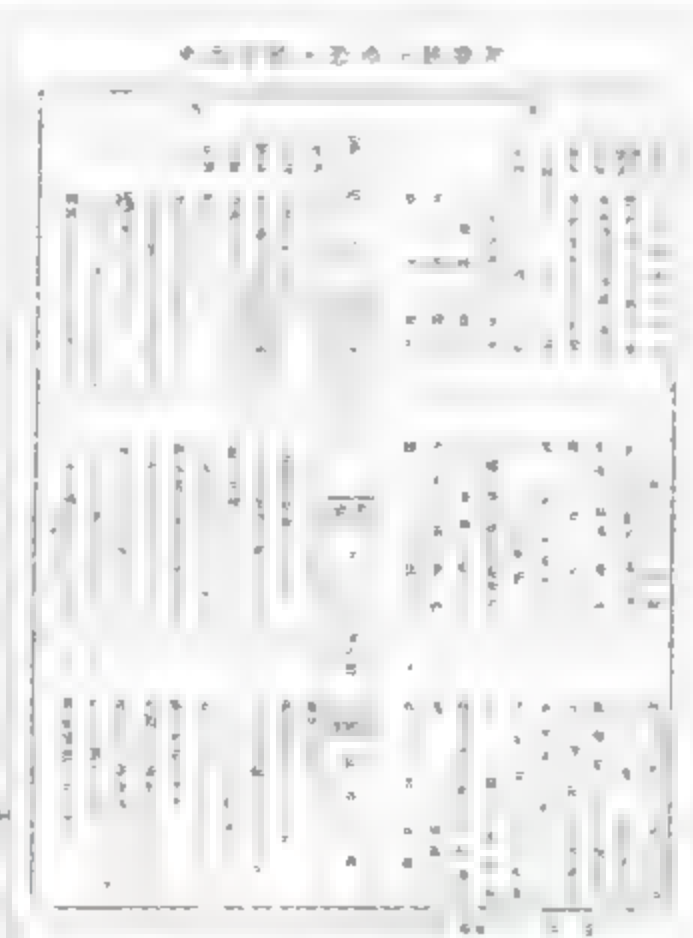
ちなみに談話中で言及されている「平井先生」とは、英米怪奇小説翻訳の名匠として不朽の業績を遺した平井呈一(一九〇二～七六)を指す。平井はまた、ラヴクラフト作品の邦訳として最初期の一編「異次元の人」(=「アウトサイダー」)を「宝石」一九五七年八月号に発表したり、「壁のなかの鼠」「インスマスを覆う影」「ダニッチの怪」より成る本邦初のラヴクラフト作品集(併録されたアンブローズ・ビアスも、クトゥルー神話に影響を与えた作家である)ともいうべき東京創元社版『世界恐怖小説全集』第五巻『怪物』(一九五八)の編纂解説を担当するなど、戦後日本におけるラヴクラフト＝クトゥルー神話の普及紹介に大きく寄与した人物であることは、御存知の方も多いだろう。

しかしながら、「THE HORROR」とラヴクラフトとの関わりは、平井呈一という老大家を顧問格に擁した点のみにあるのではない。

創刊号の巻頭を飾ったのは、紀田順一郎訳によるラヴクラフトの散文詩「廃墟の記憶」であり、巻末資料として「アーカムハウス一九六三年度の在庫リスト」が掲げられているのも、微笑ましいかぎりだ。

「幻想と怪奇の時代」
紀田順一郎著(松籟社)

第二号には「『インスマウスの影』の創作メモより」と題されたマニアックな資料が訳載されており、終刊号となった第四号掲載の「東西怪談・恐怖小説番附」では、西の横綱『ドラキュラ』(ブラム・ストーカー著)、大関『ジョン・サイレンス』(アルジャノン・ブラックウッド著)に次ぐ関脇の地位に、ラヴクラフトの『チャールズ・デクスター・ウォード事件』が抜擢されているのであった。

まさにラヴクラフトとアーカム・スクールの作品が、同人たちの精神的支柱として位置づけられているかのようではないか。

「THE HORROR」No.4に掲載された「東西怪談・恐怖小説番附」。「前頭」にはダーレス「ズールーの足跡」(「永劫の探究」)も!!

そうした傾倒ぶりの一端を窺わせるエピソードを、紀田順一郎の回想記『幻想と怪奇の時代』(二〇〇七)から紹介しておこう。

「アーカムハウスにカタログを注文したところ、数ヶ月して小型のパンフが送られてきたのはうれしかった。そのころ同社はオーガスト・ダーレスが健在だったので、私たちは

「この手書きの抹消もダレス本人によるものに相違ない」などと、大いに感激したものである　内容も草創期のラヴクラフト『アウトサイダー』から、ホジスンの『辺境の家』やブラックウッドの『人形』などが全部リストアップされているという、目もくらむようなしろもので、大伴などはすっかり興奮し、「全部買おう　おれが全額負担する！」などといい出す始末」

海彼の怪奇小説シーンと直に接しているという同時代的興奮が如実に伝わってこよう。これに続く次の一節も、涙なくしては読めない。

「『ラヴクラフト書簡集』の第一巻が入ったときなど、六千円という代金が月給一万二千円の身にはどうしても工面できない　丸善の番頭さんに「来月必ず取りにきますから」と頼み込んで、ようやく保管してもらうことにしたが、翌月もまた払えない。その本が注文棚の正面に一ヶ月、二ヶ月と置かれて、だんだん汚れてくるのがはっきり見える　番頭さんは私の顔を見ると「キャンセルにしてもいいですよ。うちは売れますから」といってくれるのだが、裏表紙のラヴクラフトの照影（怪奇小説の鬼となって窮死）を見ると、罰があたるような気がして、とうとう会社に給料の前借りをして引き取った」

60年代当時は非常に高価だったアーカム版『ラヴクラフト書簡集』

ラヴクラフト　クトゥルー神話が、現在の日本で目を瞠るばかりの普及浸透を果たした陰には、こうした先人たちによる刻苦勉励の累積があったことを忘れてはなるまい。

先人たちといえば、先の談話中に名前の挙げられていた宇野利奈と荒俣宏も、ラヴクラフトの翻訳紹介に貢献大であった

宇野は早くも「宝石」一九五五年十一月号に「多村雄二」の別名義で「エーリッヒ・ツァンの音楽」本邦初訳を発表し、後に創元推理文庫版『ラヴクラフト傑作集2』（一九七六）の編纂翻訳を担当している。

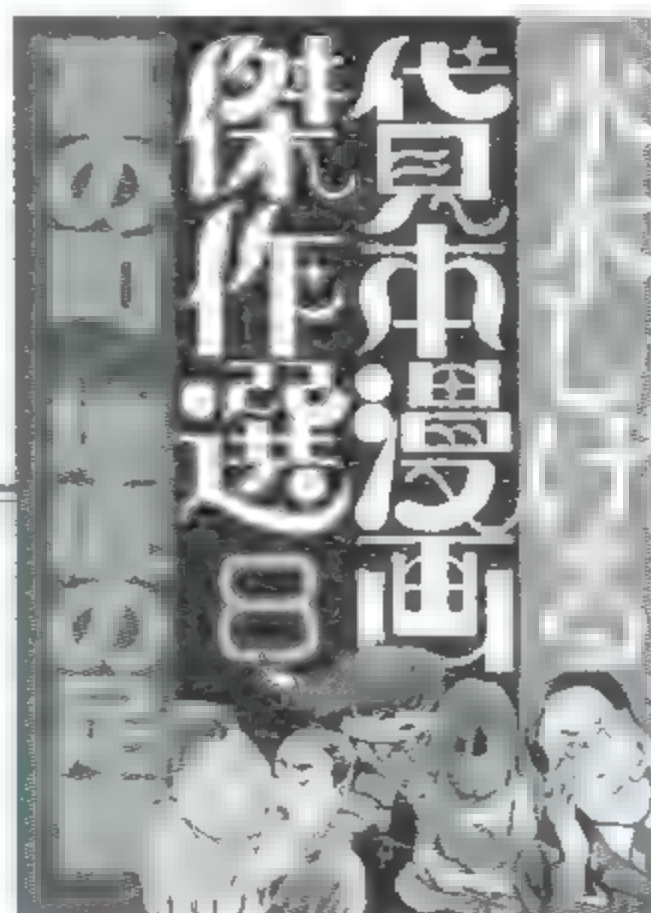
創土社版『ラヴクラフト全集』（一九七五）や『ク・リトル・リトル神話集』（一九七六）をはじめとする荒俣宏の業績については、更めて贅言をついやすまでもあるまい。クトゥルー神話関連の翻訳を一巻に集成した角川ホラー文庫版『ラヴクラフト恐怖の宇宙史』（一九九三）の巻頭には、荒俣が恩師と慕う両先達――平井呈一訳「アウトサイダー」と紀田順一郎訳「廃墟の記憶」が復刻収録されている

水木しげるも描いたクトゥルー神話の世界

ここでいったん、冒頭に記した私自身の「ダニッチの怪」初体験に話を戻すことをお許しいただきたい　あっ、これはウルトラQじゃないか！と思ったと記したけれども、実はそれと前後してもうひとつ、しきりに連想された別の作品があったのだ。

水木しげるの漫画「朝鮮魔法」である。

一九六八年の二月から三月にかけて、前・中・後編と三回にわたり「週刊少年マガジン」誌上に掲載されたこの作品は、作者の代表作〈ゲゲゲの鬼太郎〉シリーズの一編で、鬼太郎が仲間の妖怪たちと朝鮮半島に渡り、村人を苦しめる謎の妖怪「アリランさま」と対決するという異色作であった　「アリランの歌」を合唱しながら襲来しては村を破壊する巨大な透明妖怪のインパクトは強烈無比で、中期の鬼太郎作品の中でも、私にとって忘れがたい一編となっている。

もっとも、「ダニッチの怪」を読んだ直後は、たんに両者の類似を面白く感じただけなのだが、後に貸本漫画時代の水木が『地底の足音』（一九六三）という中編を手がけてい

「地底の足音」が収録されている『水木しげる貸本漫画傑作選8』（朝日ソノラマ）

特別寄稿

日本を侵蝕するクトゥルー神話

～怪獣と妖怪と邪神の謎に迫る～

たことを知るに及び、それが決して偶然の一致ではなかったことに、更めて感嘆これ久しうしたものだ。

　熱心な水木漫画のファンならすでに周知の事実でもあろうが、『地底の足音』は「ダニッチの怪」の設定とストーリーを、日本の風土に巧みに移し替えて漫画化した、事実上の翻案作品である。

　ダニッチの村は、水木自身の故郷でもある鳥取県の辺境「八つ目村」に、ミスカトニック大学は「鳥取大学」に、ウィルバー・ウェイトリイは「足立家の怪童蛇助」に、アブドゥル・アルハザードの『ネクロノミコン』は「ペルシャの狂人アトバラナ（別の箇所ではガラパゴロスとも）」の『死霊回帰』に、そしてヨグ＝ソトースが、なんと「ヨーグルト」に……といった具合に、なかなかに味わい深いジャパネスクな土俗風味のアレンジが施されている。

　その一方で、「妖怪とか幽霊とかいうものをおそれる根拠は、あることは分っているがとらえることのできない〝異次元〟の恐怖なんだ」「地上には長い間〈古きもの〉と呼ばれる生物が支配していた。その生物は人間の手でふれることもできない異次元の生物であった」といった具合に、コズミック・ホラーや〈旧支配者〉など、ラヴクラフトとクトゥルー神話の核心をなす概念については、きっちり原典を踏まえた扱い方がなされているあたり、さすがは水木大人というほかあるまい。

　ところで、いま私の手元には、先述の水木しげる「朝鮮魔法」中編が掲載された「週刊少年マガジン」一九六八年三月三日号が、たまたま残されている。

　六〇年代後半の「マガジン」は、毎号欠かさず購読し架蔵していたのだが、何度かの転居を経るうち散逸し、現在はほんのひと山を残すのみとなってしまった。それだけ愛着のある号ということになろう。

「週刊少年マガジン」1968年3月3日号（講談社）

　実はこの号の巻頭グラビア「パノラマ図解劇場 よみがえった死者 ミイラ男の怪奇」の構成を担当しているのが、余人ならぬ大伴昌司なのだった。

　ツタンカーメンの呪いとユニバーサルのミイラ男映画をおもな素材に、石原豪人、南村喬之、桑名起代至の三画家が腕を競う充実の特集で、「世界のミイラ怪奇談」というコラム・コーナーには、「怪奇作家をよびよせたミイラ」と題して、怪奇作家ビアス失踪の謎を、メキシコ奥地の洞窟に眠る古代インディオのミイラに関連づけるという嬉しくなるような記事まで載っている。まさにクトゥルー神話まであと一歩、というノリではないか（大伴は実際にラヴクラフト作品の絵物語化も手がけていることを付言しておく。おりしも「THE HORROR」の編集作業と「UNBALANCE」の企画協力が同時進行していた最中に発表された「怪物のすむ町」（＝「インスマスを覆う影」）／「ぼくら」一九六四年九月号掲載）と、毎日中学生新聞」一九六八年八月四日～十一日号に連載された「インスマウスの影」である）。

　鬼太郎とミイラ男が対峙する表紙をめくれば、見開きカラー口絵には、当時撮影中だった大映映画「妖怪百物語」の妖怪たちがズラリ勢ぞろいし、桑田次郎描く漫画版「ウルトラセブン」（「ウルトラQ」「ウルトラマン」に続くウルトラ・シリーズ第三作）では、軍艦ロボット怪獣アイアンロックスが海中から浮上し、地上への侵攻を開始する……。

　まさに「怪獣」と「妖怪」が、「怪奇SF」と「冒険奇談」が、いかがわしくも交錯するカオスの真只中で、日本における本格的なラヴクラフト＝クトゥルー神話の布教＝受容史がひそやかに幕を開けていたのだということを、古ぼけた一冊の漫画雑誌は教えてくれるのである。

【付記】
本稿に先立つ戦前から一九五〇年代の日本におけるラヴクラフト受容史については、ブックス・エソテリカ別冊『クトゥルー神話の本』（学研）所収の拙論に記したので、併せてお読みいただけたら幸いである。

クトゥルー神話資料館

Library of Cthulhu Mythos

H・P・ラヴクラフトが創始し、
以後さまざまに受け継がれ、
広げられてきたクトゥルー神話。
今なお拡大を続ける神話大系の世界へ
旅立つ人に贈る作品ガイド&用語集。

クトゥルー神話大系作品100選
～邪神たちの宴～

100 Works of Cthulhu Mythos

登場する
邪神が一目で
わかる!

クトゥルー神話――H・P・ラヴクラフトが創始し、そのあまりにも魅力的で奥深い世界観は、多くの作家たちを虜にし、さまざまな神話作品が生みだされていった。そして、創造主ラヴクラフトの死後70年を経た現在も、発表される作品はとどまるところを知らない。

そんな膨大な数を誇るクトゥルー神話大系の中から、代表的、あるいは個性的な100の作品名を一挙に紹介。邪神からあたるもよし、タイトルから選ぶもよし、ぜひ一度は作品を手にとって、さまざまに繰り広げられる狂気と恐怖の世界を味わってみてほしい。

作家別代表作品名68

H・P・ラヴクラフト

クトゥルーの呼び声
クトゥルー
〈深きものども〉

インスマスを覆う影
クトゥルー
ダゴン
〈深きものども〉
ショゴス

狂気の山脈にて
ダゴン
〈深きものども〉
〈古のもの〉
ショゴス
〈ユゴス星の菌類生物〉

ダゴン
ダゴン

未知なるカダスを夢に求めて
アザトース
ナイアルラトホテップ
食屍鬼

闇をさまようもの
アザトース
ナイアルラトホテップ

魔女の家の夢
アザトース
ナイアルラトホテップ

ナイアルラトホテップ
ナイアルラトホテップ

アザトホース
アザトース

ダニッチの怪
ヨグ＝ソトース

壁のなかの鼠
ナイアルラトホテップ

闇に囁くもの
ハスター
イグ
〈ユゴス星の菌類生物〉

時間からの影
ツァトゥグア
〈古のもの〉
〈大いなる種族〉

戸口にあらわれたもの
ショゴス

ピックマンのモデル
食屍鬼

H・P・ラヴクラフト&オーガスト・ダーレス

閉ざされた部屋
〈深きものども〉

暗黒の儀式
ヨグ＝ソトース
ツァトゥグア

異次元の影
〈大いなる種族〉

H・P・ラヴクラフト&E・ホフマン・プライス

銀の鍵の門を越えて
ヨグ＝ソトース
〈ユゴス星の菌類生物〉

ゼリア・ビショップ

墳丘の怪
クトゥルー
ダゴン
〈深きものども〉
ツァトゥクア
イク
シュブ＝ニグラス

イグの呪い
イク

ヘイゼル・ヒールド

永劫より
イク
シュブ＝ニグラス

博物館の恐怖
ラーン＝テゴス

オーガスト・ダーレス

永劫の探究
クトゥルー
ダゴン
〈深きものども〉
ハスター
バイアクヘー

ルルイエの印
〈深きものども〉

丘の夜鷹
ヨグ＝ソトース

闇に棲みつくもの
ナイアルラトホテップ
クトゥグア

ハスターの帰還
ハスター
クトゥルー
〈旧神〉

イタカ
ハスター
イタカ

風に乗りて歩むもの
イタカ

戸口の彼方へ
イタカ

オーガスト・ダーレス&マーク・スコラー

潜伏するもの
ロイガー
ツァール

ロバート・ブロック

アーカム計画
クトゥルー
ダゴン
〈深きものども〉
ナイアルラトホテップ

尖塔の影
ナイアルラトホテップ

無貌の神
ナイアルラトホテップ

暗黒のファラオの神殿
ナイアルラトホテップ

奇形
イグ

哄笑する食屍鬼
食屍鬼

無人の家で発見された手記
ショゴス

星から訪れたもの
謎の宇宙吸血生物

フランク・ベルナップ・ロング

恐怖の山
チャウグナル・ファウグン

ティンダロスの猟犬
ティンダロスの猟犬
〈ドール〉

アンブローズ・ビアス

カルコサの住民
ハスター

羊飼いのハイータ
ハスター

ヘンリイ・カットナー

ダゴンの末裔
ダゴン

ヒュドラ
ヒュドラ
アザトース

クラーク・アシュトン・スミス

サタムプラ・ゼイロスの物語
ツァトゥグア

七つの呪い
ツァトゥグア
アブホース

魔道士エイボン
ツァトゥグア

ウボ＝サスラ
ウボ＝サスラ

アタマウスの遺言
ツァトゥグア

名もなき末裔
食屍鬼

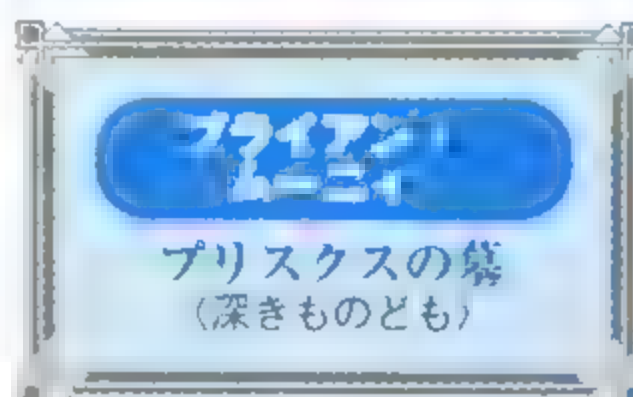
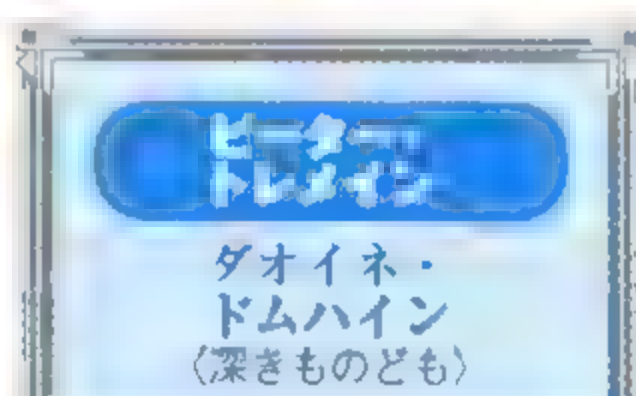
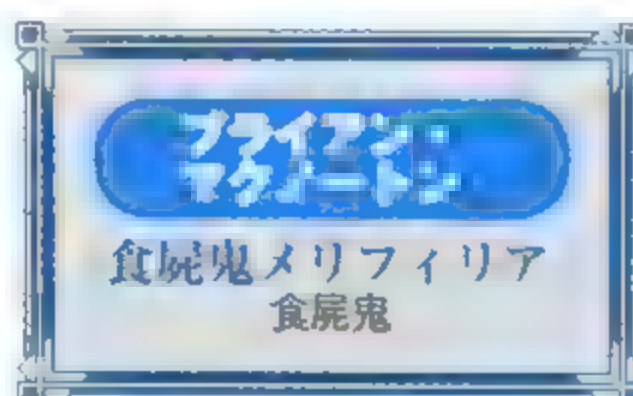
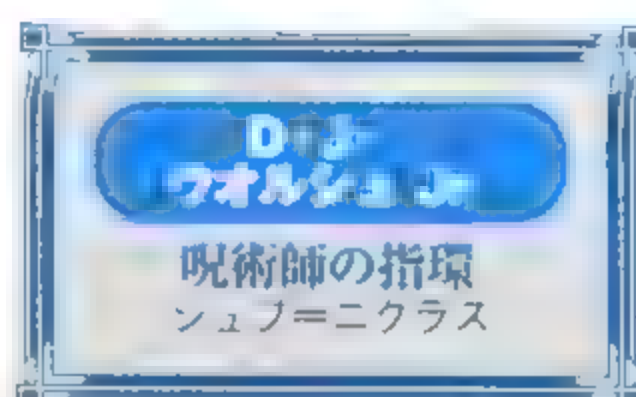
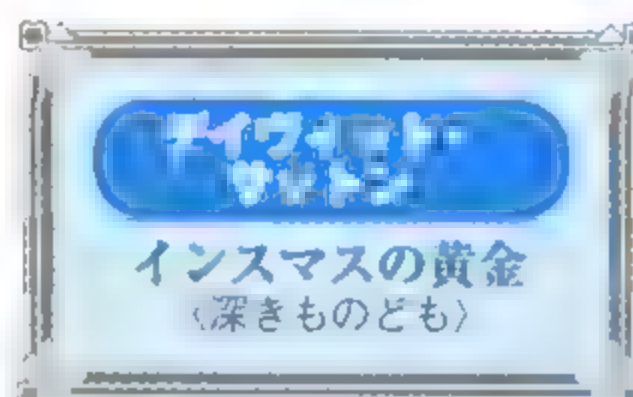
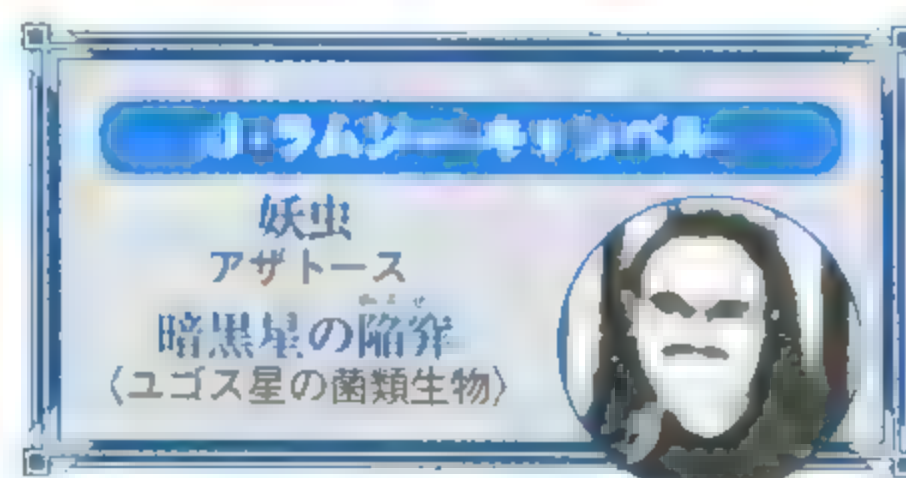
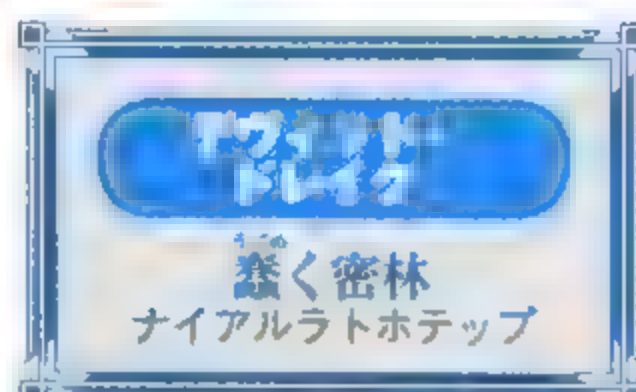
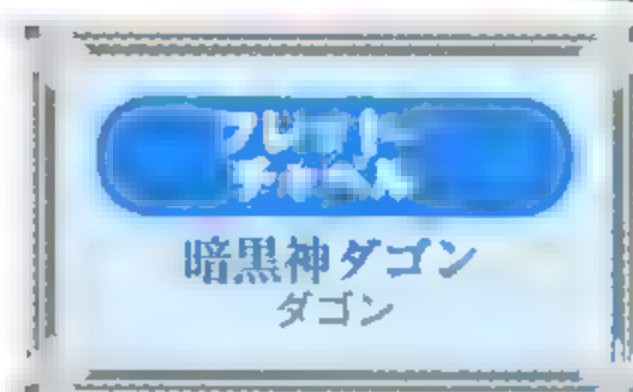
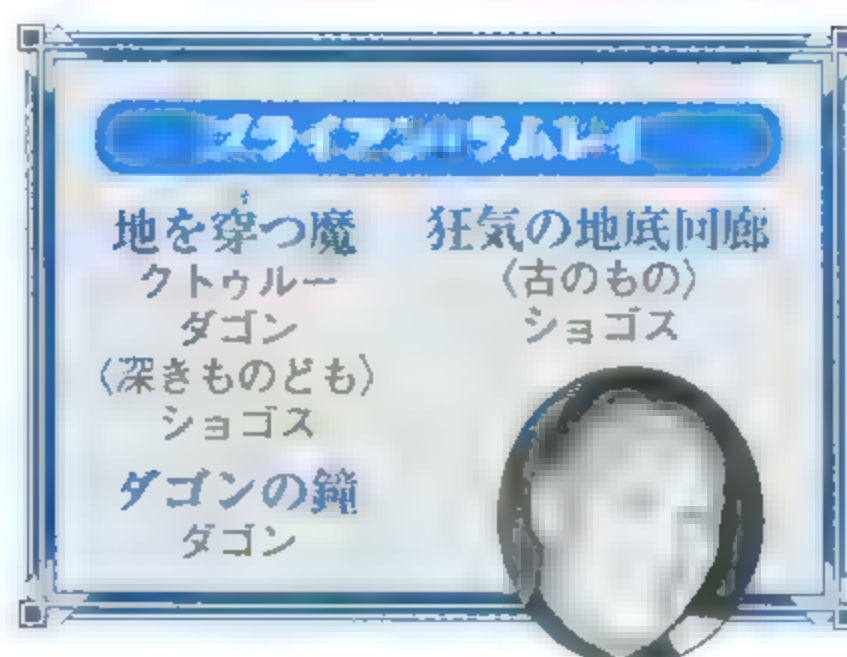
ロバート・B・ジョンソン

遙かな地底で
食屍鬼

ヒュー・B・ケイヴ

臨終の看護
ハスター
ナイアルラトホテップ

本書に登場するその他の作品名

作品名	作家名
魔犬	H・P・ラヴクラフト
饗宴	H・P・ラヴクラフト
『ネクロノミコン』の歴史	H・P・ラヴクラフト
蕃神	H・P・ラヴクラフト
彼方よりの挑戦	H・P・ラヴクラフト
無名都市	H・P・ラヴクラフト
チャールズ・デクスター・ウォード事件	H・P・ラヴクラフト
ピックマンのモデル	H・P・ラヴクラフト
エーリッヒ・ツァンの音楽	H・P・ラヴクラフト
死体蘇生者ハーバート・ウェスト	H・P・ラヴクラフト
冷気	H・P・ラヴクラフト
破風の窓	H・P・ラヴクラフト&オーガスト・ダーレス
生きながらえるもの	H・P・ラヴクラフト&オーガスト・ダーレス
アルハザードのランプ	H・P・ラヴクラフト&オーガスト・ダーレス
魔女の谷	H・P・ラヴクラフト&オーガスト・ダーレス
恐怖の巣食う橋	H・P・ラヴクラフト&オーガスト・ダーレス
セベクの秘密	ロバート・ブロック
彼方からあらわれたもの	オーガスト・ダーレス
湖底の恐怖	オーガスト・ダーレス&マーク・スコラー
モスケンの大渦巻き	オーガスト・ダーレス&マーク・スコラー
盗まれた眼	ブライアン・ラムレイ
縛り首の木	ブライアン・ラムレイ
妖蛆の王	ブライアン・ラムレイ
ド・マリニーの掛け時計	ブライアン・ラムレイ
黒の召喚者	ブライアン・ラムレイ
夜の末裔	ロバート・アーヴィン・ハワード
黒い石	ロバート・アーヴィン・ハワード
アロンソ・タイパーの日記	ウィリアム・ラムリー
アーカムそして星の世界へ	フリッツ・ライバー
知識を守るもの	リチャード・F・シーライト
魔道書ネクロノミコン	コリン・ウイルスン 他
ネクロノミコン　アルハザードの放浪	ドナルド・タイスン

クトゥルー神話大系入門ガイド

Guide for Cthulhu Mythos

小説編 *Novels*

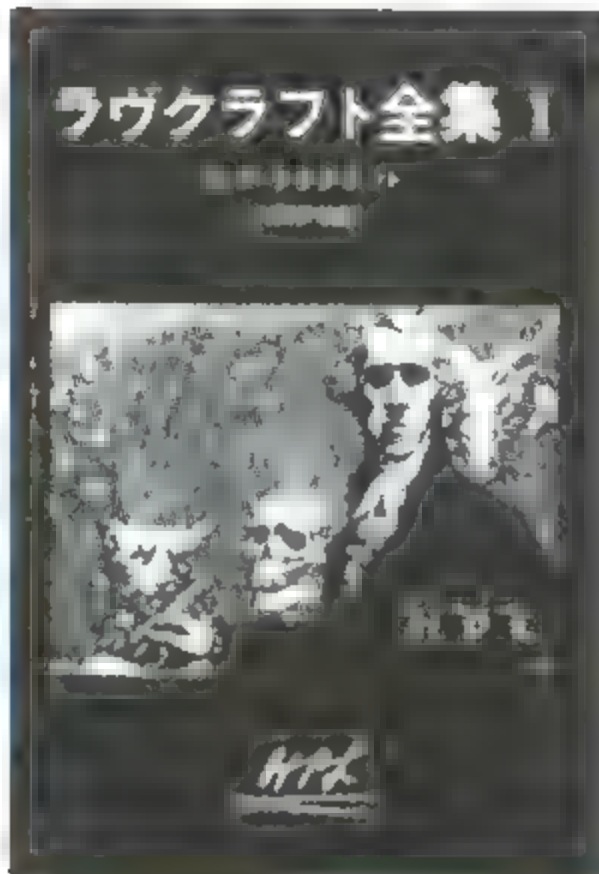
文・朱鷺田祐介

1921年に、H・P・ラヴクラフトがクトゥルー神話作品の第1作目とも呼べる『無名都市』を執筆してから80年余。ラヴクラフトをはじめ、多数の作家によるさまざまな作品が加えられ、今でもその範囲は広がりつづけている

との時代、との作者の作品から入っても、神話の世界観を堪能できるのかクトゥルー神話大系の魅力のひとつだか、初めて小説を手にする読者のために、入門的な作品集や参考文献を紹介しよう

ラヴクラフトから始めたい？

やはり、神話の創始者であるラヴクラフト自身の作品から始めたい、というならば、この2種類の作品集が確実だ

比較的入手しやすいのが、**『ラヴクラフト全集』全7巻（創元推理文庫）**。特に1～2巻は彼の代表作ばかりを集めたものなので、「どれから読んだらいいかわからない」という読者はここから入ってみてもいいだろう

「ラヴクラフト全集」全7巻（創元推理文庫）

『インスマウスの影』（本書中では『インスマスを覆う影』として紹介）が掲載された第1巻から順序正しく読みはじめるもよし、また、補完要素の高い第7巻以外のいずれから手をつけても問題はない。幻想味のある短編から始まる第4巻、第5巻あたりから入るのもお勧め。関係作品をまとめた別巻（上）も刊行されている

『定本ラヴクラフト全集』全10巻（国書刊行会）は、流布しているテキストの誤りを専門家が校訂した決定版というべきアーカム・ハウス版で、書簡集、評論、研究論文、合作作品なども含まれ、ラヴクラフト研究にも欠かせない。残念ながら、すでに一部が品切れである。

「定本ラヴクラフト全集」全10巻（国書刊行会）

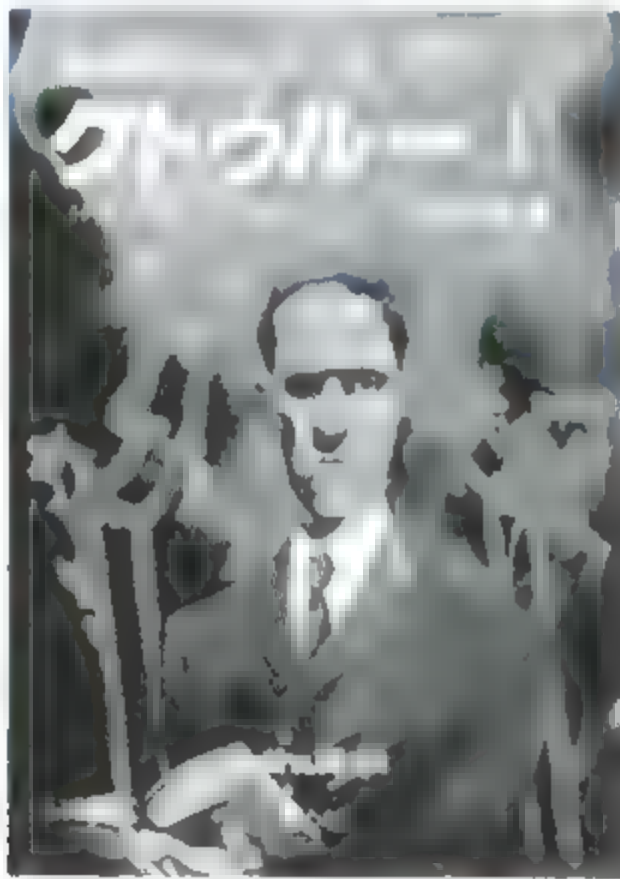
ラヴクラフトは20世紀の作家だが、18世紀半ばから19世紀初頭に流行したゴシック文体を愛し、自身の作品もそうしたいわば「クラシカル」な文体を取りいれているため、なじみのない読者には、とっつきにくい印象を与えるかもしれない

しかし、彼の幻想世界はそうした文体で書かれているからこそ、より味わい深いものになっているといえるので、果敢に挑戦してほしい

多様な作家の作品集

ラヴクラフトを第1世代とし、ラムジー・キャンベルあたりまでの第3世代にかけての包括的な作品集がふたつある。**『暗黒神話大系シリーズ クトゥルー』全13巻（青心社文庫）**はラヴクラフト、オーガスト・ダーレスを中心に、基本的な作品をカバーしている

「暗黒神話大系シリーズ クトゥルー」全13巻（青心社文庫）

特に、1巻巻末の「クトゥルー神話の神神」、2巻巻末の「クトゥルー神話の魔道書」（ともに、著者はリン・カーター）は神話世界の基本的な解説が書かれ、神話入門者にとって非常に便利である

「新編 真ク・リトル・リトル神話大系」1巻（国書刊行会）

包括的な神話作品集の決定版といえる**『真ク・リトル・リトル神話大系』全10巻（国書刊行会）**は長らく絶版だったが、2007年秋より、再編集したソフトカバー版全7巻の刊行が始まったのは喜ばしい

また、インスマスものだけを集めた**『インスマス年代記』上下巻（学研M文庫）**は〈深きものども〉に憑依された作家陣が集まっており、実に面白い。**『ラヴクラフトの遺産』（創元推理文庫）**と**『ラヴクラフトの世界』（青心社文庫）**は神話作品に限定されないが、傑作が多く、神話知識の有無にかかわらず楽しめる。

『ネクロノミコン アルハザードの放浪』(ドナルド・タイスン著 大瀧啓裕訳／学研)

注目の翻訳作品

近年、翻訳された神話作品で注目すべきものはいくつかあるが、紙幅の関係で2作に絞る。まず、タイタス・クロウものの長編第一作『地を穿つ魔』(ブライアン・ラムレイ著 夏来健次訳／創元推理文庫) 地の底にひそむクトゥルーの眷属、クトーニアンの存在が語られるとともに、ミスカトニック大学が母体となり、邪神と戦う人類の集団「ウィルマース・ファウンデーション」が登場することで、見逃せない作品だ

タイタス・クロウとド・マリニーが謎の時計を用いて異次元に向かう続編『Transition of Titus Crow』(『タイタス・クロウの次元遷移／昇華』) の翻訳開始も喜ばしい

アブドゥル・アルハザードを主人公にした『ネクロノミコン アルハザードの放浪』(ドナルド・タイスン著 大瀧啓裕訳／学研) は、オリジナリティに富みつつ、ラヴクラフトらの諸作品をきちんと踏まえた斬新な伝奇ファンタジー。できれば、神話作品をひととおり読んでからトライしたい

国内の動向

国内の神話作家の動向を知りたいならば、2002年刊の『秘神界』(朝松健編／創元推理文庫) の〈現代編〉と〈歴史編〉が重要なマイルストーンになる。これは英訳版も出ており、日本発のクトゥルー神話を英語圏へと送りだしている

これに先立つ『邪神ホラー傑作集 クトゥルー怪異録』(学研M文庫) は、日本の作家によるクトゥルー短編の歴史をたどる側面もあり、重要な存在といえる

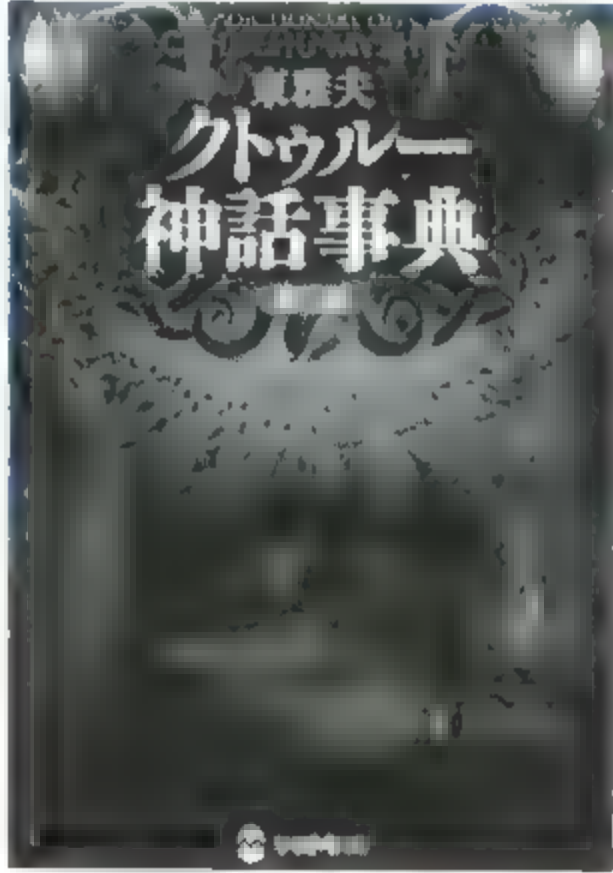
ホラー系やライトノベルズ系では、実に多数のクトゥルー神話関連作品が発表されているが、やはり、PCゲームから出発した『斬魔大聖デモンベイン』(小説版は角川文庫) を避けて通るべきではない

『クトゥルフ神話ガイドブック』(朱鷺田祐介著／新紀元社)

涼風涼の本編ノベライズは王道魔術伝奇ロマンであり、古橋秀之の外伝はさらに驚天動地のスチームパンクSFである。これを無視して、昨今の日本クトゥルー神話事情は語れないというのが実情

近年はクトゥルー神話再紹介の機運が高く、多くの入門書が出ている

2004年の拙著『クトゥルフ神話ガイドブック』(新紀元社) はTRPGの最新版刊行に対応したものだが、偶然にもその嚆矢となった

その後、『図解クトゥルフ神話』(森瀬繚著／新紀元社) と『クトゥルー神話ダークナビゲーション』(森瀬繚著／ぶんか社) が発表され、2007年1月には、神話大系資料の決定版というべき『クトゥルー神話事典 第三版』(東雅夫著／学研M文庫) が刊行されている

『クトゥルー神話事典 第三版』(東雅夫著／学研M文庫)

『エンサイクロペディア・クトゥルフ』(ダニエル・ハームズ著 坂本雅之訳／新紀元社)

ブックス・エソテリカ別冊『クトゥルー神話の本』(学研)

『エンサイクロペディア・クトゥルフ』(ダニエル・ハームズ著 坂本雅之訳／新紀元社) の網羅性は非常に高いが、著者はさらに続刊を計画しているとも漏れ聞く。日本のクトゥルー事情などフィードバックしたいところである

さらに、ブックス・エソテリカから別冊『クトゥルー神話の本』(学研) が刊行された 同書は伝説のムック『暗黒の邪神世界 クトゥルー神話大全』(学研) からの復刻を多数含んでいる。菊地秀行の「アーカム探訪記」や、1931年翻訳の絵物語「インスマウスの半魚人」が読めるなど、貴重な1冊

クトゥルー神話大系入門ガイド

Guide for Cthulhu Mythos

ゲーム編 *Games*

文・坂本雅之

ラヴクラフトが創始した、地球を再び支配せんと時を待つ〈旧支配者〉という存在と、旧支配者 vs. 旧神という善悪の構図などの、オーガスト・ダーレス流の「わかりやすい」設定は、ゲームの格好の題材ともなった。小説作品から神話の魅力にはまったファンだけでなく、純粋にゲームとしてのおもしろさから入ったプレイヤーなど、クトゥルー神話を題材にしたゲームはいろいろな楽しみ方ができるアイテムといえるだろう。

宇宙的恐怖の片鱗に触れたあなたにとって、邪神とその手先との対決はもう避けられない。ゲームならば危険を冒さずにそれが満喫できるのだ。いざ、ゲームの世界へ！

ボードゲーム／カードゲーム

●アーカムホラー

アーカムの街を舞台に、ドールやガグなどのモンスターを倒したり回避したりしつつ、次元の門を封印しようとするボードゲーム。次元の門が開かれたままだと、そこから眠りより覚めた〈旧支配者〉が復活してしまうのだ。

プレイヤーは考古学者や探偵などのキャラクターを選び、各種装備品や（魔法の）アイテム、特殊技能を受けとる。そしてさまざまなイベントを解決しつつ、次元の門を封印し、街にあふれたクトゥルーの眷属を退散させてゆく。プレイヤーたちが全滅することもよくある

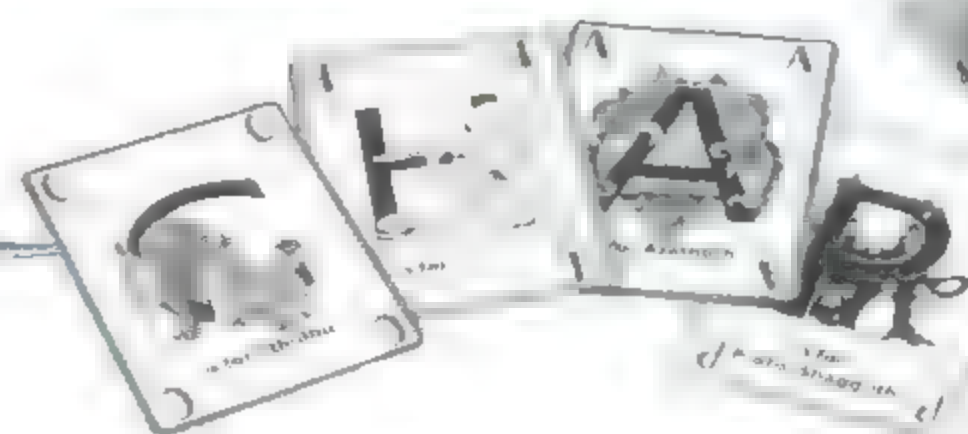
価格：10,500円（税込）
プレイ人数：1〜8人
プレイ時間：2〜4時間
発売：アークライト
http://www.arclight.co.jp/bgame/

●ダンウィッチホラー

これは「アーカムホラー」の拡張セット。地図盤にダンウィッチが追加された。アブホースやツァトゥグアといった、新しい〈旧支配者〉、アイテムや協力者などの各種カードや、新ルールも追加され、いっそうクトゥルー神話が堪能（？）できる。

価格：8,000円（税込）
プレイ人数：1〜8人
プレイ時間：2〜4時間
発売：アークライト
http://www.arclight.co.jp/bgame/

●禁断の言葉（Unspeakable Word）

クトゥルー神話の世界を背景にしたワードゲーム。「A」は「Azathoth」の「A」、「D」は「Deep Ones」の「D」といった、フレーバーたっぷりの文字カードを使って英単語を作り、単語を作るたびに正気のチェックを行い、最後まで正気を保ったまま100ポイントを獲得したプレイヤーが勝利する。

かわいいクトゥルー人形が30個も付属しているのも楽しい、ファン必携のゲーム！

価格：2,940円（税込）
プレイ人数：2〜6人
プレイ時間：30分
発売：Playroom Entertainment
輸入元：ホビージャパン
和訳ルール付き
http://www.hobbyjapan-shop.com/

●クトゥルー500（Cthulhu500）

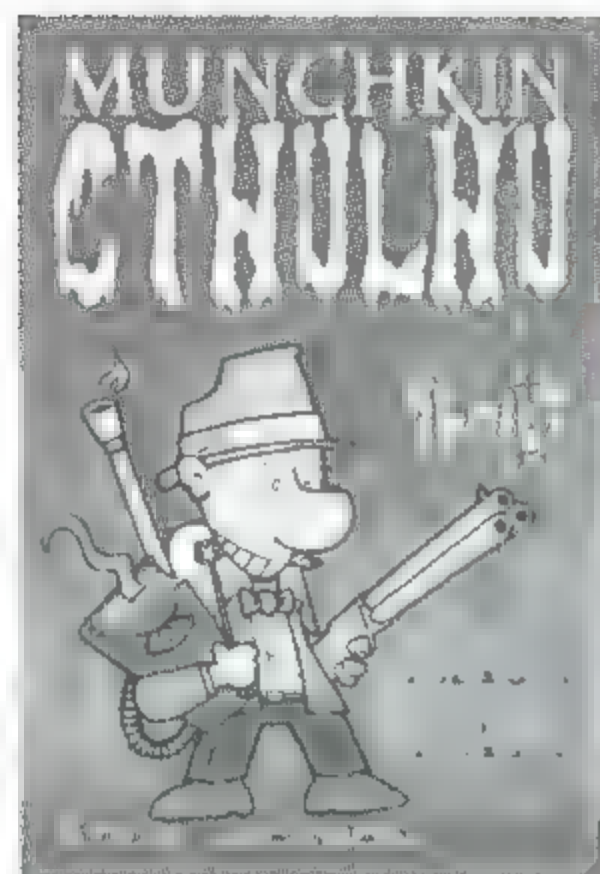
「インディ500」のパロディレースゲーム。トゥチョ＝トゥチョ人やアーミティッジ博士をピットクルーに、デイトナから来たミ＝ゴウをドライバーに配し、核弾頭などで武

参考価格：3,349円（税込）
プレイ人数：3〜8人
プレイ時間：45分
発売：Atlas Games

装してオーバルコースを突っ走る。呪文攻撃がくれば、「イアー　イアー！」と叫んでかわそう。

●マンチキン　クトゥルフ日本語版

ダンジョンに潜って部屋をあさり、カードをめくってモンスターなら戦闘、そのほかのカードなら呪われたり、手札にしたりして、手札や自分のキャラクターを強化することができる。最終的にキャラクターのレベルが一番高いプレイヤーが勝者だ。

基本的にジョークなセンスにあふれており、カード名には「浅きもの」「ダンウィッチのいびき」といったダジャレ満載だ。

価格：3,675円（税込）
プレイ人数：2～6人
プレイ時間：30分
発売：アークライト
http://www.arclight.co.jp/bgame/

●クトゥルー版・汝は人狼なりや（Do you worship Cthulhu?）

村人の中に忍びこんだ人狼と村人との推理戦ゲーム『汝は人狼なりや？』のクトゥルー版。各プレイヤーには、密かに「クトゥルー崇拝者」「村人」「占い師」という役割が与えられる。「村人」が、「クトゥルー崇拝者」を見つけださないと次々に犠牲になっていく

参考価格：3,000円（税込）
プレイ人数：5～30人
プレイ時間：20～90分
発売：TOY VAULT

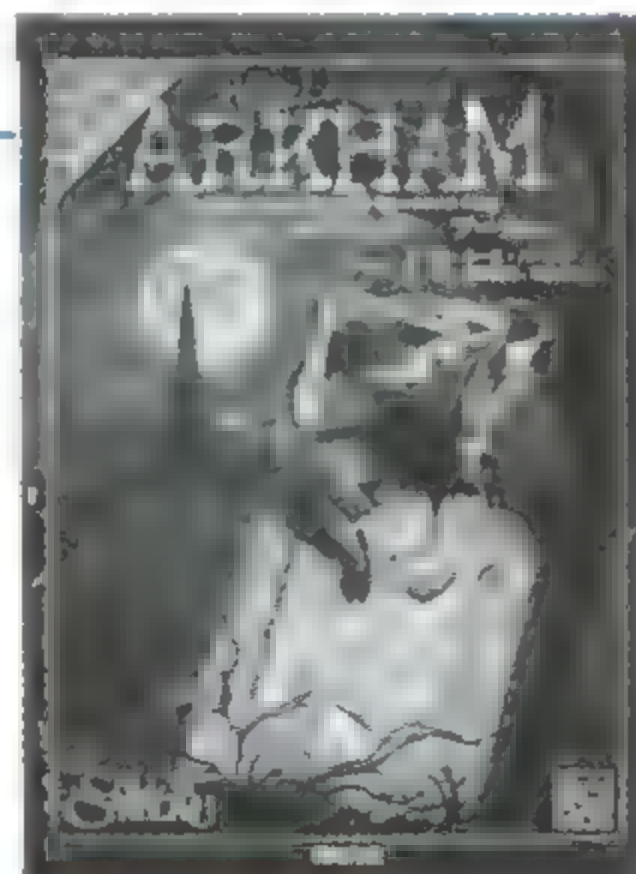
テーブルトーク・ロールプレイングゲーム

●クトゥルフ神話TRPG

テーブルトーク・ロールプレイングゲームはコンシューマなどの機械を使わずに、人間同士で遊ぶRPG。最初は難しいが、慣れればこれほどクトゥルー神話の世界を楽しめるものはない。本書にはゲームのルールのほか、さまざまな魔道書やクリーチャー、神格のデータが満載

価格：6,090円（税込）
プレイ人数：3～7人
プレイ時間：2～8時間
発売：エンターブレイン

●H・P・ラヴクラフト　アーカム

上記の設定集。アーカムにスポットを当て、歴史、地理などのほか、それぞれの建物や人物などを詳細に記述している。アーカム地図やシナリオも収録

価格：3,150円（税込）
プレイ人数：3～7人
プレイ時間：2～8時間
発売：新紀元社

クトゥルー神話とコンピューターゲーム

クトゥルー神話を題材としたコンピューターゲームは、古くは『Alone in the Dark』など枚挙にいとまがない。初期の作品としては『The Hound of Shadow』（1989年）が素晴らしい。セピア1色のテキストアドベンチャーだが、キャラクターメイクのシステムが凝っていた。

1993年、1995年と続いて2本のクトゥルーものがPCで発売された。『Call of Cthulhu: Shadow of the Comet』『Call of Cthulhu: Prisoner of Ice』である。ともにグラフィック・アドベンチャーのためプレイしやすく、PC版なので入手も容易だった。

その後、2001年発売の『Necronomicon: The Dawning of Darkness』を最後にクトゥルーもののゲームはしばらく姿を消していたが、2005年になって衝撃的に出現したのが『Call of Cthulhu: Dark Corners of the Earth』だ。こちらは完全3D。しかも舞台はインスマスの町そのものだ。ゲーム序盤、バスに乗ってインスマスに向かうシーンで思わず大喜び。おお、3Dだ！　魚面だ！　リアルだ！　ファンにはぜひプレイしてもらいたいゲーム。

最近の作品では『Sherlock Holmes The Awakened』の評判が高い。こちらはホームズVS.クトゥルーという魅力的なテーマのグラフィック・アドベンチャーだ。ただし、ゲームとしての難易度はやや高く、英文も多い。チャレンジするには、かなりの根性が必要だろう。

【ア行】

アーカム 米国マサチューセッツ州にある地方都市。ミスカトニック河が町の中央部を流れ、駒形切妻屋根の古びた町並が続く。(↓33ページ)

アーミティッジ(ヘンリー・) ミスカトニック大学付属図書館長を務める、白髭の老博士 ダニッチで進行していたウェイトリイ兄弟の野望を察知し、隠秘学的方法によってこれを阻止した。(↓81ページ)

悪魔の暗礁 デビルズ・リーフとも。インスマスの沖合1マイル半の地点にある岩礁。断崖のようになっている暗礁の先の深海から、〈深きものども〉がやってきては、岩礁の上や周辺で夜ごと戯れるという。オーベッド・マーシュは、ここで〈深きものども〉と取引をしていた。(↓34ページ)

アザトース アザトホースとも。時空を超越した究極の混沌の中心にある〈万物の王である盲目にして痴愚の神〉。姿を見た者は、発狂をまぬがれないといわれる。(↓54ページ)

アブホース 古代の魔峰ヴーアミタドレス山の地底に広がる地下世界の最深部、粘着質の湾に横たわり、いとわしい分裂を永久に行う灰色の塊で〈宇宙の不浄すべての母にして父〉と呼ばれる。(↓62ページ)

アル・アジフ 『ネクロノミコン』のアラビア語原題 アジフとは、アラブ人が魔物の吠え声と考えていた、夜鳴く虫の声を意味するという。

アルハザード(アブドゥル・) イエメン国サナア出身の狂える詩人。晩年、ダマスクスで『アル・アジフ』(『ネクロノミコン』のアラビア語原題)を執筆するが、紀元738年に不可解な失踪を遂げた(↓78ページ)

アルハザードのランプ 伝説の古代種族アドによって作られた、魔力を持つランプ。アブドゥル・アルハザードが所持していたため、この名で呼ばれる。(↓75ページ)

イグ 米国中西部の平原で崇拝される蛇の神。蛇に危害を加える者を、苦しめたあげく斑紋のある蛇に変えてしまうという。(↓61ページ)

イタカ 〈旧支配者〉の一柱とされる風の精。〈風を歩むもの〉にして、大いなる白き沈黙の神とも呼ばれる。(↓57ページ)

古のもの 太古の南極に、星界から飛来した知的生物 高度な知能を持ち、無機物を合成して、ショゴスや人類の遠い祖先などの生命体を生みだした (↓63ページ)

イハ＝ントレイ 〈悪魔の暗礁〉の沖合深くにある、夥しい柱の林立する巨石造りの海底都市。〈深きものども〉の一大拠点 燐光を放つ宮殿にはテラスが数多くあり、庭園にはエラのある奇怪な花が咲き乱れているという

イホウンデー ヒューペルボリアで公に崇拝されたヘラジカの女神。その神官は、ツアトウグア崇拝を弾圧した。

インスマス インスマウスともマサチューセッツ州エセックス郡、マヌーゼット河の河口に位置する古びた港町。周辺には荒涼として人の住めない塩性湿地帯が広がる 1846年の伝染病蔓延と暴動以降は、オーベッド・マーシュに率いられたクトゥルー崇拝者の拠点と化した (↓34ページ)

インスマス面 インスマスの住民に共通した奇妙な容貌 禿げあがった頭部は妙に細く、鼻は平たく、まばたきをしない目は膨れあがり、皮膚はかさぶたに覆われ、首の両側には魚のエラを思わせる皺が認められる。加齢につれて、変貌の度合いが増してゆくという。(↓84ページ)

ウィルマース・ファウンデーション ミスカトニック大学の教授陣によって組織された非公式の共同体組織。故アルバート・N・ウィルマースの遺志を継いで、クトゥルー眷属邪神群(CDC)の追求と殲滅を完遂することを目的に設立された

ウィルマース(アルバート・N・) ミスカトニック大学で英文学を講ずるアマチュア民俗学者。ヘンリー・エイクリイと文通を交わし、〈ユゴス星の菌類生物〉の暗躍を目のあたりにする(↓81ページ)

ウェイトリイ(ウィルバー・) ラヴィニア・ウェイトリイが、ヨグ＝ソトースと契って産んだ双子のかたわれ。『ネクロノミコン』を盗みだそうとミスカトニック大学に侵入して、番犬に喰い殺され、半人半獣のおぞましい本性をさらしたのち消滅した。(↓80ページ)

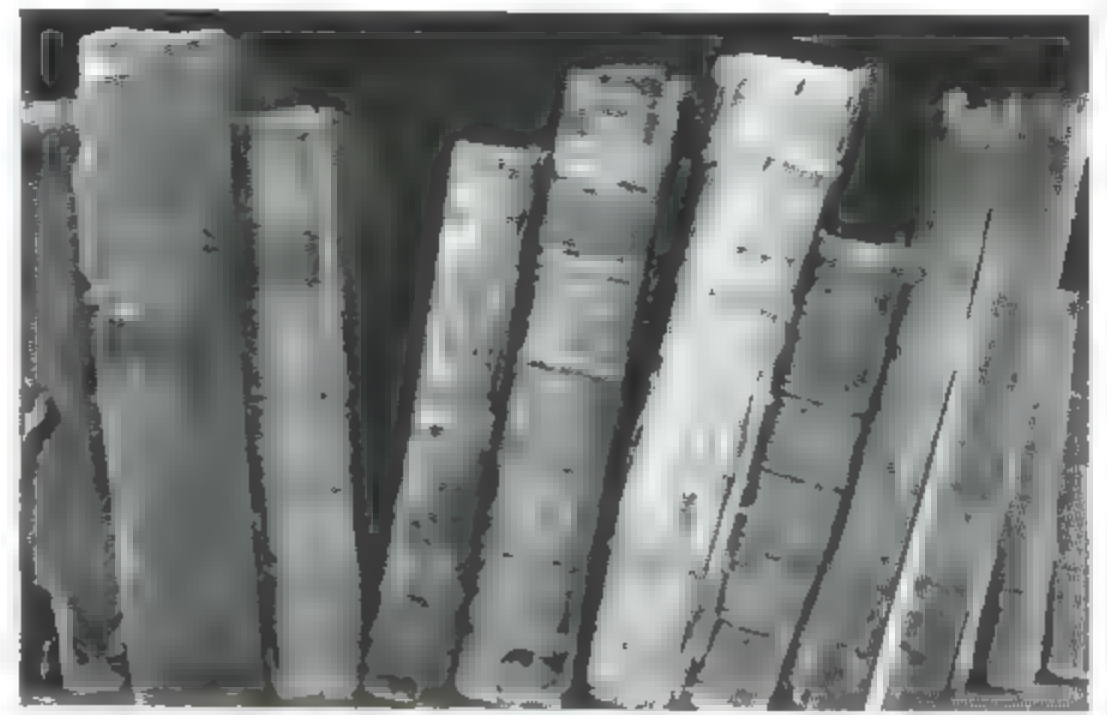
ウェスト(ハーバート・) ミスカトニック大学医学部出身の外科医師 生命機械理論に取り憑かれ、死体蘇生実験に没頭 最後には、自らが甦らせたゾンビの群によって八つ裂きにされた (↓87ページ)

ウボ＝サスラ 誕生間もない地球の、蒸気を発する沼に横たわり、頭も手足も臓器もない無定形の巨体から、生命の原型である単細胞生物を生みだしている神性。(↓61ページ)

ウムル・アト＝タウィル 劫初より、地球の延長部の玉座に座し、多次元への〈門を護るもの〉にして〈導くもの〉である特異な神性〈延命せられしもの〉〈古ぶるしきもの〉とも呼ばれる。

エイクリイ(ヘンリー・ウェントワス・) 米国ヴァーモント州ウィンダム郡のダーク山に隠棲する博学の郷土〈ユゴス星の甲殻生物〉を調査中、再三の脅迫・襲撃にさらされ、1928年に失踪した。(↓85ページ)

エイボン ムー・トゥーランの大魔道士。ツァトゥグアに帰依し、『エイボンの書』をまとめたあと、イホウンデーの神官による迫害を逃れてサイクラノーシュ(土星)に去った。(↓69ページ)

エルトダウン・シャーズ エルトダウン陶片とも 20世紀初頭、英国南部エルトダウン近郊の砂利採取場で三畳紀初期の地層から出土した粘土板群に刻まれていた古代文字を、アーサー・ブ

ルック・ウィンタース＝ホールが解読し、公刊した超古代文書（→72ページ）

円筒型脳収容器　生物の脳を意識のあるまま保存し、宇宙や時空連続帯を超えて旅をさせる装置。〈ユゴス星の菌類生物〉の高度な技術による。（→76ページ）

大いなる種族　超銀河世界〈イース〉から、6億年前の地球に到来した精神生命体。あらゆる時代に精神を投影しては知識の摂取に努めている。（→64ページ）

オトゥーム　クトゥルーの配下の神性で〈クトゥルーの騎士〉などと呼ばれる。グリーンランド沖にあるという〈北の深淵〉ゲル＝ホーを拠点とする。

カーウィン(ジョウゼフ・)　1662年、もしくは翌年にセイレム郊外のダンバーズに生まれた。その容貌は100歳を越えても30代のような若さを保ち、さまざまな異端の知識に通暁しており、好んで墓地を徘徊した。町の有力者に指揮された住民たちによって襲撃され、殺害されたが、その魂は復活の機会を窺っていた。（→82ページ）

【カ行】

カーター(エドマンド・)　ランドルフ・カーターの祖先である魔道士。祖先伝来の〈銀の鍵〉を、古式ゆかしい箱に収めて子孫に伝えた。（→88ページ）

カーター(ランドルフ・)　ボストン在住の夢想家で、その家系からは代々、魔術師や神秘家を輩出している。数々の神秘や怪異に接したあと、家伝の〈銀の鍵〉を用いて〈夢の国〉へ旅立った。（→88ページ）

輝くトラペゾヘドロン　不均整な形の金属箱の中に、7本の支柱で吊り下げられた結晶物。時間と空間のすべてに通じる窓と呼ばれ、闇の中で箱から解放されることにより、ナイアルラトホテップを召喚する。（→74ページ）

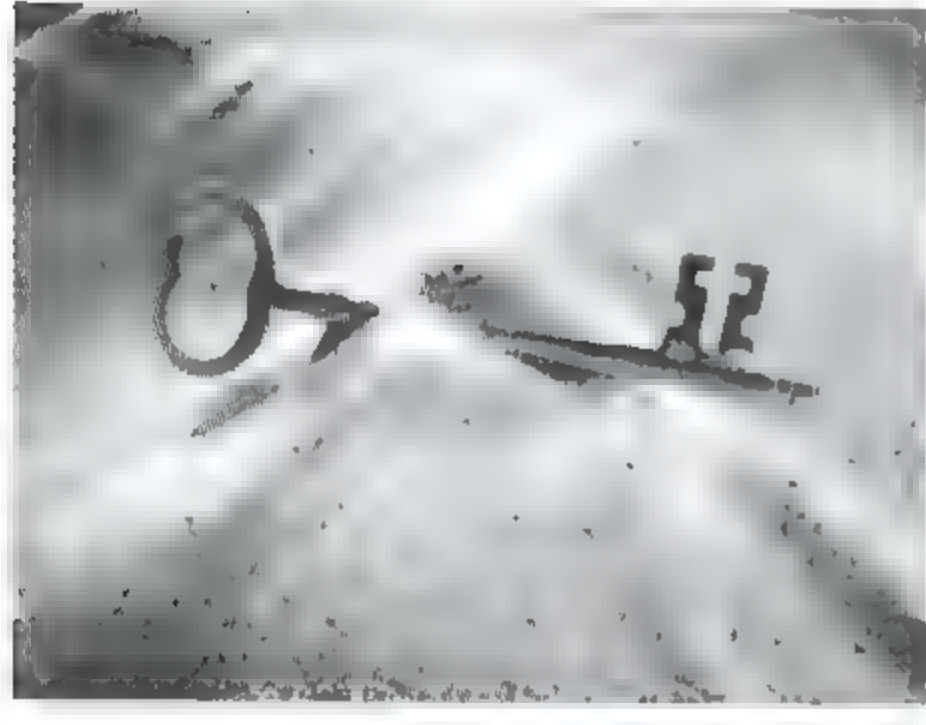
ガタノトーア　ユゴス星の生物が崇拝し、彼らとともに地球へ到来した神格。触腕と長い鼻、蛸の眼をもち、鱗と皺に覆われた無定形の巨体をムー大陸の聖地クナアにそびえるヤディス＝ゴー山の地底深く横たえている。その姿をひと目見た者は、たちまち石と化すが、脳だけは半永久的に生きつづけるといわれる。

旧支配者　宇宙の邪悪を体現する神々の総称。かつて太古の地球に到来し、地上に君臨していたことからこの名がある〈旧支配者〉の多くは、その属性によって地／水／火／風の4つに分かれるか、明確な位置づけが困難な神性も数多い。（→50ページ）

旧神　宇宙的な善を体現する全能の存在。オリオン座のベテルギウスに鎮座するとされるが、その実体は神秘に包まれている。永劫の昔、謀反を起こした〈旧支配者〉との間に激烈な闘いを繰りひろげた。（→50ページ）

ギルマン(ウォルター・)　ミスカトニック大学の学生で、アーカム市内の〈魔女の家〉に下宿するが、魔女ケザイア・メイスンに憑依され、やがてメイスンの使い魔ブラウン・ジェンキンによって命を落とした。（→85ページ）

銀の鍵　アーカムのカーター家に代々伝わる、魔力を秘めた鍵。超古代のヒューペルボリアで鋳造されたといわれる。（→75ページ）

クトゥグア　地球から27光年離れたフォマルハウト星に棲まう炎の精。無数の光の小球を従え、生ける炎となって出現する。ナイアルラトホテップの天敵で、その一拠点である〈ンガイの森〉を焼き払った。（→55ページ）

クトゥルー　太古の地球に星界から到来した偉大なる存在。頭部は蛸に似て、顔面には無数の触腕が生え、胴体はゴム状で鱗に覆われ、手足に巨大なかぎ爪、背中に細長い翼を有する。海に沈んだ石造都市ルルイエの館で死の眠りについている。（→52ページ）

クトーニアン　またの名を〈地をうがつもの〉。クトゥルー眷属邪神群（CDC）の一種族で、巨大で醜悪なイカさながらの姿をしており、地底に棲息する。その首魁はシャッド＝メルである。（→53ページ）

黒い石　ハンガリーの寒村シュトレゴイカバール近郊に立つ石塔。周囲には奇怪な象形文字が刻まれ、塔の周辺では、太古から邪神崇拝の魔宴が行われていたという。（→74ページ）

クロウ(タイタス・)　ロンドン郊外のフロウン館に隠棲するオカルティスト。禁断の書物の蒐集家として名高く、のちに邪神狩人として活躍する。（→86ページ）

黄衣の王　読む者に災厄をもたらすと伝えられる、毒々しい黄色に彩られた表紙の書物。後代にいたっては、ハスターの化身をこう呼ぶようにもなった（→56ページ）

五芒星形の印　ムナールの灰白色の石に、炎の柱を囲む五芒星を刻んだ護符。これを所持する者は、〈旧支配者〉に従うものたちから身を護ることができる。（→76ページ）

【サ行】

屍食教典儀　オーガスト・ダーレスの祖先ダレット伯爵が著したとされる異端の書物（→71ページ）

シャッガイ　角度を持つ宇宙の最果てにある、死臭に満ちた悪夢の星。灰色の金属でできた都市には、知性を備えた邪悪な昆虫族が棲み、その地下では異次元の巨大蛆が惑星そのものを喰らい尽くそうとしている。

シャッガイの昆虫族　巨大な眼球と3つの口、10本の脚、半円形の羽をもつ知的生物。（→64ページ）

シャッド＝メル　地底都市ク＝ハーンに跋扈する奇怪な異形の生物〈クトーニアン〉を率いる、ゴムのような肉体を有する魔物。

シュブ＝ニグラス　〈千匹の仔を孕みし森の黒山羊〉と呼ばれる大地母神的な神性。おもに古代ムー大陸やクン＝ヤンで崇拝された。（→60ページ）

シュリュズベリイ(ラバン・)　アーカム在住の神秘思想研究家にして哲学教授。古代の神話・宗教の権威。プレアデス星団のセラエノにある図書館で禁断の知識を学んだあと、クトゥルーの復活を阻止するために奔走した（→86ページ）

食屍鬼　屍食鬼、グールとも。墓地などの地底に群棲し、人肉を食する魔物。その容貌は犬に似て、肌はゴム状、前かがみで飛び跳ねるように歩く。（→64ページ）

ショゴス　泡立つ粘着性の原形

質生物で、原初の南極に飛来した〈古のもの〉が都市建造の奴隷とするために、無機物から合成して生みだした。(→63ページ)

深海祭祀書　『ウンテル・ツェー・クルテン』とも。ドイツで刊行された、海の魔物にかかわる魔道書。(→68ページ)

水神クタアト　著者不明。世界に3冊しか現存しないというおぞましき書物。水の〈旧支配者〉を喚びだす際の呪文や召喚儀式を集成した伝説の書。その表装には人皮が用いられているという。(→68ページ)

セイレム　米国マサチューセッツ州の都市。1692年に起こった魔女狩り事件で知られる

セラエノ　プレアデス星団中の星。巨石で建造された大図書館には、〈旧支配者〉が〈旧神〉から盗みだした書物や石碑が収蔵されている。

セラエノ断章　書物や写本ではなく、壊れた石板の形で遺されたという禁断の書。〈旧神〉や〈旧支配者〉の秘密が記されている。シュリュズベリイ博士は、自筆の写本を所蔵している。(→72ページ)

【タ行】

タゴン　クトゥルーの眷属で〈深きものども〉の首領。古代ペリシテ人により半人半魚の神として崇められていたことが、旧約聖書にも記されている。(→53ページ)

ダゴン秘密教団　インスマスで組織された秘密宗派。〈ダゴンの誓い〉を立てた団員は死ぬことかなく、大昔に彼らを生みだした〈母なるヒュトラと父なるダゴン〉のもとへ還るという。

ダニッチ　ダンウィッチとも。マサチューセッツ州北部中央の丘陵地帯にある古びた寒村。近くの大峡谷には、古くは原住民の邪悪な召喚儀式にさかのぼる無気味な伝承が数多く残されている。住民は代々近親結婚をかさねて退廃し、忌まわしい事件がしばしば発生している。

チャウグナル・ファウグン　ツァン台地の洞窟に祀られていた吸血神。象そっくりの長い鼻と、触手のついた大きな耳、口の両端から突きでた巨大な牙をもつ。普段は石化しているが、血の臭いとともに動きだす。(→62ページ)

ツァール　ロイガーとともにスン高原の地底に棲み、トゥチョ＝トゥチョ人に崇められる神性

ツァトゥグア　地球が誕生してまもなくサイクラノーシュ(土星)から到来し、ヴーアミタドレス山の地底にある秘密の洞窟に永劫の歳月うずくまる怠惰な神性。巨大な腹かせりだし、真っ黒な体表は短い柔毛に覆われ、コウモリやナマケモノを連想させる。(→60ページ)

ツァン(エーリッヒ・)　オーゼイユ街の下宿屋の屋根裏部屋に住む、ドイツ人の老ヴィオール奏者。口をきくことができず、夜ごと屋根裏部屋で、この世ならぬ調べを奏で、ついには異界の魔によって命を落とした。(→85ページ)

トゥチョ＝トゥチョ人　ミャンマー(ビルマ)奥地のスン高原に巣喰う邪悪な矮人族。異様に小さな目が、ドーム状の無毛の頭部に深く落ちくぼんでいる。7000歳の長老エ＝ポオに率いられ、古代都市アラオザルを守護する

ド・マリニー(アンリ＝ローラン・)　エティエンヌ＝ローラン・ド・マリニーの息子。英国に移住し、のちにタイタス・クロウとともにウィルマース・ファウンデーションの中心メンバーとなり活躍する。(→86ページ)

【ナ行】

ナイアルラトホテップ　ナイアーラトテップ、ニャルラトホテプとも〈無貌の神〉とも呼ばれるが、無貌ゆえに変幻自在の顔を持つ、〈旧支配者〉の中でも特異な神性。アザトースの使者にして、地球の神々の守護神でもある。(→58ページ)

ナイ神父　ナイアルラトホテップを崇拝する〈星の智慧派〉を再建した謎の人物。ナイアルラトホテップの化身と見られる(→83ページ)

ナコト写本　人類誕生の5000年ほど前に生存していた種族が残したという最古の魔道書で、〈大いなる種族〉やツァトゥグア、カダスに関する言及がある(→70ページ)

ネクロノミコン　『死霊秘法』とも。アラブの狂詩人アブドゥル・アルハザードが、730年にダマスクスで執筆した禁断の魔道書。原題は『アル・アジフ』で、『ネクロノミコン』とはギリシア語に翻訳されたときの書名(→26ページ、66ページ)

【ハ行】

バイアクヘー　バイアキー、ビヤーキーとも。ハスターに仕える有翼生物。蝙蝠に似た翼で、星間宇宙を飛翔する。金色の蜂蜜酒を飲み、石笛を吹いて呪文を叫ぶことで呼び寄せることができるという。(→57ページ)

ハスター　ハストゥールとも。ときとして〈名伏しがたいもの〉とも呼ばれ、〈旧支配者〉の中でも謎めいた部分の多い神性。〈星間宇宙を歩くもの〉とも呼ばれ、ヒヤデス星団のアルデバラン近くの暗黒星に潜む。(→56ページ)

ハリ湖　ヒヤデス星団の暗黒星にあるという広大な黒い湖。ハスターの潜み棲む地とされる。

ピースリー(ナサニエル・ウィンゲイト・)　ハヴァーヒルの旧家に生まれた政治経済学者。1908年に突然奇妙な記憶喪失に陥り、5年後に回復するまで〈大いなる種族〉と精神を交換されていた。1935年、西オーストラリアのグレート・サンディー砂漠で、〈大いなる種族〉の遺跡を発掘する(→81ページ)

ピックマン(リチャード・アプトン・)　ボストンのニューベリー・ストリートに住んでいた天才怪奇画家。セイレムの出身で、先祖には1692年に絞首刑にされた魔女がいる。食屍鬼の絵を得意とし、1926年に不可解な失踪を遂げたあと、〈夢の国〉で食屍鬼のリーダーとなったらしい。(→83ページ)

ヒュドラ　ハイドラとも。〈父なるダゴン〉と一対を成し、〈深きものども〉によって〈母なるヒュドラ〉と崇められる神で、クトゥルーに従う。(→53ページ)

フォン・ユンツト　1795年

に生まれ、生涯を禁断の領域の探究についやした、ドイツの奇人。1840年、密室内でかぎ爪の跡が残る絞殺死体となって発見された。その著書に『無名祭祀書』(『黒の書』)がある。(→70ページ)

深きものども　ディープ・ワンズとも。大いなるクトゥルーに仕え、〈母なるヒュドラ〉と〈父なるダゴン〉に導かれる水棲種族。人間との交婚を好み、生まれた子供は最初のうち人間に見えるが、齢をかさねるにつれ変貌し、最後には深海に棲む同族のもとへ帰還するという。(→53ページ)

フジウルクォイグムンズハー　サイクラノーシュ(土星)の神性で、ゾタクアの父方の叔父とされる。短い足と異様に長い腕、眠たげな表情の頭部が、さかしまに球状の体から垂れ下がっており、奇怪な言葉を発する。

ブラウン・ジェンキン　魔女キザイアの使い魔。大型の鼠ほどの大きさで、毛むくじゃらな鼠の形をしていながら、鋭い黄色の牙と髭の生えた顔は人間を、前脚は小さな人の手を思わせる。(→83ページ)

ブリン(ルドウィク・)　第9次十字軍唯一の生き残りを自称する、悪名高い魔術師。ブリュッセルの異端審問所で処刑されたが、獄中で『デ・ウェルミス・ミステリイス』(別名『妖蛆の秘密』)を執筆した。(→71ページ)

星の知慧派　1844年にエジプトより帰国したイノック・ボウアン教授が、プロヴィデンスで組織した邪悪な新興宗派。〈輝くトラペゾヘドロン〉を奉じて、ナイアルラトホテップに生け贄を捧げた。当局の弾圧を受けて、1877年に教会は閉鎖。のちに、ナイ神父によって再興されている。

【マ行】

マーシュ(オーベッド・)　インスマス出身の海運船船長。東インド諸島の小島で〈深きものども〉の存在を知り、彼らに生け贄を捧げ、見返りを得た。ダゴン秘密教団を組織し、1846年の大虐殺以降、事実上、町の指導者となった。(→84ページ)

ミ=ゴウ　〈ユゴス星の菌類生物〉のヒマラヤにおける異称とされる。その姿は、白色の柔毛に被われた巨大な類人猿のような〈忌まわしい雪男〉として、しばしば目撃されている。

ミスカトニック大学　1797年にアーカムに創立された総合大学。同大学付属図書館には『ネクロノミコン』をはじめとする数々の魔道書が収蔵されている。〈旧支配者〉にかかわる学術研究の総本山となっている。(→33ページ)

ムニョス　ニューヨークのアパートに隠れ住む医師。自ら考案した特異な死体蘇生術によって、死後18年間も生きつづけた。(→87ページ)

無名祭祀書　フォン・ユンツトが世界各地で見聞した奇怪な伝承の類いを書き留めた禁断の書物。『黒の書』とも呼ばれる。(→70ページ)

メイスン(キザイア・)　17世紀末のアーカムに悪名をとどろかせた魔女。使い魔ブラウン・ジェンキンとともに、自在に異次元空間を往還した。魔女集会での秘密の名は〈ナハブ〉。(→82ページ)

モーガン(フランシス・)　ミスカトニック大学に勤務する痩身の博士で、1928年、アーミティッジ博士によるダニッチの怪物退治に協力した。(→81ページ)

【ヤ行】

ユゴス　ヨゴスとも。菌類生物の居留地がある、暗黒の惑星。冥王星の別名とされる。

ユゴス星の菌類生物　無限宇宙の彼方(一説には大熊座)から太陽系に飛来し、暗黒星ユゴスを本拠地とする知的生物。テレパシーを用いて会話し、人間を操ることもできる。高度に発達した科学力を有する。種族によって形態が異なる。(→64ページ)

夢の国　浅き眠りの領域にある〈焔の洞窟〉を経て〈深き眠りの門〉を越えたところに広がる別世界の通称。帆船が行きかう海と、牧歌的な平原に美しい都市や神秘的な山山が点在し、森や谷間には、さまざまな異形の種族が棲む。その極北には、凍てつくレンと未知なるカダスがある。

妖蛆の秘密　ルドウィク・ブリンが獄中で執筆した、悪名高き魔道書。原題は『デ・ウェルミス・ミステリイス』といい、忌まわしい知識に満ちた内容であるといわれる。(→71ページ)

ヨグ=ソトース　ヨグ=ソトホース、ヨグ=ソトトとも。旧支配者が棲む外宇宙への〈門の鍵にして守護者〉である神性。虹色の球体の集積物で、泡立つ、触角のある無定形の怪物として人間の目に映じる。(→54ページ)

【ラ行】

ラーン=テゴス　人類誕生以前の北極に、外宇宙から到来した神性の一柱。球形の胴体に、先端が蟹の鋏状になった6本の長い手足をもち、泡状の頭部には、三角に位置する魚の眼と、長さ1フィートの鼻がある。(→62ページ)

ライス(ウォーラン・)　ミスカトニック大学教授。1928年、アーミティッジ博士によるダニッチの怪物退治に協力した。(→81ページ)

ルルイエ　ラ・イラー、ル・リエーとも。南太平洋、ニュージーランドの沖合、南緯47度9分、西経126度43分の海底に広がる、巨大な石造都市。その一角の山の頂には〈クトゥルーの墓所〉がある。あらゆる線と形が歪む悪夢の死の都で、〈深きものども〉によって護られている。

ルルイエ異本　クトゥルー崇拝にかかわる禁断の書物。異界のものを召喚する呪文などが記されているらしい。(→68ページ)

ロイガー　〈星間宇宙空間のただなかで風の上を歩むもの〉と呼ばれる神性。スン高原の地底で、ツァールとともに、トゥチョ=トゥチョ人にかしずかれている。「感覚をもって震える凶々しい肉の山」とも形容され、緑色に輝く目と、長い触腕を有するという。

ロマール　現在の北極付近にあった超古代大陸。往古の人類による王国に統治され、10万年にわたって繁栄したが、グノフケー族、イヌート族の侵攻や、大寒波の到来により滅亡したとされる。

主な参考文献

『ラヴクラフト全集（1～7）、別巻（上）』（H・P・ラヴクラフト著　大瀧啓裕他訳　創元推理文庫）／『ク・リトル・リトル神話集』（H・P・ラヴクラフト著　荒俣宏編　国書刊行会）／『真ク・リトル・リトル神話大系（1～10）』（H・P・ラヴクラフト著　黒魔団他訳　国書刊行会）／『新編　真ク・リトル・リトル神話大系（1）』（H・P・ラヴクラフト他著　那智史郎他訳　国書刊行会）／『暗黒神話大系シリーズ　クトゥルー（1～13）』（H・P・ラヴクラフト他著　大瀧啓裕他訳　青心社文庫）／『クトゥルー神話事典　第三版』（東雅夫著　学研M文庫）／『邪神ホラー傑作集　クトゥルー怪異録』（菊地秀行・佐野史郎他著　学研M文庫）／『インスマス年代記（上下）』（スティーヴァン・ジョーンズ編　学研M文庫）／『ネクロノミコン　アルハザードの放浪』（ドナルド・タイスン著　大瀧啓裕訳　学研）／『魔道書ネクロノミコン　完全版』（ジョージ・ヘイ編　大瀧啓裕訳　学研）／『ブックス・エソテリカ別冊　クトゥルー神話の本』（学研）／『別冊幻想文学10　ラヴクラフト・シンドローム』（幻想文学企画室編　アトリエOCTA）／『クトゥルフ神話ガイドブック』（朱鷺田祐介著　新紀元社）／『図解クトゥルフ神話』（森瀬繚編著　新紀元社）／『エンサイクロペディア・クトゥルフ』（ダニエル・ハームズ著　坂本雅之訳　新紀元社）／『ラヴクラフトの世界』（スコット・デイヴィッド・アニオロフスキ編　大瀧啓裕訳　青心社）／『ラヴクラフトの遺産』（ブライアン・ラムレイ他著　夏来健次他訳　創元推理文庫）／『アーカム計画』（ロバート・ブロック著　大瀧啓裕訳　創元推理文庫）／『タイタス・クロウの事件簿』（ブライアン・ラムレイ著　夏来健次訳　創元推理文庫）／『地を穿つ魔』（ブライアン・ラムレイ著　夏来健次訳　創元推理文庫）／『黒の碑』（R・E・ハワード著　夏来健次訳　創元推理文庫）／『秘神界～歴史編・現代編～』（朝松健編　創元推理文庫）／『邪神帝国』（朝松健著　早川書房）／『崑央の女王』（朝松健著　角川ホラー文庫）／『斬魔大聖デモンベイン』（涼風涼著　Nitro+原作　角川スニーカー文庫）／『斬魔大聖デモンベイン外伝』（古橋秀之著　Nitro+原作　角川スニーカー文庫）／『クトゥルフ神話TRPG』サンディ・ピーターソン他著　エンターブレイン）／『クトゥルフ・モンスター・ガイドⅠ・Ⅱ』（サンディ・ピーターソン著　中山てい子訳　ホビージャパン）／『LOVECRAFT a Biography』（L.Sprague de Camp著　Ballantine Books）／『The H.P.Lovecraft Companion』（Philip A.Shreffler著　Greenwood Press）／学研ムー各号／他

ヴィジュアル版謎シリーズ

クトゥルー神話の謎と真実

監修●東雅夫
編集制作●出口富士子（ビーンズワークスLLC.）
執筆●門賀美央子／朱鷺田祐介／坂本雅之
黒史郎（「クトゥルー神話外伝　書簡に隠された悪夢」）
デザイン●新井美樹（Le moineau）
イラスト●R'it（P12-13、P30-34）／岡崎真澄（P36-48）／
Nottsuo（P3、P52-64）／小野たかし（P66-76）／
原友和（P78-88）
造形●山下昇平（「クトゥルー神話外伝　書簡に隠された悪夢」）
撮影●福島正大（P4-9、P14-21）
協力●沼由美子／柏木しょうこ／劇団夢現舎／
株式会社エストール

写真協力●shutterstock／紀田順一郎／東雅夫／
学習研究社写真資料室　他

編集長●宍戸宏隆
発行人●大沢広彰
印刷●大日本印刷株式会社
製本●古宮製本株式会社
発行●株式会社学習研究社

ヴィジュアル版 謎シリーズ

クトゥルー神話の謎と真実

2007年12月9日 第1刷発行

編 集 長：宍戸宏隆
発 行 人：大沢広彰
印　　刷：大日本印刷株式会社
製　　本：古宮製本株式会社
発　　行：株式会社学習研究社
〒145-8502 東京都大田区上池台4-40-5

お客様へ
●ご購入、ご注文はお近くの書店でお願いいたします。
●この本に関するお問い合わせは下記までお願いいたします。
【文書】〒146-8502 東京都大田区仲池上1-17-15 学研第2ビル
学研 お客様センター「クトゥルー神話の謎と真実」係
【電話】内容に関するお問い合わせ／03-5447-2317（編集部）
在庫・不良品のお問い合わせ／03-5496-0637（雑誌販売室）
その他のお問い合わせ／03-3726-8124（学研お客様センター）

ヴィジュアル版 謎シリーズ クトゥルー神話の謎と真実

プロローグ クトゥルー神話世界への旅
Prologue Journey to the World of Cthulhu Mythos

クトゥルー神話外伝「書簡に隠された悪夢」／
暗黒神話の伝道者 H・P・ラヴクラフト伝／
禁断の魔道書『ネクロノミコン』の秘密／他

第1章 戦慄のクトゥルー神話集
Chapter1 The Terror Myths of Cthulhu

「クトゥルーの呼び声」／「インスマスを覆う影」／「ダニッチの怪」／
「狂気の山脈にて」／「墳丘の怪」／「永劫の探究」

第2章 古き神々と異形のものどもの世界
Chapter2 The World of "Great Old Ones"

クトゥルー／アザトース／ヨグ＝ソトース／クトゥグア／ハスター／
ナイアルラトホテップ／ツァトゥグア／〈古のもの〉／〈大いなる種族〉／他

第3章 禁断の扉を開く忌まわしきアイテム
Chapter3 The Arcane Items for the Forbidden Doors

ネクロノミコン／ルルイエ異本／エイボンの書／ナコト写本／無名祭祀書／
エルトダウン・シャーズ／セラエノ断章／輝くトラペゾヘドロン／銀の鍵／他

第4章 闇の真実に導かれし者たち
Chapter4 People Led by the Truth of Darkness

アブドゥル・アルハザード／ウェイトリイ一族／ジョウゼフ・カーウィン／
ラバン・シュリュズベリイ／タイタス・クロウ／ランドルフ・カーター／他

クトゥルー神話資料館
Library of Cthulhu Mythos

クトゥルー神話大系作品100選／クトゥルー神話入門ガイド〈小説編〉〈ゲーム編〉／用語事典

Gakken

ISBN978-4-05-604993-0

C9498 ¥933E

雑誌62553-67
Ⓗ2008年12月
GAKKEN 1860499300
定価980円 本体933円